

靈界物語 第二二卷 如意寶珠 西の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第二二卷』愛善世界社

1997(平成9)年08月14日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序文 じよぶん

凡例 はんれい

總説 そうせつ

第一篇

暗雲低迷 あんうんていめい

第一章

玉騷疑 たまさわぎ〔六九三〕

第二章 探り合ひ〔六九四〕

第三章 不知火〔六九五〕

第四章 玉探志〔六九六〕

第二篇 心猿意馬

第五章 壇の浦〔六九七〕

第六章 見舞客〔六九八〕

第七章 嚙語〔六九九〕

第八章 鬼の解脱〔七〇〇〕

第三篇 黄金化神

第九章 清泉〔七〇一〕

- 第一〇章 美と醜〔七〇二〕
第一章 黄金像〔七〇三〕
第二章 銀公着瀑〔七〇四〕

第四篇 改心の幕

- 第一三章 寂光土〔七〇五〕
第一四章 初稚姫〔七〇六〕
第一五章 情の鞭〔七〇七〕
第一六章 千萬無量〔七〇八〕

第五篇 神界經綸

- 第一七章 生田の森〔七〇九〕

第一八章 布引の瀧〔七二〇〕

第一九章 山と海〔七二一〕

第二〇章 三の魂〔七二二〕

~~~~~

序文

過、現、未三界を通じたる宇宙精神の片鱗を漏らせし靈界物語も、漸く二十二卷、原稿用紙二萬六千七百餘枚に達しました。其の中に於て最も執着心を戒めたるは、本巻の物語であります。

今日まで現界の何人にも發表されざりし靈界の物語、成る可く誤りなきやうと焦慮しつつ口述致しましたが、何分凡夫の身を以て廣大無邊の宇宙の意思たる神意並びに出來事や、状況を述ぶるのでありますから、口述者が幾十年かの後、靈界に到つた時、神々より天下に誤謬を傳へた『太い奴』とお目玉を頂戴すること

の恐ろしき思ひに沈みつつ、止むを得ず口述したのであります。

神界の大神より本書を御覧になれば、九牛の一毛にも及ばず、且つ群盲象評的脱線物語をしようつたと叱責さるるは當然であります。併し私は靈界へ行つた時、大神様に平身低頭陳謝するの覺悟を以て、舍身的に何神様かに口を藉して使つて貰つて居る計りでありますから、何れ各階級の神々が、思ひ思ひの物語を遊ばし、當世の學者智者をして失笑せしめ、輕侮の念を抱かしむるやうなことも澤山あるでせう。

ア、善言美辭鐵道の汽車が脱線しました。皆さん、御用心あれ。

大正十一年 舊五月三日 於松雲閣 王仁識

## 凡例

一、昨年十月十八日より始められました靈界物語の口述筆録も、本年五月廿八日を以て二十二巻を完了し、ほつと一息した次第であります。其間の日數二百二十

三日、大祭とか、節分祭其他休むだに日数を加へて、恰度十日に一冊の割合であります。左に各巻の口述日数を表示して御覽に供します。

巻 口述日数 口述場所 備考

第一 八日 松雲閣 本巻に限り第十三章以後の日数とす

第二 十三日 右同 本巻第一章（通章第五十一章）口述の夜毒松茸にあてられ閉口す

第三 十四日 瑞祥閣龍宮館 前半は龜岡の瑞祥閣にて後半は教主殿龍宮館にて口述さる

第四 十五日 龍宮館 口述者自ら筆録されし箇所は本巻に最も多し

第五 十日 龍宮館岩井温泉 口述筆録の方が主か入湯の方が主か分らんやうな生活をしながら、五、六の二巻を完了す

第六 八日 岩井温泉

第七 四日 錦水亭 岩井温泉より歸綾後節分祭までの四日間に完結す



第八 五日 瑞祥閣 高熊山に參拜せし後口述筆録にとりかかる

第九 六日 右同 卷中身代りを立てる箇所を口述さるるや天候險惡となり風雨強かりき

第十 七日 右同 錦水亭 口述筆録に妨害を受けしは、本卷を第一とす

第十一 四日 松雲閣

第十二 五日 右同 本卷口述中蓄音器に祝詞と宣傳歌を吹き込まる

第十三 五日 右同

第十四 三日 松雲閣 本卷は總章數十七より成り通章五百六十七章を末尾とす

第十五 五日 錦水亭 天國樂土の狀況廿一世紀以後の有様を口述しあり

第十六 四日 錦水亭 瑞祥閣 本卷より始めて今の日本國に起れる事を説き十里四方宮の内の三十五萬年前を口述しあり

第十七 三日 右同

第十八 四日 右同 彌仙山の因縁が口述されあり

第十九 五日 松雲閣

第二十 三日 右同錦水亭

第二十一 五日 松雲閣

第二十二 五日 右同 本卷完了の日靈鷹五六七殿内を飛び廻ること三回

(註) 第一卷、第二卷、第十一卷、第十二卷、第廿二卷を松雲閣に於て口述されし事と、本年舊三月三日迄に五六七大神に因める第十四卷第五百六十七章の口述を終られし事と舊五月五日までに口述者瑞月大先生の誕生日なる舊七月十二日に因縁ある第廿二卷第七百十二章迄を口述されし事と總體の筆録者數が三十三名なりしは惟神的話はいへ、實に不思議と謂はねばなりません。

一、本卷には各巻中でも、最も執着心を取除くことに努むるのが肝腎であること口述され、又第一巻に示されたる地獄や鬼は、皆心の執着から生れ出づるもので、決して今の行刑所や押丁の様に備はつて居るのではないと口述されてありますから、一應讀者に御注意を促して置きます。

一、本巻は前巻までを順序よく讀まなくとも、全然要領を得られぬといふやうな事は無く、本巻を讀んだだけでも解り易く完結されてあります。

一、本巻の原稿紙は千二百二十三枚でありましたが、不思議にも五百六十七枚目に五六七大神の御出現（黄金像）と、其の貴重なる御教示が始まつたのであります。

ア、月光菩薩は五十二歳にして、其の胎藏されし苦集滅道を説き、娑婆即寂光淨土の眞諦を述べ、道法禮節を遺憾なく開示して居られるのであります。

大正十一年五月廿八日 綾部竝松和知川畔松雲閣にて

### 編者識

### 總説

天の下に生きとし生ける萬物の中にありて、最も身魂の勝れたる人間には、天

より上中下三段の御靈を授けて、各自の御靈相應に世界經綸の神業を負はしめ給ひ、天國の状態を地上に移してそれぞれ身魂の階級を立別けられてあるけれども、今の世は身魂の位置顛倒して靈肉一致の大道破れ、八頭八尾の邪靈や金毛九尾の悪狐の靈や邪鬼の靈魂なぞ人類の精神を誑惑し、終には地上の世界を體主靈従、弱肉強食の暗黒界と化せしめたるため、今の世界の慘状である。是だけ混亂した社會を何とも思はぬやうに成つたのも、地上の人類が皆邪神の靈魂に感染し切つて居るからである。

天下經綸の神業に奉仕すべき人類の御魂が全然脱退て了ひ、九分九厘まで獸畜の心に墮落して世界は上げも下しも成らぬやうになり、彼方の大空より此方の空へ電火のひらめくが如き急變事の突發せずとも斷定しがたい。世界の人類は一日も早く眼を覺し、誠一つの麻柱の道によりて靈魂を研き、神心に立歸らねばならぬ。

眞心とは天地の先祖の大神の大精神に合致したる清淨心である。至仁至愛にして萬事に心を配り意を注ぎ、善事に遭ふも凶事に遇ふも、大山の泰然として動か

ざるが如く、微軀つかず、焦慮らず、物質欲に淡泊く、心神を安靜に保ち、何事  
も天意を以て本となし、人と争はず能く耐へ忍び、宇宙萬有一切を我身魂の所有  
となし、春夏秋冬、晝夜風雨雷電霜雪、何れも言靈の御稜威に服従するまでに到  
らば、始めて神心を發揚し得たのである。又小三災の饑病戰、大三災の風水火に  
攻められ、如何なる艱苦の淵に沈む時ありとも介意せず、幸運に向ふも油斷せず、  
生死一如と心得、生死に對しては晝夜の往來を見るが如く、世事一切を神明の御  
心に任せ、好みなく憎みなく、義を見ては進み、利を見て心を悩まさず、心魂常  
に安靜にして人事を見る事、流水の如く天地の自然を樂しみ、小我を棄て大我に  
合し、才智に頼らず、天の時に應じ、神意に隨ひ、天下公共の爲に舍身の活動を  
爲し、萬難に撓まず屈せず、善を思ひ、善を言ひ、善を行ひ、奇魂の眞智を照ら  
して大人の行ひを備へ、物を以て物を見極め、他人の自己に等しからむことを欲  
せず、心中常に蒼空の如く、海洋の如く二六時中意思内にのみ向ひ、自己の獨り  
知る所を慎み、その力量才覺を人に知られむことを望まず、天地の大道に従つて  
世に處し、善言美辭を用ゐ、光風霽月少しの遲滞なく神明の代表者たる品位を保

ち、自然にして世界を輝かし、心神虚しくして一點の私心なき時は、その胸中に  
永遠無窮の神國あり、至善至美至眞の行動を勵み、善者又は老者を友とし、之を  
尊み敬まひ、悪人愚者劣者を憐み、精神上に將又物質上に恵み救ひ、富貴を羨ま  
ず貧賤を厭はず侮らず、天分に安んじ社會のために焦慮して最善を竭し、富貴に  
處しては神國のために神魂を傾け、貧に處しては簡易なる生活に感謝し、我欲貪  
欲心を戒め、他を害せず傷つけず、失敗來るも自暴自棄せず、天命を樂しみ、人  
たるの天職を盡し、自己の生業を勵み、天下修齋の大神業に参加する時と雖も、  
頭腦を冷靜に治めて周章ず騒がず、神魂洋洋として大海の如く、天の空しうして  
百鳥の飛翔するに任せ、海の廣大にして魚族の遊躍するに任すが如く不動にして、  
寛仁大度の精神を養ひ、神政成就の神業を輔佐し、假令善事と見るも神界の律法  
に照合して悪ければ斷じて之を爲さず、天意に従つて一々最善の行動を採り、昆  
蟲と雖も妄りに傷害せず、至仁至愛の眞情を以て萬有を守る。又亂世に乗じて野  
望を起さず、至公至平の精神を持するの人格具はりたる時は、即ち神人にしてそ  
の神魂は即ち眞心であり神心である。

利害得失のために精神を左右にし、暗黒の淵に沈み良心を傷め、些少の事變に際して狼狽し、忽ち顔色を變へ、體主靈從、利己主義を専らとするものは、小人の魔心より來るのである。内心頑空妄慮にして、小事に心身を傷り乍ら表面を飾り、人の前に剛膽らしく、殊勝らしく見せむとするは、小人の好んで行ふ所である。靈界を無視し萬世生き通し生死往來の神理を知らず、現世の外に神界幽界の儼存せる事を辨へず、故に神明を畏れず、祖先を拜せず、單に物質上の欲望に驅られて、天下國家のために身命を捧ぐる眞人を罵り嘲り、死を恐れ肉體欲に耽り、肝腎の天より使命を受けたる神の生宮たることを忘却する小人數多現はれ來る時は、世界は日に月に災害と惡事續發し、天下益々混亂し、薄志弱行の徒のみとなり天命を畏れず、誠を忘れ利欲に走り、義を辨へず富貴を羨み嫉み、貧賤を侮り己より勝れたる人を見れば、従つて學び且つ教へらるることを爲さず、却つて之を譏り嘲り己れの足らざる點を補ふことを爲さず、善にもあれ惡にもあれ、己を賞め己に隨從するものを親友となし、遂に一身上の災禍を招き、忽ち怨恨の炎を燃やすもの、是魔心の結實である。執着心強くして解脱し能はず、自ら地獄道を

造り出し邪氣を生み、自ら苦しむもの天下に充滿し、阿鼻叫喚の慘状を露出する  
社會の慘状を見たまひて至仁至愛の大神は坐視するに耐へず、娑婆即寂光土の眞  
諦を説き、人生をして意義あらしめむとの大慈悲心より、胎藏せし苦集滅道を説  
き、道法禮節を開示したまひたるは、此の物語であります。非は理に克たず、理  
は法に克たず、法は權に克たず、權は天に克たず、天定まつて人を制するてふ眞  
諦を、神のまにまに二十二卷まで口述し了りました。神諭に曰ふ、  
三月三日、五月五日は變性女子に取りて結構な日柄である云々』  
と、いよいよ大正十年九月八日に神命降り十日間の齋戒沐浴を了つて、同十八日  
より口述を始め、大正十一年壬戌の舊三月三日迄に五六七の神に因みたる五百六  
十七章を述べたへ、續いて五月五日までに瑞月王仁に因みたる七百十二章を惟神  
的に述べ了りたるも、又神界の御經綸の毫も違算なきに驚歎する次第であります。  
本年五十二歳の瑞月が、本書を口述し始むるや、パリサイ人の批難攻撃相當に現  
はれ、隨分編輯者以下筆録者も甚だしく苦しまれたのですが、神助の下に辛ふじ  
て本巻まで口述筆記を終り、神龍の片鱗を爰に開示し得たるを、大教祖の神靈に



謹つしんで感謝かんしゃし奉たてまつり、外山とやま豊二とよじを始め加藤かとう女史ぢよし、松村まつむら眞澄まさずみ、谷村たにむら眞友まさとも、近藤こんどう貞二ていじ、  
谷口たにぐち雅治まさはる、櫻井さくらゐ重雄しげを、北村きたむら隆光たかてる、山上やまがみ女史ぢよしその他たほん本書しよくわんけい關係の諸氏しよしが渾身こんしんの努力どりよくを、  
茲ここに謹つしんで感謝かんしゃする次第しだいであります。

大正十一年五月二十八日 舊五月二日 於松雲閣

## 第一篇 暗雲低迷

## 第一章 玉騷疑（六九三）

天あめと地つちとの元津御祖もとつみおや、國治立大神くにはるたちのおほかみは、醜しこの曲津まがつの猛たけびに依よりて是非ぜひなく豊國とよくにひめのみ姫み  
尊ことと共に、獨身神ひとりがみとなりまして御身みみを隠かくし給たまひ、茲ここに大國治立尊おほくにはるたちのみことの御子みこと坐ましま  
す神伊奘諾大神かむいざなぎのおほかみ、神伊奘册大神かむいざなみのおほかみの二柱ふたはしら、天津大神あまつおほかみの御言みことを畏かしこみ、海月くらげなす漂ただよへる

國を造り固め成さむとして、神勅を奉じ、天の浮橋に立ち、泥水漂ふ豊葦原の瑞穂國を、天の瓊矛を以て、シオコヲ口、コヲ口に掻き鳴し給ひ、滴る矛の雫より成りしてふ自轉倒島の天教山に下り立ち、天の御柱、國の御柱を搗き固め、撞の御柱を左右りより廻り會ひ再び豊葦原の中津國を、神代の本津國に復さむと、木花姫命、日の出神と言議り給ひて、心を協せ力を盡し、神國成就の爲に竭し給ひしが、天足彦、胞場姫の靈より現はれ出でたる醜の曲津見、再び處を得て、縦横無盡に暴れ狂ひ、八百萬の神人は又も心抜けて、あらぬ方にと赴きつ、復び世は常闇となりにけり。

茲に天照大御神、神素盞鳴大神は伊奘諾命の御子と現れまして天津神、國津神、八百萬の神人に誠の道を説き諭し給ひしが、世は日に月に穢れ行きて、畔放ち溝埋め、樋放ち頻時き串差し、生剥ぎ逆剥ぎ、屎戸許々太久の罪、天地に充滿し、生膚斷、死膚斷、白人胡久美、己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、畜犯せる罪、昆蟲の災、高津神の災、高津鳥の災、畜殮し蟲物せる罪、許々太久の罪出で來り、世は益々暗黒の雲に閉され黑白も分か

ずなり行ききたれば、素盞鳴大神は葦原國を治め給ふ術もなく日夜に御心を碎かせ給ひ、泣き伊佐知給へば、茲に神伊奘諾命、天より降り給ひて、素盞鳴尊にその故由を問はせ給ひ、素盞鳴尊は地上の罪惡を一身に引受け、部下の神々又は八岐大蛇醜神の曲を隠し、我が一柱の言心行惡しき爲なりと答へ給へば、伊奘諾大神は怒らせ給ひ、

ここに汝は海原を知食すべき資格なければ、母の國に臻りませ』  
と嚴かに言宣り給へば、素盞鳴尊は姉の大神に事の由を委細に申し上げむと、高天原に上り給ふ。此時山川草木を守護せる神々驚きて動搖し、世はますます暗黒となりければ、姉大神は弟神に黒き心ありと言擧げし給ひ、茲に天の安河を中に置き、天の眞奈井に御禊して、嚴之御魂、瑞之御魂の證明し給ひ、姉大神は變性男子の御靈、弟神は變性女子の御靈なる事を宣り分け給ひぬ。

素盞鳴尊に従ひませる八十猛の神々は大に怒りて、  
『吾が仕へ奉る素盞鳴大神は清明無垢の瑞靈に坐しませり。然るに何を以て吾が大神に對し、黒き心ありと宣らせ給ひしか』

と怒り狂ひて、遂に姉大神をして天の岩戸に隠れ給ふの已むなきに到らしめたのは、實に素盞鳴尊の爲に惜しむべき事である。

茲に素盞鳴大神はいよいよ千座の置戸を負ひ給ひ、吾が治せる國を姉大神に奉り、高天原を下りて、葦原の中津國に騷れる曲津神を言向け和し、八岐大蛇や醜狐、曲鬼、醜女、探女の靈を清め、誠の道に救ひ、完全無缺、至善至美なる三口の神政を樹立せむとし、親ら漂浪の旅を續かせ給ふ事となつた。

大洪水以前はエルサレムを中心として神業を開始し給ひしが、茲に國治立尊の分靈國武彦と現はれて、自轉倒島に下りまし、神素盞鳴大神と共に五六七神政の基礎を築かせ給ふ事となつた。それより自轉倒島は、いよいよ世界統一の神業地と定まつた。

顯國玉の精より現はれ出でたる如意寶珠を始め、黄金の玉、紫の玉は、神界における三種の神寶として、最も貴重なる物とせられて居る。此三つの玉を稱して瑞の御靈と云ふ。此玉の納まる國は、豊葦原の瑞穂國を統一すべき神憲、惟神に備はつて居るのである。

茲こゝに國治立命くにはるたちのみことは天てん教山けつざんを出入でいりぐち口ぐちとなし、豊國とよく姫神にひめのかみは鳴門なるとを出入でいりぐち口ぐちとして、地上ちじやうの經綸けいりんに任にんじ給たまひ、永ながく世よに隱かくれて、五み六ろく七しち神政成就しんせいじやうじゆの時とき機きを待またせ給たまひぬ。素すさのをのみこと蓋鳴尊さいめいそんは其分そのわけ靈言れいごん靈別命れいべつめいを地中ちちゆうに隱かくし、少彦名命すくなひこなのみこととして神業しんげふに參加さんかせしめ給たまひしが、今いま又また言こと依別命いべつめいと現あらはして、三さん種しゆの神寶しんぼうを保護ほごせしめ給たまふ事こととなつた。言依別命ことよりわけのみことの神業しんげふに依よりて、三さん種しゆの神寶しんぼうは錦にしきの宮みやに納をさまり、いよいよ神政成就しんせいじやうじゆに着手ちやくしゆし給たまはむとする時とき、國治立命くにはるたちのみことと豊國とよく姫神にひめのみことの命めいに依より、未いまだ時機とき尚早しやうそうなれば、三さん千せん世界せかい一いち度どに開ひらく梅うめの花はなの春はるを待まちて三さん箇この神寶しんぼうを世よに現あらはすべしとありければ、言依別命ことよりわけのみことは私ひそかに神命しんめいを奉ほうじて、自轉倒島おのころじまの或地あるちてん點てんに深ふかく隱かくし給たまひし御神業ごしんげふの由來ゆらいを本卷ほんくわんに於おいて口述こうじゆつせむとす。有形いうけいにして無形むけい、無形むけいにして有形いうけい、無聲むせいにして有聲いうせい、有聲いうせいにして無聲むせいなる神變しんぺん不可思議ふかしぎの神寶しんぼうなれば、凡眼ほんがんを以もつて見みる事能ことあたはざるは固もとよりなり。

風こがら荒すさぶ冬ふゆの夜よの  
心こゝろにかかかる黒雲くろくもの

月つきの光ひかりを浴あびながら  
晴はるる隙ひまなき黒姫くろひめが

ことよりわけのみこと  
言依別命より 言ひつけられて人知れず

納め置きたる黄金の 玉の在處を調べむと

丑満時に起き出でて 獨りスゴスゴ四尾山

麓の一つ松が根に 匿まひ置きし石櫃の

そつと蓋をば開き見て 思はずドツと打倒れ

吾責任も玉無し の 藻脱の殻の悲しさに

如何はせむと起き直り 思案に暮れて居たりしが

忽ち人の足音に 氣を取直し立ちあがり

木蔭を索めて歸り行く。

窺ひ寄つたる二人の男、松の根元に立寄りて、

甲「ヤア黒姫さまの様子が怪しいと思つて跟いて来たが、大方これは蜈蚣姫が占

領して居つた黄金の玉を、言依別命から信任を得て、黒姫が隠して置きよつたの

だなア」

乙「併し黒姫さまは蓋を開けるが早いか吃驚して尻餅を搗いたぢやないか。大方紛失して居たのぢやあるまいかな。そんな事だつたら、黒姫もサツパリ駄目だかなア」

「あんまりの玉の光に驚いて、尻餅を搗いたのだらう、それに定つて居るよ。誰ひとり一人こんな所に隠して置いたつて、探知する者がないからな。肝腎の紫姫さまでさえも御存じない位だから……」

「イヤどうも怪しい黒姫の姿、影が薄い様だ。一つそつと尋ねて見ようぢやないか。グツグツして居ると、姿が分らなくなつて了ふよ」

「サ、早く往かう。最早姿が見えなくなつたぢやないか」

とキヨロキヨロ其處らを見廻して居る。忽ち下手の溜池にバサリと人の飛び込む水音、二人は驚いて池の邊に駆けつけ見れば、何の影もなく、唯水面を波が圓を描いて揺らいで居る。月の影さへも砕けて、串團子の様に長く重なり動いて居る。甲「ヤア此處に履物が一足脱いである。こりや【てつきり】黒姫さまのだ。ヤア大變だ、カーリンス、貴様は早く歸つて言依別様に申し上げ、大勢の信者を引率

して救援隊を繰出して呉れ。俺はそれ迄此處に保護して居る」

「馬鹿言ふない。グツグツして居る間に縋れて了ふぢやないか」

と云ふより早く、カーリンスは、薄氷の張りかけた池に、赤裸となつて飛び込み、水を潜つて黒姫を引抱へ、漸くにして救ひあげた。黒姫は最早蟲の息となつて居る。

「オイ、テーリスタン、誰にも此奴ア、様子を聞く迄極秘にして置かなくては、黒姫さまの爲にはよくなからうぞ。兔も角俺も寒くて體が凍てさうだ。そつと此處で火を焚いて黒姫様の體を温めて息を吹き返さすのが第一だ。オイ貴様早く、そつと歸つて二人の着物を……何でも良いから持つて來て呉れ」

「ヨシ合點だツ」

とテーリスタンは黒姫の館へ駆けつけ、そつと衣服を二人前、小脇に抱い込み歸つて來た。其間に黒姫は息を吹き返して居た。テーリスタンは息を喘ませながら、  
「サア漸く持つて來た。早く着て呉れ。寒かつただらう」  
「ア、それは御苦勞だつた。サア黒姫さま、兔も角これを着て下さい」



「お前はテー、カーの兩人ぢやないか。なぜ妾の折角の投身を邪魔なさるのだい。どこまでも妾を苦しめる心算かい」

カーリンス「コレ黒姫さま、チツと確りなさらぬか。お前さまは精神に異状を來して居るのだらう。生命を助けて貰つて不足を云ふ者が何處にありますか。なア、テーリスタン。御苦勞だつた位云つても、あんまり損はいくまいに………こんな怪體な事を聞いたことはないのう」

テーリスタン「コレ黒姫さま、お前さまが覺悟で陥つたのか、過つて陥つたのか………そら知らぬが、吾々二人は生命を的に、此寒いにお前さまの生命を助けたのだ。なぜそんな不足さうな事を言ふのだい」

「妾はどうしても生きて居られぬ理由があるのだよ。どうぞ死なしてお呉れ」と又もや驅け出さむとするを、カーリンスは大手を擴げ、

「待つた待つた、死んで花實が咲く例しがない。假令どんな事があつても、死んで言譯が立つものか。却て神界に於て薄志弱行者として冥罰を受けねばなるまい」

「何と云つても死なねばならぬ理由がある。どうぞ助けてお呉れ」

□ 助けて上げたぢやないか□

□ 助けると云ふのは、妾の自由に爲して呉れと云ふのだよ□

□ 自由にするとはい、そりや又どうすると云ふのだい。一日でも生きよう生きよう

とするのが人間の本能だ。死ぬのを助かるとはチツと道理に合はない。そこまで

お前さまも覺悟をした以上は、どんな活動でも出来るだらう。生命を的に神界の

爲に活動し今迄の罪を贖ひし上、神様のお召しに依つて國替するのが本當だよ□

テーリスタン □ 此位な道理の分らぬ貴女ぢやないが、何故又さう分らぬのだらう

かナア□

□ 何も彼もサツパリ分らぬ様になつて來ましたよ□

□ お前さま、言依別命様より保管を命ぜられた、黄金の玉を紛失したのだらう□

□ 何ツ、それが如何してお前に分つたのか□

□ 私は貴女がチヨコチヨコ夜分になると、宅を出て往ゆくので、此奴ア不思議だ

と、二人が何時も氣を付けて居つたのだ。さうすると、四尾山の一本松の麓へ行

つて居らつしやる。今日も今日とて不思議で堪らず、來て見れば、お前さまは松

木の根元で、唐櫃を開いて腰を抜かしなすつただらう。【てつきり】黄金の玉を誰かに盗まれ、其責を負うて自殺しようとしたのだらうがナ

何ツ、お前は何時も妾の行動を考へて居たのか。油断のならぬ男だ。そんなら其玉の盜賊はお前達兩人に間違なからう……サア有態に仰有れ

これはしたり、黒姫さま。それは何と云ふ無理を仰有るのだ。能う考へて御覽なさい。吾々兩人が其玉を假りに盗んだとすれば、どうしてお前さまを助けるものかい。池へ陥つたのを幸に、素知らぬ顔をして居るぢやないか

兔も角、あの松の木の下へは、お前達二人、何時も來ると云ふぢやないか。玉の在處を知つた者が盗らいで誰が盗らう。何と云つても嫌疑のかかるのは當然ぢや。妾もあの玉に就ては生命懸に保護をして居るのだから、お前の生命を奪つても白状させねば置かぬのだよ

とカーリンスの胸倉をグツと握り、首を締め、  
「サア、カーリンス、玉の在處を白状しなさい」

テーリスタン「コレコレ黒姫さま、何をなさいます。あんまりぢや御座いませぬ

か

「エー喧しい。お前も同類だ。白状せぬと、カーリンスの様に揉み潰して了はうか。二人が共謀して居るのだから、見せしめに此奴の息の根を止め、次にお前の番だから、其處一寸も動くこたアならぬぞえ」

「ア、苦しい苦しい。オイ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、婆アさまを退けて呉れ、息がト、ト止まる」

と聲も絶え絶えに叫んで居る。テーリスタンは已むを得ず、黒姫の腰帶をグツと握り、力に任せて後へ引いた。黒姫は夜叉の如く、聲も荒らかに、

「モウ此上は破れかぶれた。汝等二人白状すれば可し、白状致さねば冥途の道伴にしてやらう」

と死物狂ひに兩人に向つて飛び付き来る其の凄じさ。二人は、

「黒姫さま、待つた待つた。私ぢやない。さう疑はれては大變な迷惑を致します

よ

「ナニ、貴様は高春山で悪い事ばかりやつて居た奴だから、また病氣が再發した

のだ。改心かいしんしたと見みせかけ、鷹依たかより姫ひめと謀しめし合あはして、此この玉たまを盗とり、尚なほ其その上うへ如意に寶よいの珠ゆの玉たまを持もつて逃にげる計たく畫みに違ちがひない。ア、さうなると、妾わしも今いま死しぬのは早はやい。お前まへ達の計たく畫みをスツカリと素す破つ抜ぬいて、根底こんていから覆くつへさねばならないのだ。サア如ど何うぢや、何處どこへ隠かくした。早はやく言いはぬかい」

テ、カー兩人りやうにんは泣なき聲こゑになつて、

「モシモシ黒くろ姫ひめさま、それはあまり殘ざん酷こくぢやありませんか」

「ナニ、どちらが殘ざん酷こくだ。妾わしに是これ丈だけの失しつ敗ぱいをさせて置おいて、白しろ々じらしく、知しらぬ存ぞんぜぬの一點い張つてん張はりで貫つき通とほさうと思おもつても、此この黒くろ姫ひめが黒くろい眼めでチヤンと睨にらんだら間ま違がひはないのだよ。斯かう云いふ所ところで愚ぐ圖づ々づして居をると人ひとに見み付つかつては大たい變へんだ。サア妾わしの館やかたまでそつと出でて來きなさい。ユツクリと話はなをして互たがひに打うち解とけて、玉たまの在あり處かをアツサリ聞きかして貰もらひませう。さうすれば妾わしも結け構こうなり、お前まへも言こと依より別わけ命のみ様ことにさまとりなして幹部かんぶに入いれてあげる。何時いつまでも妾わしの宅うちに門番もんばんをして居をつても詰つまらぬからナア……」

テ、カ「ハイ、そんなら御言葉おことばに従したがひ、お宅たくへ參まゐりませう」

「ア、それでヤツと安心した。素直に在處を白状するのだよ」  
「ハテ、困つた事だなア」  
と二人は思案に暮れてゐる。

(大正一一・五・二四 舊四・二八 松村眞澄録)

## 第二章 探り合ひ(六九四)

言依別に託されし、黄金の玉の行方をば、見失ひたる黒姫は、テーリスタンや  
カーリンス、二人の男に疑ひを、抱きながらにトボトボと、己が館に立ち歸り、  
二人を前に坐らせつ、茶の湯を進め機嫌をとり、威しつ慊しつ訊ぬれば、素より  
二人は白紙の、疚しき所【なく】涙、聲を絞つて辨解すれど、容易に晴れぬ黒姫  
の、胸に心を悩ませつ、互に顔を見合せて、如何はせむと腕を組み、差俯向いて  
默然たるぞ憐らしき。

黒姫「人間は神様の生宮だから、何處までも正直にせなくてはなりませんぞや。如何なる罪科があつても、悔い改めたならば大神様は、神直日大直日に見直し、聞直し、宣直して下さるのだ。此の世の中は、隅から隅まで日月の如く明かなる神様の御支配であるから、どんな小さいことでも神の御眼を眩ますことは出来ない。「わづか」の此の世で目的を達しても、永遠無窮の神界で苦しみを受けるやうなことが出来ては大變な不利益だから、私は神様のため、世人のため、又お前達兩人の身魂の幸福のために云ふのだから、綺麗薩張と玉の在處を知らしておくれ。何時まで腕組思案してゐた處で、悪が善に復る筈はない。盗むと云ふ一事は何處迄も萬劫末代消えませぬぞえ。サ、あまり世間にパツとせない間、私に一伍一什を白状して下さい。私の落度にもなり、お前さまの罪にもなるのだから、今の間に私に白状しさえすれば、此場限りで何處も彼も天下泰平無事安穩に治まる譯だから。サア、テリスタン、カーリンス、早く素直に言つておくれ」

テリスタン「これは又してもお訊ねですが、何と仰有つても知らぬ事は知らぬと答へるより外に途が無いぢやありませんか」

「エー又しても白ツぱくれなさるのか。さてもさても分らぬ人だなア。これこれ  
カーリンス、お前は正直者だ。私を助けて呉れただけあつて、何處ともなしに徳  
のある顔をして居る。神様のお姿みたやうだ。屹度お前は靈肉共に清淨潔白だか  
ら、テーリスタンに對し堅い約束を破つてはならないと隠してゐるのだらうが、  
そんな心遣は要らぬ事だ。事の輕重大小により考へて見なさい。お前が私に全然  
白状をしたと云つても、決してテーリスタンを苦しめるのでも責めるのでもない。  
畢竟テーリスタンも、私も、お前も大慶だし、ツイ當座の出來心だから。若い時  
には誰しもある事だから、屹度神様は見直し聞直し、宣直して下さる。私も何程  
お前が悪うても、見直し、聞直し、初の心で今までの事は川へサラリと流し、心  
許して交際をさして貰ふから、さア、チャツとカーリンス、言はつしやいよ」  
カーリンスは頭を掻きながら、  
「ヘイ貴女の御言葉はよく分つて居ります」  
「さうだらう、分つたぢやらう。矢張りお前はテーリスタンとは、一寸兄貴だけ  
あつて賢い、偉いものだ。正直は此世の寶だ。なア、カーリンス」



「モシ黒姫様、知らぬことを知つたやうに云つたら、それでも誠にになりますか」  
「知つたことを知らぬと云ふのが悪いのだ。知つたことを「知つて居ります、斯様々々致しました」と言ひさへすれば、途方もない玉盗人をしたお前も、罪が消えて却て素直な奴だと大神様が譽めて下さるぞえ」  
「オイ、テーリスタン、斯んな婆さまに掛り合つたら、「とりもち」桶へ脚を突込んだやうなものだなア。何うしたらよからうか」  
「テーリスタン」それだと云つて第一吾々を日頃から大切にしてお下さる黒姫様の御難儀になるのだから、あゝして厳しう執拗くお訊ねなさるのも仕方がない。黒姫様のお立場になれば無理もないよ。ぢやと云つて吾々兩人は本當に迷惑だなア」  
「お前達其處迄物が分つて居りながら、何故私を焦らすのだい。盗人猛々しいとはお前達のことだよ。他が温順しく出れば【つけ】上り、齒抜けが蝟を噛むやうにグチャグチャと齒切れのせぬ返事ばかりして………エー辛氣臭い。困つた泥坊だなア」

と長煙管で丸火鉢をクワンクワンとはたき、眼をキリツと釣り上げ、片膝を立て

て斜しやに構かまへ息いきを喘はづませて見みせた。折柄をりからにしき錦にしきの宮みやの高樓たかどのに夜明よあけと見みえて、祝詞のりとそつじやう奏上そうじやうの始はじまる五み六ろく七しちの太鼓たいこが響ひびいて來きた。

「オイ、カーリンス、あれは五み六ろく七しちの太鼓たいこの音おと、モ一御禮おれいだ。一先ひとまづ御免ごめんを蒙かうむつて參拜さんぱいをして來こうかい」

「オ一そうだ、黒姫くろひめ様さま、ゆつくり心こころを落着おちつけて吾々われわれの無實むじつを御考おかんがへ下くださいませ。これからお詣りまゐりして來きます」

「オホ、五み六ろく七しちの太鼓たいこは、お前まへさまの爲ためには結構けつこうな助たすけ舟ぶねだ。併しかし乍ながら五み六ろく七しちでも七しち五ご三さんでもお詣りまゐりは出來できませぬよ。此この話はなしの解決かいけつがつくまで參拜さんぱいは黒姫くろひめが許ゆるしませぬ。そんな盜人ぬすとこ根性こんじやうで神様かみさまへ詣まゐつて、結構けつこうな御宮おみや様さまを汚けがすと云いふ事ことがあるものか、罰當ばちあたり奴めが、アルプス教けうの教をしへとはチツト違ちがふぞえ」

と又またもや聲こゑを尖とがらせ、火鉢ひばちを叩たたく。

テ一リスタン「オイ、兄弟きやうだい、何どうしようかな。エライこととに取とツつかまつたものだワイ」

「取とツつかまるも取とツつかまらぬも、お前まへの自業じしうじとく自得じとくだよ。心こころの鬼おにが身みを責せめる

のだ。お前は結構な身魂だが、其の心の鬼が矢張り邪魔をするのだらう。サア早く鬼を突き出して美しい身魂になつて玉の在處を知らすのだよ。大方鷹依姫の指圖でお前が隠しとるのぢやないかなア。紫の玉を氣好う獻上するなんて言ひよつて、麥飯で鯉を釣るやうな企みをしたのだらう。紫の玉が何程立派でも黄金の玉に比ぶれば何でもない。却々アルプス教に居つた奴は油斷がならぬ。ア、さうぢや、お前の事ばかり責めて居つても譯が分らぬ。大方陰から操つて居るのであらう。此の聖地へ來てから鷹依姫は、始終使ひ馴れたお前達二人を私の部下にして呉れと云つた點からが抑も疑はしい。私が黄金の玉の監督者と云ふことは、よく分つて居るのだから、屹度鷹依姫の指圖であらうがな。ホ、ホ、ホ、お前達は忠實なものだ。善にも強ければ悪にも強い。一旦主人と仰いだ鷹依姫へ、其處まで盡す親切は見上げたものだ。俄主人の黒姫に云つて下さらぬのも無理はない。アア私の了簡が間違つて居つた。ドレ是から鷹依姫を呼んで訊問してみよう」

テーリスタン「滅相なこと仰有いますな。鷹依姫さまは、そんなお方ぢやございませぬ。苟くも三五教の宣傳使龍國別さまの母上ではありませぬか。大神様の御

神徳で親子の對面が出来たと云つて、それはそれは温順しく誠の信仰に入つてゐられます。あんまり御疑ひなさるのは殺生でございますよ」

「ア、無理もない、さうでなければ人間ぢやない、感心感心。私もそんな家來をたとへ半時でも欲しいものだ。併し乍ら、よく考へて見なさい。お前は大神様の誠の道に背いても、一人の鷹依姫が大切か」

「これは聊か迷惑千萬。こんなことを鷹依姫様がお聞きにならうものなら、ビツクリして肝を潰されます」

「ソリヤ當然だよ。餘り肝玉の太い事をするに神様に睨まれ、肝が玉なしになつて了ふのは天地の許さぬ道理、オホ、、、、、さてもさても【しぶとい】代物だなア。ドレドレ五六七の太鼓が鳴つた。朝のお勤めに行つて來るから、お前達は何處にも逃げることはならぬぞえ。鷹依姫に【とつく】と言ひ聞かし、私が歸る迄に【そつ】と黄金の玉を持つて來て置くのだよ」

「ア、何うしたらよからうなア」  
と二人は吐息をつく。

黒姫は錦の宮に参拜せむと衣紋をつくるひ、紋付羽織を着し、稍稍氣分になつて道路の石を一つ一つ數へるやうな調子で「なめくぢり」の旅行式に、力なげに参拜に出掛けた後に二人は黒姫の残して置いた長煙管を握り、テーリスタンは黒姫の座席に坐り、

「これこれカーリンス、お前は餘程好い兒ぢや、さあチャツと玉の在處を云ふのだよ。何處へ隠したか、黒姫は申すに及ばず、このテーリスタンまでが側杖を食つて、終に累を鷹依姫様に及ぼさむとして居る大切な危急な場合だよ。黒姫の居る處では云ひ憎からうが、黒姫代理のテーリスタンは今まで兄弟同様に交際つて來たのだから、何一つ心遣ひは要らない。サア、言つて御覽」

カーリンス「オイオイ兄貴、お前までが何を言ふのだい。矢張り俺を疑つて居るのか」

「疑はずに居れぬぢやないか。此間俺が一緒に往かうと言つた時、貴様は親切さうに「テーリスタン、お前は風邪をひいて居るから今日は休め、俺が代りに黒姫様の御保護を見え隠れにして來る」と言つただらう。親切な正直な貴様のことだ

から、「よもや」とは思へども前後の事情から考へて見れば、何うしても貴様を疑はねばならぬのだ。お前が盗つたとより考へられないワ」

「アア、情ないことになつて来たワイ。間違へば斯うも間違ふものかなア。なんとした私は因果な生れつきだらう。天地の神様に見放されてゐるのか」

「天地の神様に見放されようと見放されまいと、貴様の心の持ちやう一つだ。愚圖々々してゐると黒姫さまが歸つて来るぞ。早く俺に云つて了へ。さうすれば俺も責任を分擔して「隠してゐましたが實はこれです」と「つき」出して、忪へて貰ふのだから」

「オイ兄貴、一寸お前下へ降りて呉れ。俺が其處へ行かぬと話が出来ぬ」

「ヨシヨシ言ひさへすれば好いのだ。如何でもしてやらう。サア、煙草でも熏べもつてすつかり言つて了へ。俺は下へ降りて聞き役だから」

と茲に二人は位置を變じ、カーリンスは長煙管で火鉢を叩きながら眼尻を釣り上げ、

「コリヤ、テーリスタン、盗人猛々しいとは貴様のことだ。覺えのない俺に自分

の悪を塗りつけようとするのは怪しからぬぢやないか。俺が此間貴様の病氣を苦しめて親切に云つてやつたら、それを逆に取つて俺を盗人と誣めるのか。さう云ふ貴様こそ怪しい點がある。此間の晩だつた、昨夜のやうに月は出てない、鼻を撮まれても分らぬやうな時、貴様は倒れたとか、道路が分らぬとか云つて大變に時間をとつた事があるだらう。サア何處へ隠した、有體に白状せ。もう斯うなる以上は兄弟の縁切れた。併しさうは云ふものの、事實さへ白状すれば、矢張り元の兄弟だ、親友だ。鷹依姫様は既に改心なされたのだから、玉を欲しがらぬ道理はない。さすれば貴様は其の玉をもつて、三國ヶ嶽の蜈蚣姫様に献上し、バラモン教で羽振りを利かさうとする野心があるのだらう。サアサ、早く申さぬか、今迄のカーリンスとは譯が違ふぞ。閻魔が淨玻璃の鏡にかけて善惡を今に立別けて見せる。さア、如何ぢや

と力任せに火鉢を殴つた途端、細い竹の羅字はポクリと折れて、雁首はテーリスの額口に喰ひついた。

テーリスはムツと腹を立て、

『なに貴様、他に己の罪を塗りつけようとする大悪人奴』

と両手をひろげて武者振りついた。カーリンスは、

『何ッ、猪口才な』

と握り拳を固めて、無性矢鱈に黒姫の留守中に大格闘の幕が下りた。

(大正一一・五・二四 舊四・二八 外山豊二録)

### 第三章 不知火(六九五)

黒姫は錦の宮の朝參を済ませ、歸途龍國別の家に立ち寄り、奥の一室に入り鷹依姫と、ひそひそ話を始めかけた。

黒姫『鷹依姫さま、世の中に寶と云うたら何が一番だと思ひますか』

鷹依姫『私は如意寶珠よりも、黄金の玉よりも、紫の玉よりも、天地の誠が一番の寶だと考へて居ります』



「ア左様か、それは御尤も。併し貴女はその寶を如何しました」

「何分にも曇つた身魂で御座いますから、誠の寶が手に入らいで、神様に對しはづかしいことで御座います。神様は誠の玉を早く取れよと突き出して御座るのですが、何うも人間は身魂の曇りが甚いのでお貰ひ申す事が出来ませぬ。何とかして早く誠と云ふ寶を手に入れたいと朝夕祈つて居ります」

「お前さまはさうぢやありませんまい。誠の玉よりも、黄金の玉が結構なのでせう。三五教の唯一の寶、黄金の玉を、貴女こつそりと何處へ隠しましたか」

「エ、何とおつしやいます。合點の行かぬお言葉、黄金の玉が何うなつたと仰有るのですか」

「白々しい、呆けなさいますな。心に覺えが御座いませう。何とお隠しなさつても、此黒姫の目でちゃんと睨んだら外れつこはありませぬ。既にテーリスタンや、カーリンスがお前さまの命令で、黄金の玉を盗んだと云はぬばかりの口吻をして居ますよ」

「あの、テー、カーの二人がそんな事を云ひましたか。何を證據にそんな大それ

た嘘を云ふのでせうか」

「ヘン、貴女よく呆けますねえ。松の根元から掘り出しなかつた、あの黄金の玉ですよ。貴女が高春山でアルプス教の教主と云うて威張つて居られた時、徳公を聖地に入り込ませ、玉の在處を考へさして居つたぢやありませんか。あの徳と云ふ奴は蜈蚣姫に在處を知らした奴だ。それが又お前さまの三五教へ偽歸順と共に、素知らぬ顔をして入つて来て居ませうがな。眞實は彼奴の手引きで、テー、カーの兩人が私の保管して居る黄金の玉を、お前さまの指圖で盗つたに違ひありません。私も、もう命がけだ。お前さまの生首を引き抜いて、私も潔く死んで仕舞ふのだ、さあ何うだ」

と藪から棒の詰問に、鷹依姫は呆れ果て、茫然として顔を眞蒼にし、黒姫を凝視めて居る。

「悪事千里と云うて、悪い事は出来ずまいがな。併し神様は屹度赦して下さいますから綺麗薩張と白状なさいませ。お前さまは可愛い一人の息子の龍國別さまに毒茶を吞ませ、熱湯を浴びせるやうなものだ。私も假令一日でも大切な玉が紛

失して居つたと云ふことが、皆さまに知れては大變だから、何處迄も秘密を守つて、お前さまが盗んだとは云はないから、サア、ちやつと出して下さい。お前さまの身のため、龍國別さまのためだ。随分温順さうな顔をして居つて、貴女も敏腕家ぢやなア。黒姫も其腕前には感心致しましたよ。ホ、ホ、ホ、ホ、と嫌らしく笑ふ。鷹依姫は當惑顔、涙をぼろぼろと流し、

「あゝ神様、何卒此黒白を分けて下さいませ。私は今、大變の難題を蒙つて居ります」

と手を合す。黒姫は聲を尖らして、

「鷹依姫さま、馬鹿な眞似をなさいますな。そんな嘘を喰ふ黒姫とは、ヘン、些と種が違ひますぞや」

「黒姫さま、そりや貴女本氣で仰有るのですか。夢にも思はぬ難題を私に持ちかけ、自分が監督不行届の罪を塗りつけようと遊ばすのか。私もかう見えても一度は一教派の教主をして来たものだ。滅多な事を仰有ると了簡なりませぬぞや」

「了簡ならぬとは、そりや誰に云ふのだえ。此方からこそ了簡ならぬ。何と圖太

い 膽玉だなアきもだま」

「黒姫様、貴女は何か私に恨があつてそんな難題を吹きかけるのでせう。それならそれで宜敷い、私にも考へがある。お前さまの様に子のないものならそれで宜いが、私には天にも地にも一人の可愛い倅がある。そんな難題を吹つかけられて何うして倅が世の中に立つて行けませう。龍國別の母親は聖地に於て寶を盗んだと云はれては、倅どころか先祖の名迄汚すぢやありませんか。何を證據にそんな無茶な事を仰有るのだ。私は高姫様のやうに、呑んだり吐いたり、そんな藝當はよう致しませぬ。お前さまは私が腹にでも呑んで居るやうに思つて居るのでせう」

「そりや貴女の腹にありません。人の腹は外からは分りませぬからなア」

「そんなら私は潔白を示すために腹を切つてお目にかける。その代り、もし呑んで居なかつたら何うして下さる」

「玉を隠すのは腹ばかりぢやありません。土の中でも、倉の中でも、川の中でも、どつこへでも隠せるぢやありませんか。そんな「あざとい」事を云つて、黒姫を「ちよろまか」さうと思つても、いつかな、いつかな、此黒姫は些と違ひま

すから、お前さまの口車には乗りませぬぞい。オホ、  
と頤をしゃくり、肩を四角にし、舌端を唇の所へ少し出して、目まで【しばづか】

せて見せた。鷹依姫は無念さ、口惜しさに聲をあげて泣き立てる。

泣いて事が済むと思つて居なさるか、なぜ堂々と仰有らぬのだ。泣いて威さうと思つたつて、女郎の涙も同然、そんな手を喰ふ私かいな」

と又頤をしゃくつて馬鹿にする。鷹依姫は腹立たしさに益々泣き入る。聲を聞きつけて今門口に歸つて来たばかりの龍國別は走り來り、

「お母さま、何處ぞ悪う御座いますか、何うなさいました。ヤア黒姫さま、お早う御座います。母は何處か悪いのですか」

黒姫は憎々しげに、

「よう、お前は龍國別、悪けりやこそ泣くのぢやないか。息が詰つて、もののが出来なくなつたものだから泣き入るのだよ。お前の親で云ふぢやないが、ほん

とに、驚いた悪黨だ」

「黒姫さま、私の母が悪黨だとは、そりや又何うした譯で」

黒姫は「につこ」と笑ひ、

「同じ穴の狐、ようここまで信賴したものだナア。お前と云ひ、テーリスタンと云ひ、カーリンスと云ひ、これだけマア悪の四魂が揃へば、どんな悪事でも出來ますワイ。油斷も隙もあつたものぢや御座いませぬワイナア。オホ、、、、、」

斯かる處へテーリスタン、カーリンスの兩人はバラバラと入り來る。龍國別はこれを見て、

「オイ、テー、カーの二人、何だ其顔は、貴様、喧嘩でもしたのか」

カーリンス「イヤもう大變な事です。黒姫の奴、玉を盗られ、「せう」事なしに池へ身を投げ、それを吾々が助けてやつたら、あべこべに鷹依姫さまと共謀して黄金の玉を盗んだと云ふのです。黒姫さまも大切な玉の監督の役目を仕損じたのだから、何どころぢやありますまい。お察しはするが、併し吾々二人を始め、鷹依姫さままでを泥坊にするとは餘りぢやありませんか。私も終にはテーリスタンを疑ひ出し、テーリスタンは私を疑ふと云ふので、暫く大喧嘩をやつてこんな態

になつたのです。併し何うしても吾々二人を始め、鷹依姫さまは潔白です。何と  
かして黒姫さまの疑を解きたいものです」

龍國別「そりや大變だ。何は兔もあれ大切な御神寶、こりや此儘にしては置かれ

ぬ。神様に伺つて来るから、それ迄待つて居て下さい。お母さま、御心配なさい

ますな。貴女の潔白は私が承知して居ます」

黒姫「何と云つてもお前達三人を共謀者と認めます。龍國別はあんな事を云つて

尻こそばゆくなつて逃げたのだらう。オホ、、、、、どれもこれも、心に覚えがあ

ると見えて、あの詮らなさうな顔ワイな。思ひ内になれば色外に現はる、神様

は正直だ。餘り可笑しさを通り越して阿呆らしいワイのう。オホ、、、、」

と身體を揺り嘲弄する。暫くあつて龍國別は宙を飛んで歸つて來た。

黒姫「龍國別、何うだつたかな」

「神様に御神籤を伺ひましたら、時節を待てと仰有いました」

「あゝさうだらう、神様が何そんな事を仰有るものか。お前の心に覚えのある事

を…誰人が阿呆らしい。神様だつて返答なさるものかい。【テツキリ】お前達が

私を失策らさうと思つて隠したのか、但しは蜈蚣姫と氣脈を通じて御神寶を盗み出す考へだらう。そんな「あざとい」事をしたつて、その悪が何處迄やり貫けるものぢやありません。併し乍ら何うでも此玉の在處が知れぬと云へば、私は死なねばならぬ。私許りぢやあるまい、鷹依姫さま、龍國別さま、お前も腹でも切つて言ひ譯をなさらにやなるまい。さあ私から自害をするから、お前達も冥途の伴をなさいませ」

と懐劍を引き抜き吾喉に當てむとする時しも、テリスタン、カーリンスの二人は肩を揺り、

「オイ黒姫、態見やがれ、其實は鷹依姫さま、龍國別さまも知つた事ぢやないワ。このテリスタン、カーリンスの御兩人様が盗み出して、とうの昔に蜈蚣姫の手に秘藏されてあるのだよ。欲しけりや蜈蚣姫に頼んで返して貰へ。アハ、ハ、ハ、ハ、小氣味のよい事だ」

と大聲に罵り出した。黒姫は「かつ」となり、

「こりやテ、カーの兩人、この黒姫の目は間違ひなからう、大それた奴だ。さ



あ早く其玉を蜈蚣姫の手から取り還して来い。神罰が恐ろしいぞや」

テ、力「神罰が恐ろしいやうな事で、誰がそんな玉盗人をするものか。馬鹿々々

と連發する。黒姫、龍國別、鷹依姫の三人は一齊に立ち上り、

「極悪無道の蜈蚣姫に款を通ずる兩人、もはや了簡ならぬぞ」

と茲に五人は入り亂れて大喧嘩をおつ始めた。

言依別命は錦の宮の拜禮を終り、靜々と此前を通り、騒々しき物音に何事なら

むと奥へ入り來り見れば、此の騒ぎ。

言依別命「これこれ皆さま、宣傳使や信者の身を以て何喧嘩をなさるのか」

黒姫「言依別命様、此奴兩人、私が保管して居る玉を盗んだのはテ、カーだ。

蜈蚣姫に渡してやつたのだ。馬鹿者よと云うて、私等を嘲弄する不届きな奴で御

座います」

言依別命「テ、リスタン、カーリンス、お前は實に感心な奴だ。さうなくてはな

らぬ、三五教の信者の龜鑑だ。誠の玉を能くも手に入れたなア」

テ、カーの二人は嬉し涙に暮れて、

『ハイハイ』

と云つたきり疊たたみに食くひついて泣ないて居ゐる。

黒姫くろひめ 『モシモシ言依別命様ことよりわけのみことさま、お前様まへさまは何なんと云いふ事ことを仰おつしや有ある。こんな【ドラ】盗人ぬすびとを褒ほめると云いふ事ことがありますか。何どうかして居ゐますなア』

言依別命ことよりわけのみこと 『ア、黒姫くろひめ、鷹依姫たかよりひめ、龍國別たつくにわけ、テーリスタン、カーリンス殿どの、何事なにことも神様かみさまの御計おはからひだ。御心配ごしんぱいなさいますな、神様かみさまに深ふかき思召おほしめしのある事ことでせう。只今ただいま限り玉たまの事ことは云いはないがよい。互たがひに迷惑めいわくですから、何事なにことも私わたくしに任まかして置おいて下ください』

い』

黒姫くろひめ 『玉たまがなくてもかまひませぬのか』

言依別命ことよりわけのみこと 『責任せきにんは私わたくしが負おひます。皆みなさま、これきり忘わすれて下ください』

と懐ふところより幣ぬさを取り出だし、

『被はらひ給たまへ清きよめ給たまへ』

と云いひながら左さ右う左さに打うち振ふり、

『さあ皆みなさま、これですつかり解決かいけつがつかまりましたよ』

黒姫は坐つたまま左の腕を突つ張り、體を斜にして言依別命の顔を穴のあくほど凝視め、鼈に尻を抜かれたやうなスタイルで、

『へー』

と長返事しながら落着かぬ面色である。

言依別命『サア皆さま、お宮へ参拜しませう』

と先に立つ。一同は漸く胸を撫で下し、錦の宮に参拜せむと龍國別の家を立ち出た。

初春の太陽は六人の頭を煌々と眩きまでに照し給うた。

黄金の玉も如意寶珠

紫玉も又寶珠

金剛不壞の神玉も

如意の寶珠と稱ふなり

中にも別けて高姫が

腹に呑み居し神玉は

神寶の中の神寶なり

言依別命より

委託されたる黄金の

玉の在處を失ひし

黒姫心も落着かず  
テーリスタンやカーリンス

鷹依姫まで疑ひて  
色々雑多と氣を焦ち

ヤツサモツサの最中へ  
言依別が現はれて

一先づその場は事もなく  
治まりつれど治まらぬ

心の空の雲霧を  
拂ふ術なき折柄に

十字街頭に高姫が  
錦の宮に参詣の

折も折とて出會し  
黒姫始め外四人

高姫宅に招ぜられ  
尊き神の御寶を

紛失したる責任を  
問ひ詰められて黒姫は

いよいよ爰に決心の  
臍を固めて聖域を

あとに眺めつ黄金の  
玉の在處を探らむと

鷹依姫や龍國別  
テーリスタンやカーリンス

五人は各自に天の下  
四方の國々隈もなく

探ね行くこそ神界の  
深き經綸と白雲の

餘所よそに求もとむるあはれさよ さはさりながら此度このたびの  
 玉たまの在處ありかは言依別ことよりわけの 神かみの命みことの胸むねの内うち  
 神かみの命令みことを畏かしこみて 心こころに深ふかく秘ひめおきし  
 此神策このしんさくは神かみならぬ 人ひとの身みとして知しるよしも  
 泣々なくなく出でて行ゆくあさましさ これより五人ごにんは神界しんがいの  
 仕組しぐみの絲いとに操あやつられ 惡魔退治あくまたいぢの神業かむわざに  
 知しらず識しらずに奉仕ほうしする 奇くしき神代かみよの物語ものがたり  
 口述進こうじゆすすむに從したがひて 次第しだい々々しだいに面おも白しろく  
 深ふかき神慮しんりよを覺さとり得えむ あゝ惟かむながらかむながら神々々  
 御靈幸みたまさちはへましませよ。

(大正一一・五・二四 舊四・二八 加藤明子録)

第四章 玉探志（六九六）

言依別命ことよりわけのみことに従したがひて黒姫くろひめ、鷹依姫たかよりひめ、龍國別たつくにわけ、テーリスタン、カーリンズの五人ごにんは錦にしきの宮みやに参拜さんばいし、言依別命ことよりわけのみことは宮殿きうでん深く神務しんむの爲ために進すすみ入いり、五人ごにんは各家路おのおのいへぢに歸かへらむとする時ときしも、高姫たかひめ、紫姫むらさきひめ、若彦わかひこの三人さんにんと十字街頭じふじがいとうにピタリと出會でつくわした。高姫たかひめ「これはこれは黒姫くろひめさま、鷹依姫たかよりひめさま、その他御一同たごいちどう、一寸高姫ちよつとたかひめの宅たくまで來きて下ください。折入をりいつてお訊たづねしたい事ことが御座ございます」意味いみあり氣げな此この言葉ことばに黒姫くろひめはハツと胸むねを刺さされる心地こころちがした。されど、さあらぬ態ていにて、  
「ハイ、何用なにようか存ぞんじませぬが、妾わたしは今参拜いまさんばいの歸かへり路みちで御座ございます。何時いつま参まりまし  
たら宜よろしいでせうか」  
「皆みなさま、妾等わたしら三人さんにんは参拜さんばいして來きますから、先さきへ妾わたしの宅たくまで歸かへつて居ゐて下ください。  
直すくに歸かへりますから。鷹依姫たかよりひめさまも、龍國別たつくにわけさまも、テーさまも、カーさまも御一ごいつし  
緒よに待まつて居ゐて下ください」

と撥ねた様な言葉尻を残して忙しさに参拜道に進み行く。黒姫は胸に一物、思案に暮れながら高姫の宅に立寄り、帰宅を五人一同打揃ひ待つて居た。

テーリスタン「モシ黒姫さま、高姫さまの顔色が變つて居ましたな。悪事千里と云つて、今朝の騒ぎが高姫さまの耳へ這入つたのぢやありませんまいか」

黒姫「サア、何だか何時もに變る氣色だつた、困つた事になりましたな。お前、仕様もない事をするものだから各々に心配をするのだよ」

テー、カーは首を傾け、

「ハイ、私が悪う御座いました。併し教主様がお赦し下さつたのだから、もう彼の話は言はぬやうに致しませうかい。折角教主の言葉を無にしてガヤガヤ騒ぐと、世間へ洩れてはなりませんから」

「ヘン、貴方には都合が宜しからうが、責任者たる妾は大變に面目玉を潰しました。本當に油斷のならぬお方ぢやなア。テーリスタン、これから口の物を喰ひ合ふ様な仲でも油斷は出来ませぬぜ、本當に困つた人だ。もう是きり改心をするでせうな」

カーリンス「玉から事件が方角違ひに外れて居るのだから仕方がない。まあまあ  
兔も角、吾々兩人が盗んだ事に成つて居るのだから、何と言はれても仕方がない  
さ」

「ヘン、なつて居るから仕方がないとは能う言へたものだよ。オホ、、、、、」  
斯く言ふ處へ高姫は身體をプリンプリンと振りながら、チヨコチヨコ走りに慌  
しく歸り來り、

「サア若彦さま、紫姫さま、お這入りなさいませ」  
と先に立つ。

「ハイ」

と答へて兩人は奥へ通つた。

黒姫「高姫様、えらう早う御座いましたな」

高姫「いつもの様に、ゆつくりと御禮も出来ませぬわ。能うマアお前さま、又ツ  
ケリと落着いて居られますなア。黄金の玉の行方は分りましたかい」

「エー、未だに………分り………ませぬ。然し貴女は誰にお聞きなさいました



か」

「貴女は誰も知らぬかと思つて居らつしやるが、夜前から貴女等の喧嘩を誰も知らない者は一人もありませんよ。みんな聞いて居ましたよ」

「寔に申譯なき事で御座います」

「申譯がないと言つて肝腎要の御神寶を紛失し、能う安閑として居れますなア」

「テーリスタン、もし高姫様、黒姫様が悪いのぢや御座いませぬ。私とカーリンスと二人が何々したのですワ」

「エー聞きますまい、あた穢はしい。そんな事あ、ちやんと妾の耳に入つて居る。併し乍ら肝腎の責任は黒姫様にあるのだ。黒姫様何となさいます。一つ御了簡を承はり度い」

「何事も言依別命様が御引受け下さいましたから申しますまい」

「それで貴女、責任が濟むと思ひますか、言依別命様に何も彼も塗りつけて、能うお前さま、平氣の平左で濟まして居られますな。無神經にも程があるぢやありませんか」

「さうだと言つて如何も仕方がないぢやありませんか。八岐の大蛇の執念深き企みに依つて、バラモンの手に疾の昔、手に這入つて了つたものを、如何してこれが元へ歸りませう。妾がテー、カーの様な者を使つたのが過失です」

「これ、テーにカー、お前如何する積りだい」

「テーリスタン、ハイ、申譯がありません」

「カーリンス、仕方がありません」

高姫「能う、そんな事が言へますワイ。これ黒姫さま、この責任を果す爲めにお前さまは生命のあらゆる限り草を分けても探ね出し、再び手に入れて神政成就のお寶を御返し申さねば濟みますまい。何をキヨロキヨロして居なさる」

と坐つた膝を疊が凹む程打つけて雄猛びした。

黒姫「妾も決心して居りますよ」

「二言目には刃物三昧の決心は廢めて貰ひませう。そんな無責任な事がありますか。サアサアとつと出なさい。さうして其玉が手に入らぬ事には再びお目には懸りませぬよ。鷹依姫さま、お前さまも嫌疑が掛つた身體ぢや、黙としては居ら

れますまい。龍國別さまは、親の疑を晴らす爲に是も黙としては居られまい。

テ、カーの兩人も本當に盗つたか盗らぬか、そりや知らぬが、もう一苦勞して世界に踏み出し、五人が五大洲に別れて探して來ねばなりません。さうぢやありませんか。若彦さま、紫姫さま、黄金の玉を盗られた玉無しの宮を、又ツケリと番して居る譯にはゆきますまい。紫姫さま、若彦さま、返答を聞かせなさい」と無關係の兩人にまで腹立ち紛れに八つ當りに當る。

若彦「あゝあ、何處へ飛沫が來るか分つたものぢやない。併し私は言依別さまの御意見を伺つて其上に致しませう。紫姫さまも今では重要な位置に居られるのだから、之も自分の自由にはなりませんまい」

高姫「お前さまに直接責任がないと言つて、そんな平氣な事を言つて居られますかいなア。言依別命様は柔弱な奴灰殻ぢやから、斯んな黒姫さまの失態を何とも處置をつけないのだ。然し教主として誰を悪いと云ふ譯にもゆかず、瑞の御魂の本性を現はし、表面は何喰はぬ顔して平氣に見せて御座るが、心の裡は矢張り御心配して御座るに間違ひない。一を聞いて十を悟る身魂でない」と、肝腎の御用は

勤まりますまい。サア黒姫さま、如何なさいます、言依別の教主が赦されても、此高姫が承知致しませぬぞや。妾も一度はウライナイ教を樹て、お前さま等と共に變性女子に背いて見たが、それも素盞鳴尊様のお心を取違ひして居つたからだ。變性女子の身魂からお生れ遊ばした言依別命様も自分が其罪を一身に御引受け遊ばして御座るのぢや、それを思へば妾はお氣の毒で堪らない。地の高天原は此高姫が是から玉照彦さま、玉照姫さまを守り立てて立派に御用を勤めて見せます。サア早く何とか準備を爲さらぬか」

黒姫「妾も三五教の宣傳使、屹度何とか働いてお目に掛けます」

龍國別「吾々も母上様の嫌疑を解く爲め、お暇を頂いて世界漫遊に出かけます。さうして玉の在處を探ねて來ます」

鷹依姫「いや妾も年寄と云つても元氣がある。何處迄も此玉を探し當てる迄世界中を巡歴して來ます」

高姫「それは大に宜しからう、さうなくてはならぬ筈だ。これ、テー、カー、お前等は如何する心算だい」

テーリスタン「假令八岐の大蛇の腹の中を潜つてでも、玉の在處を探さねば措きませぬ」

カーリンス「私も其通りだ。然し高姫さま、言うて置くが、何卒如意寶珠の玉と紫の玉を紛失せない様に、言依別の神様を助けて保管を願ひますよ」

高姫「ハイハイ、そんな事は言つて貰はいつでも、氣を付けた上にも氣を付けて居ます。心配をせずに一日も早く玉の在處を探ねにお出でなさい。さうして在處が分つたら、無言靈話を早速掛けて下さい。皆さまも其のお積りで………宜しいか」

と叩きつける様に言ひ放つた。

「ハイ承知致しました。然らば之より言依別の教主様に一寸お暇乞ひを致して來ませう」

と五人が立ち上らむとするを、高姫は押し止め、

「まあお待ちなさい。貴女方が神様の爲に盡くすのなら、此儘言依別の教主に分からない様にするのが誠だ。教主は涙脆いから、又甘い事を仰有ると、忽ちお前さ

ま達の腰が弱つて了ふから、妾が善き様に申し上げて置く。サア早くお出ましなさいませ」

龍國別「あゝあ、偉い災難で、高姫さまに高天原を追ひ出されるのかなア」

「嫌なら行かいても宜しい」

と高姫は睨め付ける。五人は是非なく高姫の宅をスゴスゴと立ち出で錦の宮を遙に拜し、各旅装を整へ世界の各地に向つて玉の搜索に出かけた。

（大正一一・五・二四 舊四・二八 北村隆光録）

## 第二篇 心猿意馬

## 第五章 壇の浦（六九七）

金剛不壞の如意寶珠を始め、紫の玉の改めて納まりたる錦の宮を背景とせる聖地は何となく活氣加はり、神人喜悅の色に満ち、神徳日に日にあがりつつあつた。端なくも黒姫が保管せる黄金の玉の何者にか奪取され、黒姫は責任を帯びて、夜竊に鷹依姫、龍國別、テー、カーの五人、思ひ思ひに聖地を後に、玉の行方を捜索に出でたる事、忽ち神人の間に喧傳され、又もや不安の念に驅られ、何となく物淋しき感じが聖地の空に漂うた。三五教の幹部を始め、信徒は此處彼處に頭を鳩め、此話にて持切りであつた。高姫は錦の宮の傍なる高樓に付屬せる八尋殿に宣傳使及び信者を集め、一場の注意を與へむと演説會を開いた。

能辨家の高姫が此突發事件に對し如何なる事を言ひ出すやと、先を争うて立錐の餘地なき迄集まつた。高姫は忽ち壇上に立上り、稍怒氣を含み目を釣り上げながら、諄々と語り始めた。

高姫は満座を睥睨しながら、  
「皆さま、今日は能くこそ御出場下さいました。三五教に取つて一大事が突發致しましたに就ては、今後の注意は申すまでもなく、此處置に就て如何致したら宜

しいか。神様の爲、國の爲、世界人類の爲に由々しき大問題で御座います。と云ふのは、御存じの通り、廣大無邊な御神徳に依りまして、一旦妾が神界の經綸上、腹に呑み込んだ顯國の御玉の一つ玉、金剛不壞の寶玉は、木の花姫様の御靈の懸らせ給ふお初さまの執成しに依つて、再び御神寶として此お宮に納まる事となり、モ一つの紫の玉は鷹依姫の改心歸順と共に、是亦錦の宮の寶物と相成り、曩に青雲山より運び來りし黄金の如意寶珠と共に、靈力體相揃ひ、いよいよ神政成就の機運到來疑なしと喜ぶ折しも、不注意なる黒姫がために、大切なる黄金の玉を紛失致しました事は、返す返すも残念で御座います。斯の如き大事變が突發して居るのに、皆さまは何ともないのですか。此噂は最早あなた方の耳には幾度も這入つて居る筈です。然るに今日まで妾の許に膿んだ鼻が潰れたとも云つて來た人がないのは、何たる冷淡な事で御座いませう。さぞ神様も諸君の至誠を御満足に思ほ召すで御座いませう」

と棄鉢口調で八つ當りに當つて見せた。國依別は高姫の立てる壇上に立現はれ、高姫さまに御尋ね致します。吾々は此の件に就て、寄り寄り幹部と協議を凝ら



して居るのですが、何分肝腎の黒姫様の行方が分らないので、如何してよいのか調べる事も出来ない。承はれば貴方は専横にも、獨斷的に黒姫以下四人を放逐されたと云ふ事だが、そりや又誰の聽許を受けてなされましたか。一應吾々幹部に對し御相談がありさうなものです。これに就ては何か裏面に伏在するのではありますまいか。どうぞ此席上に於て、吾々の疑惑を晴らす爲に、詳細なる御報告を願ひます」

「國依別さま、お黙りなさい。神界の事は俄宣傳使の巡禮上りのお前さまに、何うして分りますか。何事も神界の御經綸ですから、出る杭は打たれるとやら、チツトつつしみなされ」

「これは怪しからぬ。これが如何して黙つてをれますか。又あなたが黒姫以下を勝手に處置する權能は何處にあります。玉照彦、玉照姫様の御神慮も伺はず、又教主の御意見も無視して、勝手氣儘にそんな事をしても良いのですか。左様な事が貴方に出來るのならば、お二人の宮司も、教主も、幹部も必要はないぢやありませんか」

「妾はそんな肉體の云ふ事は聞きませぬよ。日の出神の生宮の御指圖に依つて申上げたのだ。知慧や學で神界の御經綸が分るものですかい」  
「貴方は二つ目に神界々と仰せられますが、大變に都合のよい隠れ場所を御持ちで御座いますなア。吾々に相談する必要がなければ、何故御招きになりました？」

満座の中より、

「國依別さま頼んまずぜ。確り確り」

などと野次る者がある。

高姫「黒姫さまを決して逐出したのではない。妾が道理を説いて聞かし責任のある所を明かに示したのだ。そこで黒姫さまは自發的に尻をからげて玉の探索に行かれたのです。お前さま達もさうキヨロキヨロとして居る時ではありますまい。此廣い世の中三人や五人探しに出た所で大海へ落した眞珠の玉を探す様なものだ。何時も御道の爲には生命も何も捧げると誓つて居るあなた方、此高姫が言はなくとも何故不言實行が出来ませぬか。まさかの時になつたら逃げる奴ばかりぢやと

神さまが何時も仰有る。本當に神さまの御言葉は毛筋も違ひませぬ。サア皆さま如何なさる。決して黒姫さま許りの責任ぢやありませんまい。國依別さま、あなたははまだ神界の事がテンで分つて居らぬ。自分の席にトツトとお下りなされ」

國依別「貴方は金剛不壞の玉の保管役と承はつて居りますが、大丈夫ですか。余り他の事を云ふものぢやありませんぞ。今日の非は他人の事、明日の非は吾事と云ふ事をちツとは御考へなさい」

「何をツベコベと云ふのだい。此高姫が保管する以上は、どんな偉い者が來ても、指一本觸へさすものではありません。萬一其玉が損失する様な事があるとしたら、二度とお目に掛りませぬワ」

と肩を四角にし、少し腮を前へ突出し、憎々しげに言ひ放つた。満座の中より、

「まさか違うたら呑み込むのだから大丈夫だよ。大方黄金の玉も呑んだのかも知れないぞ。國依別さま、シツカリ頼む」

と野次る。高姫益々語氣を荒らげ、

「千騎一騎の此場合、芝居見物か二十世紀の議會の様に、野次ると云ふ不心得者

は誰だ。顔を隠して作り聲をして、卑怯未練な。何故堂々と、意見があるなら高姫の面前へ現はれて仰有れ。卑怯ぢやありませんか。たかが女の一人、一人前の男が其態は何の事だい」  
と呶鳴りつける。満座の一同は手を拍つて、

「ワアイ　ワアイ」

と笑ひさざめく。

高姫「皆さまは此席を何と心得て御座る。斯かる神聖な八尋殿に集まりながら、不届千萬ではありませんまいか。此高姫の云ふ事が氣に入らねば、トツトと出て貰ひませう。澤山に頭数は「ごまめ」の様にあつても、どれ一つ間に合ふ者はない。なんと人民と云ふ者は情ないものだなア」  
國依別「皆さま、高姫さまのお言葉が氣に入らぬ方は、御注文通り御退場を願ひます」

大勢の中より、

「國依別さまの仰せの通り、氣に入らぬ者に退場せよなら、残る者は高姫一人よ

りないぞ、それでも良いか」

と怒鳴りたてる。高姫は躍氣となり、

「神界の帳を切られても好ければ、トツトと出たが宜しい」

大勢の中より、

「お前さまに帳を切られても、神界から切られなければ宜しい」

と叫ぶ者がある。場内は忽ち喧々囂々、鼎の沸く如く、雀蜂の巢を突き破つた如

くであつた。

此時言依別命は若彦、紫姫、玉治別と共に壇上に悠然として現はれた。

一同は拍手して言依別命を迎へた。今や散亂せむとしつつあつた數多の信者は、

再び腰を下し、花形役者の言依別命が高姫に對する論戰の矢は如何にと固唾を呑

んで待つ事となつた。言依別命は満座に向ひ、聲も淑かに、

「皆さま、今日は高姫さまの招きに依つて御集合になつたさうですが、何か纏ま

つた御話でも御座いましたか」

と極めて平靜の態度で、微笑を浮べながら、満座に問うた。座中より一人の男が

スツクと立上り、

「不得要領、何が何だか譯が分りませぬ。何だか黒姫さまが玉を奪られたとか云つて、ブウブウと私達一同に熱を吹かれるのですから、堪りませぬ」

言依別命「如何なる事かと思へば、黄金の玉の紛失事件ですか。それは少しも御心配はいりませぬ。何事も神さまの御經綸ですから、誰一人として神さまに對し不都合は御座いませぬから、御安心下さいませ」

高姫は口を尖らし、

「コレコレ教主さま、あなたは何と云ふ事を仰有るのですか。三千世界を水晶にする誠の生粹の御玉を紛失しながら、肝腎の御方からそんな氣樂な無責任なことを云つて如何になりますか。それだからあなたは變性女子の野良久羅者だと人が云ふのですよ。チツとは責任觀念をお持ちなされ」

言依別命「世界を自由に遊ばす大神様が御守護の錦の宮、加ふるに玉照彦、玉照姫の神人が御守護遊ばし、且つ地は自轉倒島の中心點、地の高天原の宮屋敷ではありませんか。何事も皆神界のご經綸です。御心配は要りません。餘り黒姫さ

まを御責になると、あなたも亦お困りになる事が出来ませぬぞ」

「エー奴灰殻の柔弱な言依別、モウ愛想が盡きました。これから妾が此高天原を背負うて立つ考へだ。お前さまにも一つの責任がある。黄金の玉が再び手に入る

まで教主の席をお迂りなさい。日の出神が高姫の口を藉りて申し付けるツ」

「私は教主の地位に戀々として居る者ではありませんせぬ。併し乍ら此聖地は貴女が教主になつて治まる所ではありませんせぬ。やがて貴女は黒姫さま同様、玉を探しに

行かねばなりませんまい」

「エー何を仰有る。妾が今聖地を出ようものなら、サツパリ暗雲だ。終局には金

剛不壞の寶珠も、紫の玉も、亦紛失するかも知れませぬぞ」

「萬一其玉が紛失して居たら、貴女は如何なさいますか」

「そんな事仰有るまでもなく、此高姫が一つよりない首を十でも二十でも進上致

しますワイな。そんな間抜と思つて御座るのですか。チツト黒姫とは品物が違ひ

ます。あんまり見違ひして下さいますな。お前さまは教主と云つても、ホンの看

板も同然、斯んな所へ出て来る場合ぢやありませんせぬ。スツ込んで居なさい、空氣

拔けさま」

「あなたの保管して居られる玉を一寸此處で皆さまに拜ましてあげて貰ひたい。

斯う云ふ人心不安な時は噂は噂を生み、金剛不壞の玉も、紫の玉も紛失したげな

……と大變な評判が立つて居ますから……」

「エー人間と云ふ者は仕方のないものだナ。天眼通でチヤンと見えて居る、決して

紛失なんかして居ませぬ。直にお目に掛けます。折角妾が保管して置いた秘密

場所を見せた以上は又場所を替へねばならぬ。どんな奴が信者に化けて這入り込

んで居るか分つたものぢやない。妾は黒姫の様に松の木根元へ隠し、毎晩々々、

降つても照つてもお百度参りをして終局に人に嗅ぎつけられる様な拙劣な事はや

りませぬワイなア、ヘン」

と稍輕侮の色を大勢の前に曝しながら、

「皆さま玉を拜ましてあげる。目が潰れぬ様にシツカリとしなされ」

と云ひながら、八尋殿の疊を一枚剥り、中より恭しく桐の箱を取り出し、

「皆さま如何です。斯う云ふ近い所に隠してあつても分りますまいがな。それだ



から燈臺下は眞暗がりと云ふのですよ。チツト身魂を研きなされ。言依別様、お前さまの命令した所とは違ひませうがな。お前さまの命令通り行つて居らうものなら、黒姫の様にサツパリな目に遇うて居るのぢや。サア蓋を開けて検めて御覽」

「どうぞ貴女開けて下さい」

「さうだらう さうだらう。此玉は實地誠の御神徳がないと、何程教主でも、身魂の曇りが現はれて、恥しうて、面を向ける事も出来ませぬワイ。サア皆さま、目のお正月を爲してあげるから、心の饑饉を起してはなりませぬぞや」

と得意氣に、

「サア此處に金剛不壞の如意寶珠の御寶、一つは紫の御玉、身魂が研けて居らぬと、玉石混同と云つて、石塊に見える人もありますよ。千里の馬も伯樂を得ざれば驚馬で終るとやら、皆さま、シツカリ眼を据ゑ、身魂を光らして御覽…… 否拜観なされ」

と口を一の字に結び、横柄な面付しながら、二三回玉箱を頭上に捧げ、靜かに被覆を外し唐櫃の蓋を開けるや否や、顔色サツと蒼白色に變じ、舌を捲き、目を鼻

の如く圓くし、肩を細く高くこぢあげ、首を半分ばかり肩に埋め、無言の儘立つて居る。

言依別命「高姫さま、立派な靈光が輝き給ふでせうなア」

國依別はツカツカと進み寄り、玉箱の中を覗いて見て、

「ヤアこりや何だ。皆さま、玉と思ひの外、何時の間にか石に變つて居りますよ。これは誰の責任でせう。一つよりない首を澤山に渡さねばならぬ手品が見られようかも知れませぬ。とは云ふものの大變な事が出来致しました」

一同はアフォンとして呆れ返るばかりであつた。紫姫は、

「モシ高姫さま、こりや又何うした譯ですか」

「何うでもありません。斯うして石に見えてもヤツパリ正真正銘の如意寶珠、お前さま達一同の身魂が悪くから、寶珠様が石に化けちやつたのだ。神さまは鏡も同様だから、皆さまの心が石瓦同然だから、皆さまの意の如く變化遊ばすのだ。それで如意寶珠と申します。……コレコレ如意寶珠様、さぞあなたは御無念でせう。せめて二三日か一週間、皆さま水行をしてお出でなされ。さうしたら本當の

寶珠ほうしゆの御神體ごしんたいが拜をがめますよ」

大勢おほぜいの中なかより、

「オイ、高姫たかひめさま、何程なにほど研みがいても、見直みなほしても、石いしはヤツパリ石いしぢやないか。此この中に一人ひとりや半分はんぶん、魂たまの研みがけた者ものがないとはいへまい。それに誰たれも玉たまぢやと言いふ者ものがないぢやないか。お前まへさまはあんまり慢心まんしんが強つよいから奪とられたのだよ。さうでなくばウラナイ教けうを再設さいせつする積つもりで、黒姫くろひめと申まをしあはせ、黒姫くろひめに黄金わうごんの玉たまを持もつてフサの都みやこへ先さきへ歸かへらせ、自分じぶんは残りのこりの二ふたつの玉たまを何なに々なにして謀叛むほんを企たくむのだらう」

高姫たかひめクワツとなり、

「誠まこと一つの大和魂やまとたましひの日ひの出神でのかみの生宮いきみやに向むかつて、何なんと云いふ事ことを仰おつしや有ある。サア此處ここへ出でて來きなさい。黒白こくびやくを分わけてあげるから」

大勢おほぜい一度いちどに、

「ウラナイ教けう、ウラナイ教けうの再設さいせつ。……惡あくの道みちへ逆轉ぎやくてん旅行りよかうの張本人ちやうほんにん……  
と口々くちぐちに呶鳴どなり立たてる。高姫たかひめは烈火れつくわの様やうになつて、

「エー殘念ざんねん々々ざんねん、此腹このはらを切きつて見みせてやりたいやうだ」

と壇上に地團駄を踏む。

言依別命「高姫さま、何事も神界の御都合でせう。先づ御安心なさいませ。御一同さま、此れには何か神界の御都合のある事と私は確く信じます。どうぞ鎮まつて下さい。責任は私が負ひますから……」

と淑かに宥める。一同は教主の挨拶に是非なく、ブツブツ呟き乍ら錦の宮に拜禮し、各家路に歸つて行く。

高姫は面を膨らし、石の玉箱を小脇に抱へ、夜叉の如き相好を寒風に曝し乍ら、己が居宅へ一散走りに歸り行く。傍の榎の枝に烏が二三羽、寒風に揺れ乍ら、枝の先にタワタワと波を打ち、空中に浮つ沈みつ「阿呆々々」と鳴き立てて居る。

(大正一一・五・二五 舊四・二九 松村眞澄録)

## 第六章 見舞客(六九八)

高姫はすすごごと我家に歸り頭痛がするとて臥床に入り捺鉢卷の大發熱、大苦悶。遠州、武州は種々と介抱に全力を盡して居る。玉治別は妻のお勝と共に高姫の病氣と聞き、見舞のために訪ねて來た。玉治別は庭の表に立ち働いて居る遠州に向ひ、

遠州さま、承はれば高姫さまには少しお鹽梅が悪いと聞きました、御様子は  
どうですかナ」

ハイ、この間八尋殿で演説をなさつてから肝腎のお寶が石に化けて居つたとか云つて、怒つて溜池の中に放り込まれました。それから氣分が悪いと云うてお寢みになつたきり、毎日日々玉々と、囁語ばかり云うて居らつしやいます。誠に困りものですよ」

何うか差支なくば、玉治別夫婦がお見舞に參つたと、傳へて下さい」  
承知致しました」

と奥に入り耳許に口を寄せて、

高姫様、玉治別の宣傳使がお見舞に見えました」

高姫は人事不省に陥りながらも、玉の一聲にふつと気がつき、

何、玉が出て来た、そりや結構だ。早く見せてお呉れ」

と起き上つた。遠州は玉ではない、玉治別が来たのだと實を明かせば、又もや高

姫が落膽して重態に陥る事を案じ、何氣なう、

「ハイ、玉がお出になりました」

と皆まで云はさず、高姫は、

「早く此處へ持つてお出で」

遠州は、

「ハイ」

と答へて表に出で、

「玉治別さま、お勝さま、どうぞ奥へお通り下さいませ。高姫様が大變お待ち兼

ねで御座います」

玉治別はお勝と共に「つと」奥に進み入り、見れば高姫は眞赤な顔をしながら

擦鉢巻の儘病床に坐つて居る。

たまはるわけ 玉治別 高姫様、承はりますれば御病氣との事、何うかとお案じ申しましてお訪ねに上りました

高姫 別に私は、病氣なんかありませんが、つい癩癧玉がつき詰めて熱が出たのです。常に健康なものが偶に寝ると、大變な噂が立つと見えます。ヤアもう大丈夫です。

お勝 毎度夫がお世話になりました。一度お訪ね致さねばならないのですが、つい御無禮を致しました

お前さまが玉さまの奥さまかい。ほんに可愛らしい御器量のよいお方だこと、玉治別さまもお合せな事ですワイ。時に玉治別さま、皆さまは如意寶珠の玉の紛失に就て、どう云うて居られますかな

いやもう種々の噂で御座います。高姫さまが獨斷で黒姫さまを追ひ出し遊ばしたか、人を呪はば穴二つ、自分も亦玉で失敗して何處かへ逃げ出さねばなるまい、と云つて居る人もあり、中には如意寶珠は決して紛失して居ない、吾々の身魂が曇つて居るから石に見えたのだと云ふ人もあり、一方には何うも言依別命様の御

處置が手ぬるいと云つて居る方もあります。つまり百人が百人、種々の意見を立てて騒いで居ますよ」

「私は誰が何と云うても此處は動きませぬよ。三千世界の救ひ主の日の出神の生宮が離れて、どうして御經綸が成就致しますか。大神さまは日の出神の生魂を地と致して三千世界を助けると、お筆先にまで書いて示して御座るのだから」

「大變な御決心で結構ですが、併しあの玉が若し紛失して居たら、貴女の責任上どうするお考へですか」

「青二才の分際で、そんな事までお構ひなさるには及びますまい」

「何程青二才だつて、やつぱり私も宣傳使の一人、参考までに聞いて置かねばなりません」

「若い人達の聞く事ぢやない。お前達は兔に角神様のお話さへして居ればよいのだ。私等とはお顔の段が違ふのだから。それについても言依別も何とかして大勢の者に云ひつけて、寶の在處を探して下さりさうなものぢやに、エ、辛氣臭い事だ。玉照彦さまも、玉照姫さまも何程立派な神様だとか云うても、何分年が若い



ものだから、こんな時には仕方がない。ア、頭が痛くなつて来た。もう玉治別御夫婦歸つて下さい。私が本復の後、篤と皆さまに分るやう、千騎一騎の活動を遊ばすやうに一伍一什の因縁を説いて聞かして上げます。此頃の聖地の方々は薩張り桶のたががゆるんでしまつて、誰も彼も蒟蒻の幽霊見たやうな空気が抜けばかりぢや、さうだから結構な玉を全部盗られて仕舞ひ、平氣の平左でポカンとして爲す所を知らずと云ふ腑甲斐ない爲體、私は思つても腹が立ちますワイな。玉治別さま、お前さまも、ちつと此玉の事に就て御心配なさつては何うだい。宇津山郷の蛙飛ばしの蚯蚓切り、薯の赤子を育てるのは、ちと宣傳使は六ヶ敷いですよ。貴方第一「チヨカ」だから此玉探しに率先して、もう今頃にや何處かに飛んでいつてゐらつしやると思つて居たのに、氣樂さうに夫婦連れで、ぞろぞろと晝の眞最中に何の事だいな、ちと確りなさらぬか。人間の家は女房が肝腎ぢやぞえ。これお勝さまとやら、お前さまがこの玉治別さまを、ちつと鞭撻せなければならぬぞえ。千騎一騎の此の場合に、何を迂路々々と間誤つて御座るのぢやい」

高姫さま、貴女は人を責むるに急にして己を責むると云ふ事は知らないのです

か  
□

「そんな事は疾うの昔に知つて居りますワイな。よう考へて御覽なさい。金剛不  
壞の寶珠の玉や紫の玉は、謂はば一旦私の身の内のもので、私の御魂同然だ。腹  
の中から吐き出したのと、吐き出さぬだけの相違ぢやないか。ア、こんな事なら  
腹に呑んでさへ居れば、こんな不調法は出来やしまいのに、お前さまが仕様ない  
木挽の空助やらお初のやうな阿魔つちよを引張つて来て高姫の腹から吐き出さし  
たりするものだから、こんな事になつたのだ。この大責任は元を糺せば、玉さま、  
お前が負はねばならぬのだ。その次に空助の娘のお初、是でも口答へをするなら  
して見なさい」  
「高姫さま、怪しからぬ事を仰有います。玉を吐き出したのと此度の紛失とは別  
問題ぢやありませんか。さう混淆にせられては聊か私も迷惑致します」  
「其理屈が悪いのだよ。お前さまは謂はば新米者の端役人ぢや。私は日の出神の  
生宮ぢや、同じ宣傳使にしても天と地との懸隔がある。私を失敗らしてお前さま  
は平氣で見居る氣か。私の失敗は謂はば三五教の自滅も同然ぢや。お前さまが

ひとりふたりしくじ一人や二人失敗つたつて、決して三五教に影響を及ぼすものでない。兔も角大責任を自覺し私が盗りましたと云うて責任を帯び、一先ず此場の【ごみ】を濁しなさい。その間にこの高姫が天眼通で在處を探し、お前さまの無實を晴らし、さうして玉治別さまは立派な人だと云はれて信用が益々あがつて来る。神さまに仕へるものは、これ位な犠牲的精神がなくては駄目ぢや、それが出来ないやうな事なら宣傳使を返上なさいませ。なアお勝さま、私の云ふ事が無理ですか、無理なら無理とハツキリ云うて下さい」

と稍精神に異状を帯びたせいか、勝手氣儘な理屈を吹き出す。

玉治別「まアまア高姫さま、お鎮まりなさいませ。貴女は少し許り逆上して居ますから、病氣の害になると濟まぬによつて、今日は一先づお暇致します」

「これこれ、此重大なる責任を此高姫に塗りつけようとするのか。大方お前さまがそつと何々したのぢやなからうかな。何うも素振が怪しいぞえ」

「病人だと思つて【あし】らつて居れば餘りの事を云ひなさる。これから私も言依別の教主さまにお届けして來ます」

「言依別が何ぢやいな、あれは言依姫の婿ぢやないか。謂はば私の妹の婿で私の弟も同然だ。眞の日の出神の憑つた高姫を措いて、あんな者に何を云つたつて埒が開くものかい。あれは知慧と學とで、人間界では一寸豪さうに見えるが、神の方から云へば赤坊みたやうなものぢや。なぜ高姫の云ふ事を聞きなさらぬのかいと目を三角にして睨みつける。お勝は悔し涙に堪へ兼ねて其場に泣き倒れる。高姫「泣いて事が濟むなら易い事だ。私でも泣きたいけれども神政成就の御寶の行方を探す迄は、そんな氣樂な、泣いてをれますか。大きな口を開けて、わあわあと泣くお前さまより、ぢいつと耐へて氣張つて居る高姫の方が何程苦しいか分りませぬぞえ」

玉治別「兔も角今日は暇を致します。ゆつくりと思索して御返事に参ります」

「どっこい、夫婦の者、此解決がつく迄一寸も動いてはなりませんませぬぞや」

「はて迷惑の事だ。お勝、どうしようかなア」

お勝は又もや大聲を上げてオイオイ泣き出した。高姫は枕許の金盃を爪でガシガシと掻き鳴らし乍ら、もどかしさうに、

「あゝ玉が欲しい。玉が欲しい。玉はやつとあつても【がらくた】人間の【どたま】計りで仕方がない。よう是だけ蒟蒻玉が集まつたものだ、これ確り……玉さま……せぬかいな」

と金盃をもつて玉治別の頭をガンとやつた。玉治別は、  
「困つた事になつたものぢや、云ふ事が薩張支離滅裂、到頭魂が抜けて發狂して了つた」

と呟くを聞き咎めて、高姫は口を尖らし、

「何、私が發狂したと見えますか」

「八（發）狂と嘲弄ふ貴女は、非常に九（苦）境に陥つて居るやうに見えますわい。アハ、ハ、ハ、」

と燒糞になつて高笑ひをする。高姫はムツと腹を立て、

「長上に對して無禮千萬なその振舞」

とあべこべに、頭をこづいた方から無禮呼はりを浴びせかけられ、玉治別はお勝の手を取り、

「サアお勝、長坐は畏れぢや、氣の鎮まる迄家に歸らう」

と此場を見捨てて表へ驅出した。高姫は狂氣の如く奥の間で怒鳴つて居る。

高姫の病氣と聞いて見舞にやつて來た空助は、お初の手を引き、門口で玉治別夫婦にベツタリ出會し、

「ヤア、先生か」

「空助さまか、お初さま、ようお出なさいました」

「高姫さまの様子は何うですか」

「いやもう大變です。カンと叩られて來ました。大變に、私やお初さま始め、空

助さまを恨んで居ますよ。用心なさい、又カンとやられちや耐りませぬからなア」

「テンと譯が分りませぬなア」

「別に勘考せいでも奥へお出になれば分ります。一寸私は急ぎますから、お先へ

御免蒙ります」

と云ひながら女房のお勝と共に、慌しく吾家をさして歸つて行く。

(大正一一・五・二五 舊四・二九 加藤明子録)

第七章 囃語（六九九）

高姫は一生懸命精神錯亂状態になつて、熱に浮かされ猛虎の如く、咆哮怒號の聲屋外にビリビリと響いて來た。遠州、武州は驚いて奥へ駆け入つたり表へ出たり、手の施す所も知らず、

武州「オイ遠州、何うしよう。大變ぢやないか。大變々々」  
と狼狽へ廻つて居る。

空助はお初の手を引きながら門の戸をがらりと開け、悠々と入り來り、

「オイ、遠州、武州、何を騒いでゐるのだ」

遠州「あの聲を御聞きなさいませ、刻々と鳴動が【きつく】なります。淺間山が爆發するの、高姫山が破裂するの、か知りませぬが、大變な騒動が始まりかけて居ます。何處へ避難したらいいかと思つて、周章狼狽の體で御座います」

「アハ、ハ、ハ、如何にも偉い鳴動ですな」

「何と云つても三十八度と四十度の間を昇降してゐる熱ですから、随分偉い煙も

吐き出します。側に居られた態ぢやありません。何卒貴方、鎮めて下さいな」

「この鳴動は大森博士だつて、如何することも出来はしない。併し空助が一つ鎮魂をして鎮めて見ませう」

とお初と共に高姫の病床に進み入つた。

高姫は金盃の底をガンガン叩きながら、起ちつ坐りつ擦鉢巻になつて暴れ狂うてゐる。空助は両手を組み、一、二、三、四、……と天の數歌を静かに唱

へ、ウンと一聲指頭より靈光を發射し、高姫の面を照した。高姫は漸く鎮靜状態に復し、バタリと床の上に倒れ、肩で息をしながらウンウンと唸つてゐる。空助

は高姫の肩を撫で擦りながら聲低に、

「モシモシ高姫さま、大層御苦しみと見えますが、何事も神様のなさることです。うから、決して決して御心配のなきやうに、氣を確に持つて下さい。言依別の教

主様も至極平氣で居られますから」

高姫は此聲にムツクと立上り、空助の胸倉を矢庭にグツと引摺み、肩をいからし聲を震はし、齒ぎしりをキリキリと言はせながら眼を釣上げ、



「お前は空助ぢやないか、假令言依別が何と云つても、大事の大事の結構な玉を紛失致したのは、神政成就の爲には大變な大失策だ。これと言ふのも貴様がお初を伴れて来て、高姫の生宮から無理に引張り出さしたその爲に、斯んな目に遇うたのだ。私もそれから何となく變になり、斯んな病氣になつたのも、みんな空助、お前の爲だ。神政成就の妨害を致す大曲津奴が。大方八岐の大蛇が化けて居るのだらう。サア白状致して玉の在處を知らせよ。さうでなければ何處までも放しは致さぬぞや」

「高姫さま、それは偉い迷惑、マア悠くりと氣を落着けて冷靜になつて下さい」  
「何ツ、迷惑と申すか。お前の迷惑は小さいことだ。大神様を始め世界萬民の迷惑ぢや。第一この高姫が起つても坐ても居られぬ迷惑な目に遇うてゐる。サア、キリキリと白状致せ」

空助は高姫の手を強力に任せグツと放した途端に、高姫はどんと仰向けに倒れ、口から蟹のやうに泡を吹き飛ばし、前齒の抜けた口を斜交に開いて、頻りに何事か言はむと上下の唇をたたいてゐる。

お初はつ「小母をばさま、決して御心配ごしんぱいなさいますな。その玉たまは神様かみさまの御手おんてに御預り遊おあづかばして御座ござるから、神政成就しんせいじやうじゆの妨害さまたげにはなりません。三個さんこの玉たまは有形いうけいです、そのために皆様みなさまはモット立派りつぱな無形むけいの玉たまを一個宛頂いつこづついたたきましたから、御安心ごあんしんなさいませ」  
此聲このこゑに高姫たかひめは氣きがつき、

「ヤア、お前まへはお初はつぢやな。小豆こまめのやうな態さまをして、ようツベコベ囀さへづる奴やつぢや。私の玉わしを叩たたき出した曲者くせもの、サア、もう斯かうなる上うへは此高姫このたかひめが承知致しやうちいたさぬ」  
と飛とびかからうとする。お初はつは體たいをヒラリと躲かはし、

「小母をばさま、氣きを落着おちつけなさい」

何なにツ、猪口才ちよこさいな、ゴテゴテ言いはずにすつこんで居をれ。大方貴様おほかたきさまが玉たまを盗ぬすんだのであらう。サア、日ひの出神でのかみの生宮いきみやが承知致しやうちいたさぬ」

と又またもや飛とびかかると。お初はつは右みぎへ左ひだりへ胡蝶こてふの飛とび交かふ如ごとく、ヒラリヒラリと高姫たかひめの鋭鋒えいほうを避さけて居ゐる。門口かどぐちにはテルヂー、雲州うんしうの二人ふたり、高姫たかひめの病氣危篤びやうききとくと聞きいて見舞みまひにやつて來きたと見みえ、

テルヂー「これ遠州ゑんしうさま、一寸開ちよつとあけて下ください。テルヂー、雲州うんしうの兩人りやうにんだ」

遠州えんしゅうは此この聲こゑにガラリと戸とを引ひき開あけ、

「ヤア、よく來きて下くださつた。大變たいへんに大將たいしやうの病氣びやうきが、變へんになつて來きたので困こまつてゐるのだ」

雲州うんしゅう「變へんになつたとは何どうだい。危篤きとくと云いふのか」

「時々ときどき高姫山たかひめやまが鳴動めいどうをするので危き險けんでたまらないのだよ。人事不省じんじふせいの高姫山たかひめやま、うつかり踏查たふさでもしようものなら、山やまと共ともに奈落ならくの底そこまで陷落かんらくするか分わかつたものぢやない。今いまも玉治別たまはるわけさまがカーンとやられて、遁にげ歸かへらしやつたとこだ。氣きがついたら又また俺おれから篤とつくりと云いうて置おくから、歸かへつたがよからうぞ」

テル「折角せつかく此處ここまで來きたのだから、御顔おかほだけでも拜見はいけんして歸かへらうか。なア、雲州うんしゅう」  
雲州「危き險けん區域くゐきだと云いつて退却たいきやくするのは男子だんしの本分ほんぶんではない。これも修しう行ぎやうのためだ、一ひとつ踏查たふさすることにしようかい」

と遠州えんしゅうの止とどむるをも聞きかず、無理むりに奥おくの間まに進すすみ入いつた。

高姫たかひめは火ひの如ごとき顔がん色しよくに眼めを釣つり、拳こぶしを固かためて六歳ろくさいのお初はつ目め蒐がけて追おひかけてゐる。空助もくすけは此この騒さわぎを他所事よそごとのやうに煙草たばこをくすべながら、師團演習しだんえんしゆの觀戰くわんせんでも

してゐるやうな調子で泰然と構へてゐる。二人の姿を見るより、高姫は、

「ヤー、お前はテルヂーに雲州ぢやないか。貴様は元が小盗人だから、大方あの

玉を盗みよつたのだらう。サア、了簡せぬ。早く此處へ玉を吐き出せ」

と雲州の素首をグツと捻ぢ、疊に摺つけ、

「サア、吐け吐け」

と高春山でお初の玉吐せを見てゐた高姫は、同じ流儀に倣つて腰を滅多矢鱈に叩

きつける。

雲州「アイタ、ウンウン。モシモシさう叩いて貰ひますと、尻からプン州や、

ウン州が出ますワイなア。オイ、テルヂー、早う俺を助けて呉れぬかい」

「貴様は身魂が悪いから尻から吐くのだらう。コラ、今デルジリと吐かしたたら

う。早く尻を出せ」

空助は強力に任せ、高姫の素首をグツと握つて、猫を抓んだやうに引提げ、ポ

イと蒲團の上に抓み下した。

「又もや高姫は發熱甚だしく、ウンウンと苦悶の聲を上げながら、床上に力なく

グタリと倒れて囁語を始めた。

「三五教の變性男子様の結構な教を、變性女子がワヤに致して盗つて了はうとするので、これは何でも系統の高姫が、一つ腰を入れねばなるまいと黒姫を説き諭し、青彦や魔我彦に言ひ聞かして、到頭ウライ教を樹てて、神政成就の御用を致さうと思ひ、日の出神の生宮が現はれ、黒姫には龍宮の乙姫様が引添うて、御守護遊ばすなり、力一杯變性女子の惡の守護神に敵對うて見たところが、思うたよりは立派な身魂で、ミロクさまのやうな素盞鳴尊ぢやと感心して、それから心を改め三五教へ歸つて、手を引合うてやらうと思へば、奴灰殻の學と智慧とで固まつた言依別命が教主となり、又もや學と智慧とで此世をワヤに致さうと致すに依つて、ア、三五教も駄目だ、私が三つの玉を呑み込んで、再びウライ教を樹てて見ようと、心の底で思つて居つた。それ故黒姫に黄金の玉の御守をさして置いたのに、彼奴は莫迦だから到頭八岐の大蛇の眷屬に奪られて了ひよつた。ア、残念ぢや。三つの御玉が一つ缺けた、何うしよう、斯うしようと氣が氣でならず、到頭黒姫を鞭撻つて玉探しに出したが、これでは雲を掴むやうな頼りのない話。

併ししながら此の高姫が保管して居る二つの玉さへあれば、何うなり、斯うなりと、神様に對して高姫が變性男子の御用繼ぎを致せると思つて居つたら、其の二つの玉も大蛇の乾兒に、何時の間にか盜られて了ひ、今は蟹の手足を「ぼがね」たやうな悲惨な事になつて了つた。

これと云ふのも言依別命が、餘り物喰ひがよいので、何でも彼でも塵芥を、此の聖らかな神様の御屋敷へ引張り込むものだから、斯んな縮尻が出来たのだ。エーもう仕方が無い。併し此の玉は遠くは行くまい。何れ未だ近くに隠してあるに違ひない。さうでなければ誰かが呑み込んであるのかも知れぬ。假令死んでも、火になつても蛇になつても、此の三つの玉を取返さねば置くものか。エーエー残念や、口惜しや、ウンウンウン<sup>ㄴ</sup>と千切れ千切れに自分の腹の底まで白状して了つた。

之を聞いた空助、お初、テルヂー、遠州、雲州、武州は目と目を見合はし、高姫の腹の中の清からざりしに肝を潰してゐる。

高姫の大病と聞きつけて、次から次へと見舞客は踵を接し、門口は非常に雑沓

を極めた。されど空助は深く慮るところあり、高姫の囁語を大勢に聞かせては大變と、遠州、雲州に堅く言ひつけ面會を謝絶せしめつつあつた。此處へ國依別は駿州、三州を伴ひやつて來た。

國依別「コレコレ遠州さま、高姫さまの御病氣は如何です。些とよい方ですか」  
遠州「善とも惡とも、テンと見當がつきませぬ。善いと思へば悪い、悪いと思へば善い、到底凡夫の吾々、見當の取れぬ仕組と見えますワイ」

「コレコレ遠州さま、今日は教理のことをたづねに來たのぢやない。御病氣は如何と云ふのだよ」

「病氣ですかい。御病氣は矢張身體の機械が、どつか破損したのですなア。随分奇怪千萬な病氣ですよ。何でも彼りや憑いてますなア」

「誰が【つい】て居るのだ。看護婦は何人位居るか」

「何分日の出神さまの生宮ですから、神主もそれはそれは澤山居るでせう。人間  
の目には根っから見えませぬなア。死蝨とか云つて、随分觀音さまが澤山、御守  
護してゐらつしやいますワ」

「莫迦云ふない。オイ、駿州、三州、斯んな奴に相手になつて居つても、とんと要領を得ない。サア、奥へ強行的進軍だ」

と行かむとする。遠州は両手を擴げ、

「ア、國さま、駿、三、マア待つて下さい。空助さまが喧ましいから」

「なに、空助さまが來てゐるのか。そんなら猶の事、這入らねばなるまい」

「今お前達が這入ると病氣は益々危篤になると云つて、空助さまが心配して御座

つたので、馳て御臨終も近寄つただらう」

「それほど危篤に陥つて御座るのなら尚更の事だ。何うしても御目にかからねば

なるまい。其處除け、邪魔ひろぐな」

と突き除け勿ね除け進み入る。見れば高姫は、空助に抱かれて、スヤヤスと睡つ

てゐる。

國依別「ア、お初さま、空助さま、皆さま、大變に御苦勞でした。御様子は何う

ですな」

空助「ハイ、案じられた容態で困つてゐます。精神錯亂と見えて取止めもないこ



とを口走るくちばしので、實じつのところは面會謝絶めんくわいしやぜつをしてみたのです。併しかしよう來きて下くださつた。到底たうていもう駄目だめでせう』  
と絶望ぜつぼう的悲調てきひてうを帶おびたカスリ聲こゑで、力ちからなげに答こたへる。

お初はつはニコニコしながら、

『何いづれも方がた、御心配ごしんぱい下くださいますな。これには深ふかい様子やうすのあることとせう』

斯かかる處ところへ言依別命ことよりわけのみことは、言依姫ことよりひめ、お玉たまの方かた、言照姫ことてるひめ、紫姫むらさきひめ、若彦わかひこを伴ともなひ、病氣見びやうきみま舞ひのために此處ここに現あらはれ、枕頭まくらもとに座ざを占しめ、天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし、天あまの數歌かずうたを唱となへて恢復くわいふくを祈いのつた。

(大正一一・五・二五 舊四・二九 外山豊二録)

## 第八章 鬼おにの解脱げだつ〔七〇〇〕

頭髮かしらに霜しもを戴いたきし

此世このよを半過なかばぎ去さつた

皺しわくちや婆ばあの一人旅ひとりたび

枯野かれのにすだく蟲むしの音ねも

細ほそく聞きゆる斷末魔だんまつま

風かぜのそよぎも何なんとなく

淋さびしさ交まじる荒野原あらのはら

杖つゑを力ちからに進すすみ行ゆく。

道みちの傍かたへの薄原すすきはらに埋うづもつた

頭あたまの缺かけた石塔せきたふ七ななつ八やつ、苔生こけむして字じも碌ろくに見みえ兼かねる

ばかり古ふるびて居ゐる。側そばに頭あたまのとれた石地藏いしぢざう、左手ひだりてに玉たまを載のせ、右手みぎてに親指おやゆびと中指なかゆび

を合あはして輪わとなし、食指ひとさしゆびをツンと空そらに立たて、地藏ぢざうも錢ぜになき衆生しゆじやうは度どし難がたしと、首くび

まで刎とられても執念しふねん深く、未まだ金錢かねの欲よくが放はなせないと見みえ、此處ここにも亦また執着しふちやく心を

遺憾あかんなく暴露ばくろして居ゐる。

一人ひとりの婆ばばは地藏ぢざうの玉たまをツクツクと打眺うちながめ打眺うちながめ、

「オイ、お前まへは何者なにものぢや、其玉そのたまは勿體もつたいなくも如意寶珠にょいほつしゆの玉たまではないか、此高姫このたかひめが

秘藏ひざうせし神寶しんぼうを何時いつの間まにか盗ぬすみよつて其天罰そのてんばつで貴様きさまの首くびは此通このとほり、サア早はやく此こち

方らへ渡わたせ」

と石地藏の手から無理に【むし】り取らうと藻掻いて居る。石塔の裏から萱の穂をガサガサ言はせながら、又ツと現はれた二人の婆に三人の男、力なき聲で、

高姫 高姫

と呼び止める。高姫は此聲に驚いて萱原に目を注げば、豈圖らむや、黒姫、鷹依姫、龍國別、テーリスタン、カーリンスの五人連れである。

高姫「これ、黒姫さま、黄金の玉は如何なつた。お前達は五人連れで手分けして、世界中を探ね廻り、あの玉を受取り無言靈話を掛けよと吩咐けて置いたのに、斯んな所で何愚圖々々して居るのだい」

黒姫「妾は貴方に無體な事を言はれ、それが残念で残念で堪らなくなつて、到頭丹後の海へ五人一度に身を投げて死んだワイ喃。この怨恨を晴らさむ爲めにお前に憑依いて生命をとつたのだ。サア之から五人が寄つて集つて、首を抜き手を抜き足を抜き、翽殺にしてやらう、覺悟をなされ」

と蒼白な顔を曝け出し、両手を乳の邊から蠅螂の様に前に下げ、風のまにまにフワリフワリと高姫の前後左右に押し寄せて来る。

高姫たかひめ 「此處ここは何處どこと心得こころえて居をる、お前達まへたちは冥途めいどへ行いつて、まだ迷まようて居をるのか。

エー死しんだ奴やつは仕方しかたがないから、もう許ゆるしてやらう、早く成じやうぶつ佛ぶつしたが宜よからうぞ

鷹依たかよりひめ 姫ひめ 「お前まへの爲ために母子おやこふたり二人ふたりが此難儀このなんぎ、お前まへは現界げんがいの積つもりだらうが、此處ここは地ぢこ

獄くの八丁目はつちやうめだ、精神錯亂せいしんさくらんしてお前まへは最早もはや地獄ぢごくの旅たびをして居ゐるのだよ

高姫たかひめ 「はて、不思議ふしぎ」

と頭あたまに手てを當あてて見みれば、何時いつの間まにか三角形さんかくけいの紙かみの帽子ぼうしを被かぶせられて居ゐる。

「ヤア、こりや大變たいへんだ、いつの間まに死しんだのかなア。もう斯かう成なつては神政成就しんせいじやうじゆ

も糞くそもあつたものぢやない。死しんだ人間にんげんが二度死にどしぬ例ためしはあるまい。此上このうへは破やぶれか

ぶれ、生命いのちを的まとにお前達まへたちを滅ほろぼして地獄ぢごくの釜かまのどん底そこへ連つれて行いつてやらう。覺悟かくご

をせよ

と目めを釣つつて呶鳴どなりつけた。龍國別たつくにわけは威丈高ゐたけだかになり、

「こりや高姫たかひめ、俺等おいら母子おやこを斯こんな目めに遇あはせよつたのも、元もとは貴様きさま故ゆゑぢや。何程なにほど

貴様きさまが頑張ぐわんばつても此方こちらは五人其方ごにんそちらは一人ひとり、到底衆寡敵たうていしうくわてきする事ことは出來できまい。サア覺かく

悟ごをせい



吸を限りに何處ともなく驅けだした。五人は執念深く追つ驅けて行く。

高姫は身を没する許りの枯れた薄の中に蹲んで居る。五人は一生懸命駆けつけ  
来り、

「ヤア、臭いぞ臭いぞ、高姫の臭がするぞ」

と其處中を犬の様に嗅ぎつけ廻る。高姫は薄の中から怖々五人の姿を見れば黒姫、  
鷹依姫、龍國別、テリスタン、カーリンスと見えしは謬まり、何れも青、赤、  
黒の鬼の姿で金棒を打ち振り、萱原を片端から將棋倒しに叩いて廻り、高姫の在  
處は何處ぞと嚴重に搜索し始めた。五人の男女の鬼は、

「ア、疲れた。もう此處まで探して居らねば先方へ逃げたのだらう。思惑とは脚  
の達者な奴だ。現界では口達者だと評判な奴だが、口八丁足八丁とは此奴の事だ。  
グズグズして居ると俺等の關門を突破して、天國へ遁走するかも知れないぞ。サ  
ア早う行かう」

と驅け出す。一人の鬼は、  
「オイ、貴様達四人、先へ行け。俺は未だ此處に暫時残つて再調査をやつて見る

から……如何も俺の鼻には高姫の臭がして仕方がない

四人の鬼は、

「あと確り頼んだぞ」

と息せききつてバタバタ駆け出す音、高姫の耳に雷の如く響いて来る。高姫は二三間薄を隔てて赤鬼が角突き立て、巨眼を剥き出し砂煙草を吸うて居るのに、心も心ならず、呼吸さへようせず小さくなつて慄へて居る。

鬼「あゝ俺も生存中は黒姫と言つて色が黒い黒いと言はれた者だが、斯う冥途へ来て見れば身體中が眞赤けの赤鬼となつて了つた。然し高姫さまは、あゝ言ふものの氣の毒な事だ。如何かして助けて上げたいものだなア。何でも此邊に居るに違ひない。皆の奴をあゝしてまいた以上は、もう大丈夫だ。一時も早く嗅ぎつけて高姫さまを救ひ出さねばなるまい。ヤア四人の奴は大分先方へ行つた」

と小聲に呟きながら、高姫の潜める場所へ萱の穂を踏み分け現はれ來り、

「高姫さま、久振りでしたなア」  
高姫「ハイ、貴方は誰方で御座いますか。何卒お許し下さいませ」

「私は赤鬼ぢや、お前さまの知つてゐる通り黄金の玉を盗られた、その悔しさ残念さが残つて今此處に赤鬼となつて現はれたのだ。お前さまも玉を盗られて悔しからう。グツグツして居ると又鬼の群がやつて来て何んな目に遭はすか知れませぬぞえ。サア私の背中に負ぶさつて下さい、之から向ふの山へお伴致しませう。

其處は幽界第一の安全地帯です」

と恐ろしい顔に似ず親切な言葉に、高姫はヤツと安心し、

「あゝお前は黒姫であつたか、何卒妾を助けて下さい」

「承知しました」

と高姫を仁王が三つ兒を負うた様に軽々しく背に負ひ、金棒を引抱へ、

「ヨイシヨ　ヨイシヨ」

と足拍子をとりながら、茨だらけの嶮しき野山を何の苦もなく韋駄天走りに踏み越え踏み越え、殆ど二三十ばかりの山を登りつ下りつ、瞬く間に青々した玉草の生えて居る池邊へ下した。

此時池の波、俄に風もなきに立ち騒ぎ始めた。高姫は不審の雲に包まれつつ池



の面を目を放さず凝視て居る。赤鬼は忽ちザブンと波たつ池中に身を躍らして飛び込んだ。あとに残るは金棒ばかりである。

高姫「こりや、大變な重いものを持つたものだナ」

と手に握り見れば、桐の樹で作った張子の金棒であつた。

「へん、莫迦にして居る。何だ、大きな金棒だと思つて居たのに、斯んな鼻糞で的を貼つた様な芋殻同然の金棒だ、こんな奴なら五本や十本、假令千本萬本でも一遍に踏み躪つて了つてやる。それにしても黒姫の赤鬼、此池に身を投げて死んだのであらうか、眞に不愆な事だ」

と金棒を持つや否や、俄に自分の姿は眞黒けの黒鬼と化して了つた。暫くすると黒姫の姿は水面に浮び上がった。

高姫「あゝ黒姫さま、鬼の姿は如何なつた」

黒姫「妾は其金棒に執着が残つて居つて、鬼となつて了つたのだが、此處へ来て金棒を放擲し、運を天に任し此池の中へ身を投じた處、池中に龍宮の乙姫さまの様な立派な女神さまが現はれて、妾の鬼の皮を剥ぎとり、舊の肉體にして下さつ

たのです。お前さまも其金棒を放かしなさい。そんな物に執着があると、其通り  
忽ち鬼になつて了ひますよ。金棒は愚、形ある玉なんか執着すると、ま一つ苦  
しい地獄へ落ちねばなりません。

と波の上に浮ぶ葭の葉に軽く止まつて氣樂さうに笑つて居る。

此時以前の四人の鬼、金棒を提げ一目散に此場に現はれ、

「ヤア、高姫は此處に居つたか、覺悟を致せ。何時の間にやら俺の仲間になりよ  
つた。僭越至極、サア打ち倒めしてやらう。覺悟をせよ」

と四方より金棒を以て打つてかかる。

「何ツ、芋殻の様な金棒が何恐ろしいか。さア來い」

と自分も黒姫の捨てた鐵棒を拾ひ、打つてかからうと構へる折しも、水面に浮ん  
だ黒姫は、

「そんな物に執着してはなりません。放かしなさいよ」

と聲を限りに叫ぶ。其言葉にハツと氣が付き、池畔に投げ棄て、身を躍らして高  
姫は蒼味だつた池の面目蒐けてバサンと飛び込む。續いて四人の鬼は同じく鐵棒

を投げ、同様にバサンバサンと身を躍らした。忽ち水底に沈んだ時、麗しき女神の一柱此場に現はれ、言葉淑かに、  
「汝は未だ幽界に来るべき者に非ず、一刻も早く立ち歸れ。執着心の惡魔に引き摺られ斯んな所まで迷うて來たのだ。妾は小和田姫命、亦の名は地藏菩薩だ。早く此鬼の衣を脱げ」  
と諭しの言葉に五人はハツと鰭伏す途端に元の姿に復つて了つた。池の水は何時しか影もなく、黄紅白紫に咲き亂れたる美はしき原野の眞中に花と花とに圍まれ、涼しき風を身に浴びながら立つて居た。忽ち聞ゆる祝詞の聲、空を見上ぐれば、言依別命、言依姫命、玉治別、國依別、紫姫、若彦、お玉の方、時置師神、言照姫、お初を始め玉照彦、玉照姫、雲に乗り悠々として此場に降り來るよと見る間に、忽ち全身冷水を浴びたる如く涼しさを感じると共に目を開けば、時置師神に抱かれ、言依別命以下の枕邊に端座して、天津祝詞や數歌を奏上しつつかつた。  
是より高姫の病氣は、拭ふが如く全快した。今後高姫は如何なる活動をなすであらうか。

枯野ヶ原を只一人

道問ふ人もあら涙

胸の動悸も高姫が

とぼとぼ進む暗の路

かたへの淋しき薄野に

顔痩せこけた五人連

よくよく見ればコ八如何に

鷹依姫を始めとし

心の黒姫龍國別

テリスタンやカーリンスが

亡者となつて高姫の

姿見かけて攻め来る

コリヤ叶はぬと雲霞

一目散に逃げ出せば

途に横たふ大河の

波に胸をば躍らせつ

後振り返り眺むれば

五人は忽ち鬼となり

金棒打振り追ひ来る

南無三寶や一大事

前後も水の激流に

ザンブとばかり飛び込んで

流れ渡りに向ふ岸

ヤット一息濡衣を

搾る折しも鬼共は

河を渡りて追ひ迫る

一生懸命高姫は

丈なす萱の茂みへと

身を忍びつつ震ひ居る

五人の鬼は執拗に

高姫臭いと遠近を

探し廻るぞ恐ろしき

四ツの鬼奴は赤鬼を

一つ残して一散に

姿求めて走り行く

残りし鬼は高姫を

鬼に似合はぬ親切に

背に負ひつつ山谷を

幾つも越えて清水の

漂ふ池の袂まで

誘ひ行きて金棒を

忽ち投げ棄て池中に

身を躍らして沈み入る

時しも四ツの鬼共は

高姫此處かと駆け来り

金棒翳して打向ふ

進退茲に谷まりて

高姫池中に飛び込めば

四鬼も續いて池の底へ

たちまち水は右左

サツと別れて美はしき

女神の姿ありありと

現はれ給ひ執着心を

洗ひ落せば高姫も

五つの鬼も元の如

尊き身魂と還るよと

見ればたちまち夢破れ  
四邊を見れば言依別の

神の命を始めとし  
空助お初その外の

人々病床に集まりて  
天津祝詞や言靈の

神に奏上のまつ最中  
流石頑固の高姫も

いよいよ覺りて執着の  
心を捨てて三五の

誠の道を眞解し  
言依別の神言を

守りて道に盡すべく  
靈魂研きの御經綸

實に神界の御事は  
凡夫の如何にあせるとも

窮知し得べくもあらたふと  
かしこき神のお取なし

高姫始めて中心の  
的を掴みし物語

ここにあらあら誌しおく  
あゝ惟神々々

御靈幸はへましませよ。

(大正一一・五・二五 舊四・二九 北村隆光録)

第三篇 黄金化神

第九章 清泉〔七〇一〕

天津御神の賜ひてし 生言靈の一三

四尾の峰の山麓に 嚴の御靈と現はれて

五六七の神世を造らむと 神素盞鳴の大神が

生の御子と現れませる 八人乙女の其中に

秀でて貴き英子姫 悦子の姫と諸共に

錦の宮の九十 百千萬の神策を

幾億年の末までも 堅磐常磐に固めむと

天津御神の神言もて 金剛不壞の如意寶珠

黄金の玉や紫の 貴の寶を永久に

秘め隠したる桶伏の 山の岩戸を何時しかに

開きて茲に黒姫や 胸の動悸も高姫が

玉失ひし苦しさに 天地の神に言解の

言葉もなくなく高姫は 千々に心を碎きつつ

夜に紛れて四尾の 山の麓を出立し

六甲山の峰續き 蜈蚣の姫の一族が

立籠りたる魔谷ヶ嶽 玉の行方は分らねど

執念深き曲神の 八岐大蛇の計畫と

早合點の高姫は 鷹鳥山に小やけき

庵を結び夜も晝も 鷹鳥ならぬ隼や

鶺鴒の目に隙を窺ひつ 水も洩らさぬ三五の

教をここに經となし 緯さしならぬ身の破目を

押開かむと村肝の 心に包み岩が根に



二三の信徒伴ひて

時を待つこそ忌々しけれ。

春の陽氣も漂うて、山櫻の此處彼處、お多福面ではなけれども、花より葉が前に出る、谷路傳うてスタスタと登り来る二人の男、山櫻の古木の根元に腰打ち掛け、竹の子笠を大地に投げ棄てヒソビソ話に耽る。

甲「此通り四方の山々新装をこらし、春の英氣を含んで、木々の木の芽は時々刻々に際限もなく新芽を吹き出し、常世の春を壽ぎ、花は笑ひ、鳥は歌ひ、實に何とも云へぬ氣分になつて來た。併し乍ら吾々の奉ずるバラモン教も、一時は大江山の鬼雲彦さまが鬼ヶ城山の鬼熊別と南北相呼應して、遠近を風靡さした隆盛に引き替へ、今日のバラモン教は恰度冬が來たやうなものだ。吾々は三國ヶ嶽の砦を三五教の爲に取り毀たれてより、一旦本國へ歸り、時を待つて捲土重來せむもの、蜈蚣姫様に幾度諫言を試みたか知れなかつたが、どうしてもお聞きなさらず、又もやアルプス教の鷹依姫と共に、大自在天様の御威徳を發揮せむと主張し、此魔谷ヶ嶽にお越しになつてから早三月も経つた。併し乍ら高春山の没落以

來影響を受け、折角集まつて來た信者も、日向の氷の如く、日に日に消滅の運命を繰返し、吾々の知つた事か何ぞの様に蜈蚣姫の御大將の不機嫌、日夜の八當り、實に困つたものぢやないか。今日は何とか一つお土産を持つて歸らねば、あの難かしい顔が元の鞘に納まらない、何とか良い名案はあるまいかなア」

乙「名案と云つて、吾々の智囊の底を搾り切つた上の事だから、モウ此上逆様に振つても蝨一匹産出……否落ちて來る氣遣ひがない。要するに非常手段を用ゐるより方法はあるまいよ。鷹鳥山の鷹鳥姫は相當な年増で、蜈蚣姫と同じ様な年輩だが、まだ此方へ現はれてから幾らにもならぬのに大變な勢だ。何時も四つ時からかけて鷹鳥山の岩の根に道を説く鷹鳥姫の庵に通ふ老若男女は非常なものだ。何でも鷹鳥姫は紫の玉、金剛不壞の寶珠を腹に呑み込んで居ると云ふ事だから、一つ彼奴を直接行動で何々して了へば、後はバラモン教の天下だ。それに就て、彼が股肱と頼む玉能姫と云ふ頗る美人が居る。先づ其女から巧妙く説きつけて、此方のものにしさへすれば、鷹鳥姫に接近の機會を得ると云ふものだ。大樹を伐る者は先ず其枝を伐る……」

「將を射むとする者は先づ其馬を射ると云ふ筆法だな。併しさうウマく計畫通りに行くだらうか。當事と牛の「おもがひ」は向ふから外れると云つて、實に不安心なものだ」

「その玉能姫は何時も谷川に水を汲みにやつて来るさうだ。表口へ廻れば澤山の參詣者だから、到底目的は達し得なからうが、玉能姫は裏坂の椿谷の清泉に何時も下り立ち、靈泉を汲みに來ると云ふ事を探知して居るのだ。あの水は何でも非常な薬品を含んで居る。それを御神水だと云つて、鷹鳥姫が數多の者に與へるの  
で、凡ての病氣は奇妙に全快するさうだ。之を鷹鳥姫の奴、御神力だと稱し、股肱の臣たる玉能姫にソツと汲ませ、神前に供へさせて置くさうだ。第一玉能姫を巧妙く此方の手に入れて、其上で本城へ驅け向へば、成功疑なしだよ。サア清泉まで僅か二三丁だ。早く行かう」

とカナンボール、スマートボールの兩人は、崎嶇たる谷道を笠を手にしながら、チクチクと登り行く。

カナン、スマートの兩人は鷹鳥山の清泉に漸く辿り着いた。急坂を太き竹製の

てをけ 手桶を両手に提げ、背恰好、容貌、寸分違はぬ三人の女、ニコニコしながら二人の前に現はれ來り、

かふぢよ 甲女「あなたは、バラモン教のカナンさまでせう」

カナン「御察しの通りカナンです。此奴ア、スマートと云つて、私の乾兒です。

どうぞ此面を能くお目に止められました、お忘れなき様に……」

「ホツホ、、、忘れようと云つたつて、其お顔が如何して忘れられませう」

スマート「オイ、カナン、一目見てさへ、斯う云ふ美人が忘れられぬと云ふのだから、大した者だらう」

「ホ、、、」

と腹を抱へて女は蹲む。

スマ「コレコレお女中さま、何をお笑ひなさる。どつか私の顔に特徴がありますか……どつかお氣に入つた所が御座いますかなア」

カナン「オイ、スマート、貴様は餘程良い馬鹿だなア。一寸水鏡に照らして見よ。随分立派な顔だぞ」

三人の女は、一度に臍を抱へて笑ひ倒ける。

「ハテナ」

と不審そうにスマートは清泉に顔を照らし眺めようとする。見られては大變と言はぬ許りに、カナンは手頃の石を拾ふより早く泉の中へ投げ込んだ。忽ち波立ち、スマートの顔は細く長く横に平たく、前後左右に隨意活動、伸縮自在、眞黒けの姿が映る。

スマート「何だかチツとも見えないワ。此泉には黒ん坊の靈が浮いて居るぢやないか」

カナン「アハ、ハ、ハ、俺も可笑しうてカナンワイ、のうスマート」  
と又笑ふ。三人の女は益々笑ひ倒ける。スマートは合點行かず、波の静まったのを見定め、又もや覗きかける。カナンは石を投げ込む。スマートは、

「馬鹿にするない。何故水鏡を見ようと思ふのに、邪魔をするのだ」

「貴様の顔を貴様が見ると、俺も一寸カナン事があるのだよ。アハ、ハ、ハ、随分黒う人だなア」

「何だか俺の顔は今朝から鬱陶敷て仕方がない。スマートな気がせないよ。實際は如何なつたのか」

「お目出度い奴だ。蜈蚣姫さまが何方へ向いとるか分らぬ様にと、墨を塗つて置かしゃつたのだ。貴様の顔一面墨だらけだよ。俺は面黒くてカナンボールだ」

「そりや大變だ。スマートも一つ此處で手水を使はうかなア」

「イヤイヤそんな事しようものなら大變だぞ。貴様は注意が足らぬので、三國ヶ

嶽で玉の在處をお玉の方に知らした奴だと蜈蚣姫さまに睨まれて居るのだ。大變

な恥辱を與へよつた……蜈蚣姫の顔に墨を塗りやがつたから、あの玉を奪り返す

迄はスマートの顔に墨を塗つて置くのだから……と云つてな、貴様が酒に喰ひ酔

うて寝てる間に、ペツタリコと左官屋を遊ばしたのだ」

「そりや餘り殺生ぢやないか。斯う云ふナスにそんな面を見られては堪らない。

スマートはあんな黒い奴だと、三人女の印象に何時までも残つちや堪らない。一

つ墨を洗ひ落して、好男子振り認めて置いて貰はぬと詮らぬからなア」

と無理矢理に水を掬ひ、顔の垢を落す。如何したもののか、さしもに清冽なる泉は

墨すみを流ながした如ごとく眞黒まっくろになつて了しまつた。三人さんにんの女をんなは、

「あれ、マア何どうしませう」

と顔かほをかくす。スマートはスツカリと墨すみを落おとした。生うまれ付つきの好男子かうだんしである。

スマート「オイ、カナン、俺おれの顔かほを塗ぬりよつたのは、蜈蚣むかでひめ姫ひめさまぢやなからう。

貴様きさまは怪體けつたいな御面相ごめんさうだから、俺おれと一いっしよ緒ありに歩あるくと目立めだつと思おもつて惡戯いたづらをしたのだら

う」

カナン「マア何どうでも好いいいわ。すべて神かみの道みちに在ある者ものは、犧ぎ牲せい的てき精せい神しんが肝腎かんじんだか

ら、誰たれがしたにもせよ、俺おれがした事ことにして置おけば良いいいのだよ」

「兔と角かく、三人さんにんのお方かた、貴女あなたは玉能たまのひめ姫ひめさまとか云いふ方かたぢやありませんか。どうぞ

スマートを鷹鳥山たかとりやまへ連つれて往いつて下くださいますまいかな」

甲女かぶぢよ「ホ、、、、、あなたの様やうな瓜實うりざね顔がほを連つれて歸かへらうものなら、青物屋あをものやと間違まちが

へられますわ。カナンさまの南かほ瓜ちや顔がほ、どうぞそれ計ばかりは勛忍こくらへて頂戴ちやうだいな」

カナン「オイ女をんな、南かほ瓜ちやとは何なんだ。瓜實うりざね顔がほとは何なんぢや。馬鹿ばかにするない。八百屋やぢ

やあるまいし、サアもう斯かうなつた以上いじやうは、否いやでも應おうでも、魔谷まやケ嶽がだけへ擔かたげて歸かへ

る。覺悟をせい」

乙女「誰が汚らほしい。お前の様なヒヨットコに擔がれて行く者がありますかい」

スマート「ますます貴様は七尺の男子を、馬鹿にするのだな。こりや、俺を誰様と心得て居る。バラモン教の蜈蚣姫が左守の神と聞えたる、スマートさまぢやぞ。斯う見えても何から何まで、知らぬ事のないチャアチャアだ。玉能姫、覺悟をせい」

い」

甲女「本當の玉能姫が……それ丈能く分るお前さまなら……何れだか當てて御覽

……」

スマート「一人は玉能姫、二人はお化けだよ」

甲女「どれがお化けで、どれが本物ですか」

「オイ、カナン、此奴三人共引括つて伴れて歸らう。何れがどうだか餘り能う化けて居よつて、見當が取れぬぢやないか」

「さうだなア。併し斯う云ふ美人を擔いで歸ぬと、途中で又魔がさし、中途でボツたくられると困るから、幸ひ此泉の水を塗り付け、眞黒けにして歸らうかい。」



宅へ歸つて輕石や曹達で擦れば、現在の様な綺麗な面になるのだからのう……才  
イ女、此處へ來い。一つお黒いを塗つてやらう」

三人の女一度に、

「ホツホ、、、」

と笑ひこける途端に、シユウシユウと立ち昇る白煙、忽ち四邊を包んで了つた。

二人は息も詰るやうな苦しさに其場にパタリと倒れた。三人の女は眞黒の水を手  
桶に掬ひ、二人の顔から手足一面に注いだ。兩人は焼木杭の様な色になつて、其  
側に倒れた儘氣絶して居る。三人の女は、

「旭さま……月日さま……ヤア高倉さま……さア歸りませう」

と互に白狐と還元し、魔谷ヶ嶽の蜈蚣姫が館を指して進み行く。

此處へ上つて來たバラモン教の部下四五人、

甲「オイ、スマートにカナンの大將は、此鷹鳥山の庵へ進むべく、教主の命を奉  
じて登つた筈だが、どうなつただらう。最早日も暮れかかつて居る。何とか便り

がありさうなものだなア」

乙「折角働いて、是から休まして貰はうと思つて居るのに、大將が歸りが遅いものだから、こんな危険區域へ派遣されて、堪つたものぢやない。此山は随分恐ろしい化物の出る所ぢやから、迂闊して居ると、又此間の様に眞黒黒助の怪物が出て、目玉を剔り抜かれるか知れやしないぞ。轉公は目玉を抜かれたきり、たうとうあの通り不自由な盲目となつて了つた」

甲「なアに、あれは黒ン坊の化「もん」ぢやない。此森林を暗がり紛れに歩きやがつて、松の枯枝に目玉を突當て飛び出たのだ。目を突くが最後其邊が見えなくなつたものだから、黒ン坊の化物が目を剔つたなどと云つてるのだ。用心せないと、どんな目に遇ふかも知れないぞ」

乙「イヤイヤ、松の木ぢやない。本當に黒ン坊が出たさうだ。用心せよ。そろそろ暮れかかつたからなア」

と云ひながら登つて来る。カナンはフト氣が付き見れば、赤裸にしられた眞黒の男が傍に横たはつて居る。

「オイ、スマート、何處へ往つた。早く来て呉れ。此間轉公の目を抜きよつた黒

ン坊ばうの化物ばけものが、茲ここに一匹いっぴき横たはつて居ゐよるワイ。オーイ、早はよ來こぬかい」

スマートは此聲このこゑにムクムクと動うごき出だした。

「ヤア、お前まへの聲こゑはカナンぢやないか」

「オウさうだ。貴様きさまは化物ばけものだらう。又また目をとらうと思おもつて出でよつたのだらう。其その手ては喰くはぬぞ」

「貴様きさまこそカナンに化ばけた黒くろン坊ばうだ。俺おれが了りやうせぬのだ。覺かく悟ごせい」

と足許あしもとのガラガラした石いしを拾ひろつて投なげつける。カナンも亦また石いしを拾ひろつて投なげつける。雙方さうほうより石合戦いしがっせんの眞最中まっさいちゆう、

「アイタ、」

「アイタ、」

と云いひながら大格闘だいかくとうを始はじめ、眞黒まっくろけに濁にごつた清泉きよいづみの中なかへ組くんづ組くまれつ、ドブンと落おちこ込んだ。薄暗うすくらがりに上あがつて來きた五人ごにんの男をとこ、

甲かぶ「オイ、何なんだか妙めうな音おとがしたぢやないか」

乙おつ「さうだなア。一ひとつ調しらべて見みようか。何なんでも此邊このへんには鷹鳥たかとり姫ひめの庵いほりに仕つかへて居ゐる、

玉能姫と云ふ美人が、チヨコチヨコ現はれるさうだから、ヒヨツとしたら、水汲みに来やがつて薄暗がりには過つて、ドンブリコとやつたのかも知れないぞ。蜈蚣姫さまが彼奴さへ手に入れば、後はどうでもなると仰有つて、カナン、スマートの大將に言ひつけて御座る位だから、俺達の手柄をして彼奴等の上役にならうぢやないか。此清泉へ今頃に水汲みに来る奴は、玉能姫より外にありやせぬぞ」

丙「オイ、愚圖々々云つて居ると、水を呑んで死んで了つたら何にもならぬぢやないか。サア早く助けてやらう」

と清泉の傍に五人は探り探り立ち寄つた。餘り深くない泉の中、二人の黒ン坊は組んづ組まれつ無言の儘掴み合うて居る。黒さは益々黒く、臍まで浸み込んで了つた。

甲「コレコレ、玉能姫さま、お危ないこつて御座いました。サア私が助けてあげませう。餘り暗くつて一寸も分らぬ。それにお前さま黒い着物を着て居るものだからサツパリ見當が付かぬ。私の聲のする方へお出でなさい」

横幅三間縦五六間の泉の中で、バサバサと一生懸命に格闘して居る。黒い水は

兩人の耳の穴に吸収され、知らぬ間に聾になつて居る。目玉まで眞黒け、一寸先も見えなくなつて了つた。

乙「オイ、玉能姫にしてはチツと様子が違ふぢやないか」

甲「何、何時も三人同じ様な別嬪が此泉へ現はれると云ふ事だ。大方一人陥つたので二人が助ける積りで飛び込んで居るのだらう。同じ人を助けるのにも、あゝ云ふ美人を助けるのは氣分が良い。……「どこのお方か知りませぬが、大切な生命をお拾ひ下さいまして、此御恩は忘れませぬ」……とかなんとか言つて、俺達に秋波を送るのは請合だ。三人の女を三人寄つて助ける事にしよう。皆同じ別嬪だから、甲乙がなくて後の争論も起らず、大變都合が好い。……オイ、熊、蜂、貴様は其處に番ついて居れ。吾々三人が功名手柄をするのだから……」

がら格闘を續けて居る。清泉の眞黒けになつた事は、薄暗がりでも少しも五人には氣が付かなかつた。甲は眞裸となつて救い出さむと飛び込んだ。乙丙も吾劣らじと飛び込み、

「コレコレお女中、玉能姫さま、私が助けてあげませう」  
と進み行く。此奴も眞黒けになり、三人共盲聾の眞黒けの體に變じ、五人は互に同志打を始めて居る。夜は追々と暗の帳が深く下りて來た。熊公は、  
「オイ蜂、コラ一體どうなるのだらうなア。オイ、金公、銀公、鐵、何してるのだ。玉能姫は如何なつたのだ。良い加減に上つて來ぬか。温泉か何ぞへ這入つたやうに氣樂さうに泉の中で意茶付いとるのだな。……オイ早くあがらぬかい」  
と呼べど叫べど、盲聾の眞黒黒助には少しも分らず、遂には甲乙丙の區別を取違へ、一生懸命に格闘して居る。此時以前の女神又もやパツと此場に現はれた。さうしてアークライトの様な光は頭上に輝いて來た。五人の目は、始めてポーツと明りが見えて來出した。  
カナン「ヤア此奴あ失策つた。何時の間にか美人が又やつて來よつた。オイ、スマート、斯んな所で喧嘩をして居る時ぢやない。何だ、貴様の姿は眞黒けぢやないか。矢張りスマートぢやなからう。化衆ぢやなア」  
スマート「貴様はカナンの聲を使つて、馬鹿にするな。……コリヤ女、俺達をこ

んな所へ落しよつて、高所で見物すると云ふ事があるかい」

金、銀、鐵の三人も女神の姿に驚いて俄に這ひあがつた。

甲女「危い所をお助け下さいまして、お蔭で助かりました。此御恩は決して忘れ

ませぬ」

金「ハイハイ、滅相もない。併し何時お上りになりました。私は貴女をお助けし

たいと思つて、此通り飛び込み大活動を致して居りました。……それはまア結構

でした。併し御禮を言はれるのはチツと不思議だ。救ひ上げた覚えがないのだから

乙女「銀さまとやら、あなたは妾を救つて下さつた御恩人ですよ」

丙女「鐵さま、能う助けて下さつた」

鐵「へー、有難う……ナニ、滅相な、何方を言つて良いか譯が分らぬやうになつ

て来たワイ、助けてあげたやうにも思ふし、助けてあげない様にも思ふし、……

こりやマア、如何なつたのだらう」

甲女「金さま、お前さまは、何とした黒い姿にならしやつたのだ。妾、残念で御

座ざいます」

金助きんすけ始めてはじ氣きが付きつ體からだを見れば、空地あきちなきまで墨すみの化物ばけものの樣やうになつて居る。銀ぎん、鐵てつはと見れば、これも眞黒まつくろ黒助くろすけ。

金きん「ヤア、此光このひかりに照てらし見れば、誰たれも彼かれも何故なぜ斯かう黒くろくなつたのだらう」

甲女かふぢよ「妾わたしの生命いのちの御恩人ごおんじん、金さま、銀さま、鐵さま、どうぞ此方こちらへ來きて下ください。

妾わたしが拭ふき取とつてあげませう」

と雪ゆきの樣やうな手てを延のべ、四邊あたりの草くさをむしつて牛馬ぎうばの行水ぎやうずめでもさせる樣やうに、カサカサと擦こすり始はじめた。金きん、銀ぎん、鐵てつの三人さんにんは、元もとの黒くろン坊ぼうが黄痘わうだんを病やんだ樣やうな肌はだ、忽たちまち純じゆん白色はくしやくとなつて了しまつた。

乙女をつぢよ「ホツホ、々々、綺麗きれいだこと。三人さんにんさま、一寸ちよつと御覽ごらんなさいませ。玉子たまごの樣やうな

綺麗きれいな肌はだ付つきにおなりなさいました」

三人さんにんはフト自じ分ぶんの體からだを見みて、純白色じゆんぱくしやくに變へんじて居をるのに且かつ驚おどろき且かつ喜よろこび、天てんにも昇のぼる心地こちして、思おもはず手てを拍うち飛とび上あつた。三人さんにんの女をんなは美うるはしき衣きぬを各々めいめいと取とり出いだし、金きん、銀ぎん、鐵てつの三人さんにんに着きせた。何なんとも云いへぬ立派りつぱな好男子かうだんしになつて了しまつた。カナン、



スマートは眞黒けに染つた儘恨めしさうに眺めて居る。

甲女「スマートさま、カナンさま、随分お黒うおなりやしたネー。妾は斯うして三人の美しき殿御を持ちました。羨りい事は御座いませぬか」と嬉しさうに手を取つて、

「サア、金さま、銀さま、鐵さま、斯う舞ふのだよ。妾とダンスを致しませう」と三男三女は手を握つてキリキリと舞うて見せる。二人は這ひあがり、指を啣へて、

カナン「アア、夢かいな。夢なれば結構だが、斯んな眞黒けになつて了つては、宅へ歸つて嬢アにだつて追拂はれて了ふワ」

熊、蜂「オイ金、銀、鐵、貴様等は三人の美人を助けて、そんな陽氣な事をしやがつて俺達を馬鹿にするのか。チツと俺にも分配したらどうだ」

金「生憎三人の美人だから、パンか何かの様に割つて與へる譯にも行かず、まあ時節を待つのだなア。カナンにスマートの御大將でさへも、あの通り黒ン坊になつて了つたのだから、其事を思へば貴様はまだ元の生地ままだもとの儘保留ままほりうされて居るのだ

から、せめてもの喜悅よろこびとして、グツグツ言いはぬが得とくだらう。俺おれはこれから此このナイ  
スともと共に鷹鳥山たかとりやまに立向たちむかひ、鷹鳥姫たかとりひめ様さまにお目めにかかつて、御馳走ごちそうに預あづかつて來くる。  
まアゆつくり黒くろい水みづでも飲のんで、俺達おれたちの凱旋祝がいせんいはひの準備じゆんびでもして居ゐて呉くれ。カナン、  
スマートの御大將おんたいしやう、アリヨース。サアサア三人さんにんの御姫おひめさま、こんな所ところで黒くろン坊ばうを  
眺ながめてゐても殺風景さつふうけいです。どつかへ轉地療養てんちれうやうと出でかけませうか  
甲女かふぢよ「新婚旅行しんこんりよかうと洒落しやれて、これから鷹鳥山たかとりやま、再度山ふたたびやま、魔谷ケ嶽まやがだけ、六甲山ろくかふざんと、天然  
都會とくわいを漫遊まんいう致いたませう」  
カナン「オイ、金公きんこう、待たぬかい」  
と嘯鳴となつて居ゐる。忽たちまちアーク燈とうの様やうな光ひかりはブスツと消きえた。六むつの白しろい姿すがたは闇やみに  
浮ういた様やうに山上目さんじやうめ蒐がけて薄うすれ行ゆく。

（大正一一・五・二六 舊四・三〇 松村眞澄録）

玉能姫と現はれたる三人の女は、甲を上枝姫と云ひ、乙を中枝姫と云ひ、丙を下枝姫と云ふ。金、銀、鐵の三人は漸く美人に導かれ、名も知らぬ山の頂に辿り着いて居た。

金 上枝さま、不思議の縁で貴女と斯う云ふ仲になつたのも何かの因縁でせうなア。一寸先も分らないやうなあの山道を、貴女のお蔭で漸く此處に登つて來ました。が、どうも此邊は鷹鳥山とは趣が違ふぢやありませんか

上枝姫 違ひますとも。鷹鳥山を距る事、殆ど三百里ですよ

何時の間に、そんなに遠く來たのでせう

ホ、、、、、、貴方は御存じありますまいが、私は天人ですよ。貴方の體を翼の中にに入れて來たのですから、殆ど半時許りの間より經つて居ませぬ

それにしてても餘り早いぢやありませんか。併し今迄銀、鐵、外二人の姫さまは此所へ一緒に來た筈なのに、何處へ往つて仕舞つたのでせう

神界では、タイムもなければ遠近もありません。さう御心配なさらずとも今に會ふ事が出來ます。今と云つても現界で云へば五十萬年の未來です

何と合點の行かぬ事を仰有いますなア。此處は現界ではありませぬか」

「現界と云へば現界、神界と云へば神界で、顯神幽一致の大宇宙の世界を逍遙して居るのですからなア」

「何だか私は狐に誑まれたやうな氣が致します。性來の黒ン坊の私、何時の間にやら艶々した皮膚になり、色迄白くなつて來ました。さうして貴女の様な立派なネースに手を曳かれ、見も知らぬ麗しき山の頂に導かれたと云ふのは、どうしても合點が往きませぬ。夢ぢやありますまいか」

「夢は現界の人間の見るものです。聖人に夢なしと云うて、清淨潔白の人間に夢があつて耐りますか。畢竟貴方が玉能姫さまが清泉に陥り溺死をしようとして居たのを助けて上げたいと云ふ其眞心が凝つて、此處に私と斯う樂く暮す事が出来る様になつたのです。要するに其心より玉能姫さま同様の妾を生出し救ひの國を開かれたのです。併し其次に貴方は玉能姫を救ひ上げ、それを恩に着せて自分の物にしよふと思ひ且其言靈を使つたでせう。それで其心と言葉が凝つて又一つの迷ひの國が展開して居ます。其處へ貴方は是から旅行せねばなりません。も一

つ奥の國は蜈蚣姫に褒められて手柄をしようと言ふ修羅道が展開して居ます、これも一度踏まねばなりません。私と斯うして楽しく、麗しき山の頂に、百花爛漫たる種々の花を褒めながら楽しむのも束の間ですよ。唯貴方の初一念の玉能姫を救ふと云ふ好意が造つた世界は極短いものです。左様なら」

と云ふかと思れば姿は煙となつて消えて仕舞つた。四面暗澹として咫尺を辨ぜざるに至つた。金は、

「モシモシ上枝様、何處へお出になりました。も一度お顔を見せて下さいませ。ア、もう姿がなくなつたか、假令妖怪變化でも、唯の一時でもこんな愉快な氣分になる事を得ば死んでも満足だ。ア、どうしたら良からう」

と暗夜の道を前後左右に狂ひ廻る途端に、千仞の谷に眞逆様に顛落し、谷川の青淵に「ざんぶ」とばかり落ち込んで仕舞つた。

何處ともなく現はれ来る一人の鬼婆、矢庭に眞裸となり、金助を小脇に引き抱へ救ひ上げた。金助は今や溺死せむと苦み悶えたる矢先、何人かに救はれ、嬉しさの餘り、

「何れの方かは存じませぬが、よくマア助けて下さいました。有難う存じます」と面を上げよくよく見れば、いつしか夜は明け放れ、山奥の谷川の邊に見るも恐ろしい鬼婆に救はれて居た。金助は吃驚仰天、此場を逃げ去らむとする時、鬼婆はグツと素首を握り、

「これこれ金助さま、お前さまを助けたのは此婆だよ。さアこれから私のハズバンドになつて下さい」

「やア此奴は大變ぢや。上枝様のやうな美人なら、假令化衆でも恐ろしくはないが、お前のやうな皺苦茶だらけの、口が耳まで裂けた鬼婆アさまの亭主になるのは許して貰ひたいなア」

「私は【いもり】姫と云ふ腹に眞赤な痣があり、南無妙法蓮華經と御題目を天然に表はした、【いもり】の様な婆だ。これもお前の心から造つて生んだ鬼婆だから、お前の世話にならいで誰人の世話にならう。お前は玉能姫を助け、それを恩に着せて、戀の欲望を遂げようとしたではないか。【いもり】の黒焼振りかけて、女を思ひつかさうとするやうな蟲の好い考へを起すものだから、たうとう其心の

鬼おにが私わたしを生うんだのだから、何なんと云いつても離はなれやせぬぞえ」

「惚ほれくすり薬りやく、他ほかにないかと蝶いもり姫ひめに問とへば、指ゆびを輪わにして見みせたげな」指ゆびを輪わにする  
と云いふ意味いみは、世よの中なかの仇きうてき敵てきとして喜よろこばれて居ゐる妙めうな運うんめい命めいを辿たどる金きん助すけの事ことだよ。  
金きんちゃんには美びじん人じんが惚ほれる可かのうせい能せい性が備そなはつて居ゐる。併しかし乍ながら蝶いもり姫ひめでは駄だ目めだよ。  
なんぼ金きんさまが色いろ男をとこでも、お前まへのやうな悪あく垂たれ婆ばばには聊いささか御ご迷めい惑わく千せん萬ばん、ナンノホ  
ウレンゲキヨウだ。今こんど度どばかりは何どうか許ゆるして呉くれ。又また逢あふ時ときもあらうからなア」

鬼おに婆はばの蝶いもり姫ひめは、涙なみだをハラハラと流ながし、

「そりや聞きこえませぬ金きん助すけさま。お前まへと私わたしの其その仲なかは、金きん助すけや經きやう惟うか子たびらの事ことかいな。初はじめて逢あうた其その日ひから……」

「コラコラ、何なに吐ぬかすのだ。昨きのふ日ふや今けふ日ふの事ことぢやない、と云いひやがるが、現げんに今いま逢あうた許ばかりぢやないか」

「そりや違ちがひます金きん助すけさま。お言ことば葉は無む理りとは思おもはねど、お前まへは元ぐわん來らい【ずるい】人ひと、  
女をんなの尻しりを付つけ狙ねらひ、狙ねらひ狙ねらうた魂たましひが、凝こり固かたまつて七なな八やとせ年とせ、ここ【いもり】の  
姫ひめとなり、お前まへの心こころの黒くろ幕まくを、開あけて生うまれた此この妾わたし、今いま更さら捨すてようとはそりや聞きこえ

ませぬ、胴欲ぢや。假令此身は閻魔の廳で、如何なる酷い成敗に遭はされうとも、私の夫とも親とも頼む金助さま、どうしてこれが思ひ切られようか。思へば思へば前の世の、まだ前の世の前の世の、昔の昔のさる昔、去つた女房の怨靈や、泣かした女の魂が、凝り固まつて今此處に、お前に逢うた嬉しさは、千代も八千代も萬代も、忘れてならうか【いもり】姫、逢ひたかつた、見たかつた、明けても暮れてもお前の事、夢寐にも忘れぬ女房が、心を推量して下さんせいなア」

「こりやこりや、【いもり】姫とやら、切なる心は察すれど、某は鷹鳥山の岩窟に立ち向ひ華々しく言靈戦を開始して、當の敵たる鷹鳥姫を虜に致し、如意寶珠の寶玉を手に入れねばならぬ大切な身の上、夫婦になれなら、事と品によつてはならぬ事もない。何は免もあれ凱旋の後、否やの返事を仕らむ。サア早う其處を放しや。時延びる程不覺の基、工、聞き分けのない鬼婆め」

「愛憐き夫が討死の、門出を見かけて女房が、これが黙つて居られうか、泣く泣く取り出す拳骨の痛さ、耐へて往かしやんせ」

「こりや鬼婆、洒落ない。貴様等に拳骨を喰はされて耐るか、あた縁起糞の悪い、



討死の門出なんて何を云ふのだ

「これ金さま、妾の素性を知つて居るかい。お前は女にかけては随分ずるい人だが、金にかけては雪隠のはたの猿食柿、一名身不知と云ふ、柿のやうな男だ。瀝うて、汚うて、細かうて、喰へぬ男だと云はれて来ただらう。そして鬼金だ鬼金だと人に持て囃された悪黨者だ。金が敵の世の中だよ。大勢の恨とお前の鬼心が混淆になつて、こんな「いもり」姫の鬼婆が出現したのだ。云はば色と金との権現様だ。お前は豪さうに人間面を提げて歩いて居るが、決してそんな資格はありませぬぞえ」

「エ、困つた口の悪い婆が現はれたものだなア、人間でなければ三げんか、四げんか、五んげんさまか」

「良い加減にお前さまも改心して、解脱さして呉れたら何うだいな。それが出来ねば何處迄もお前さまにくつ着いて行かねばならぬ。磁石が鐵に吸着くやうなものだ。スートハートした病は、お醫者さまでも有馬の湯でも、根つから葉つから何處迄も癒りやせぬワイなア。ア、味氣なき闇の浮世だ。誰がすき好んでこん

な鬼婆になりたいたいものか、お前と云ふ男は殺生な男だ。サア何うして下さる』  
と堅い冷たい皺だらけの手で、金助の兩腕を左手に一掴みとなし、右の腕に蝶螺の壺焼を固めて、

「これ金さま、お前は本當に情ない人だ。イヤイヤ喰へない人だ。サア此婆の身を何うして下さる』

と耳迄引き裂けた口をパクパクさせながら口説きたてるその嫌らしさ、身の毛もよだち首筋元の「ぞわ」ぞわと寒さにハツと氣が付けば、以前の清泉の中に飛び込んだ途端、向脛を打ち、氣絶して居た事が分つた。傍を見れば人の呻聲、咫尺を辨ぜぬ闇の中から次々に聞えて来る。

斯くして漸く夜は烏の聲にカアと明け放れ、四邊を見れば、銀、鐵、熊、蜂、カナンボール、スマートボールの六人は、彼方此方の草の中に、荊棘搔きの血だらけの顔を曝して苦悶して居た。

(大正一一・五・二六 舊四・三〇 加藤明子録)

第一章 黄金像〔七〇三〕

向脛を擦り剥き、顔を顰めながら清泉の岩壺より這ひ上りたる金助は、スマー  
トボール、カナンボール、銀、鐵、熊、蜂の顔面の擦過傷や茨搔きの傷を眺め、  
「アー誰も彼も負傷せないものは一人もないのだな。斯んな事があらう道理がな  
い。如何しても吾々の行動に良くない點があるのだらう。バラモン教の大神様の  
爲に所在最善の努力を費してゐる吾々七人が七人乍ら斯んな目に遇ふと云ふのは、  
全く神様の御神慮に叶はないのかも知れない。但しはバラモン教の神様の御精神  
かも分らない。何が何だか一向合點が行かぬ。併し乍らバラモン教の本國に於て  
は、眞裸體にして茨の中へ投げ込まれ、水を潛り火を渡り、劍の刃渡り、釘を一  
面に打つた下駄を穿くと云ふ事が、最も神様を悦ばしめる行となつてゐるさうだ。  
自轉倒島では、そこ迄の事は到底行はれないから、今のバラモン教は荒行は全然  
廢されてゐる。併し乍ら此通り惟神的に、皆が皆まで血を出したと云ふのは、或  
は御神慮かも知れない。併し乍ら天地の神の生宮たる肉體を毀損し、神靈の籠つ

た血液を無暗に體外へ絞り出すと云ふ事は、決して正しき神業ではあるまい。之を思へばバラモンの教は全く邪教であらう。嗚呼吾々も今迄は善と信じて、斯かる邪道に耽溺してゐたのではなからうか。バラモン教が果して誠の神なれば、鷹鳥姫を言向和す出征の途中に於て、斯んな不吉なことが突發する道理がない。それに就ては昨夜の夢、合點の行かぬ節が澤山にある。自分の心より美人を生み、極樂世界を拓き、又鬼を生み、地獄、餓鬼道、修羅道を現出すると云ふ眞理を悟らされた。此處は鷹鳥山の深谷、三五教の神様のわが身魂に降らせ給うて、斯かな實地の教訓を御授け下さつたのであらう。ア、有難し、勿體なし、三五教の大神様、今迄の罪を御赦し下さいませ。惟神靈幸倍坐世かむながらたまちはへませと一生懸命に念じてゐる。六人は傷だらけの顔を互に見合せ、  
「ヤー、お前は如何した。オー、貴様もえらい傷だ」  
と互に叫びながら、金助の前に期せずして集まり來り、金助が懺悔の獨語を聴いて怪しみ、首を傾け凝視めてゐる。金助は忽ち神懸状態となり、四角張つた肩を、なだらかに地藏肩のやうにして了ひ、容貌も何となく美はしく一種の威嚴を帯び

斷れ斷れに口を切つた。六人は、

「ハテ不思議」

と穴の開く程、金助の顔を打眺めて、何を言ふかと聴耳立てた。金助は口をモガ

モガさせながら、

「天上天下唯我獨尊」

と叫んだ。カナンボールは、

「オイ金助、ちと確りせぬかい。たかが知れた魔谷ヶ嶽の山賊上りのバラモン信

者の身を以て、天上天下唯我獨尊もあつたものかい。三十餘萬年未來の印度に生

れた釋尊が運上取りに来るぞ。ハア困つた氣違ひが出来たものだ。オイ銀公、清

泉の水でも掬うて来て顔に打掛けてやれ。まだ目が覺めぬと見えるワイ」

銀公「あんな黒い水を掬つて来ようものなら、手も口も、眞黒けになるぢやない

か」

カナン「まだ夢の連續を辿つて居るのか。よく目を開けて見よ。水晶のやうな水

が、ただようてる」

銀公ぎんこう「それでも貴様きさま、一度眞黒いちどまつくろの黒くろ坊ぼうに染そまつて了しまつたぢやないか」

カナン「それが夢ゆめだよ、俺達おれたちの顔かほを見みよ。「どつこも」黒くろいところはないぢやな

いか。貴様きさまは目めを塞ふさいでゐるから、其邊中そこらぢうが闇くらく見えるのだ。確しつりせぬかい」

と平手ひらてでピシヤツと横面よこつらを撲なぐつた途端とたんに、銀公ぎんこうは初はじめてパツと目めを開ひらき、

「ア、矢張夢やっぱりゆめだつたかなア」

金助きんすけ「此世このよは夢ゆめの浮世うきよだ、諸行無常しよぎやうむじやう、是生滅法ぜしやうめつぽふ、生滅滅已しやうめつめつ、寂滅じやくめつ爲樂つゐらく、如是我聞によぜがもん、

熟々つらつら惟おもるに宇宙うちうに獨一どくいっの眞神しんしんあり、之これを稱しょうして國祖國常立尊こくそくとこたちのみことと曰いふ。汝一切なんぢいっさいの衆しゆじ

生やう、わが金言玉辭きんげんぎよくじを聽聞ちやうもんせよ。南無無盡意菩薩なむむじんいぼさつの境地きやうちに立たち、三界さんかいの理法りはふを説示せつじ

する妙音菩薩めうおんぼさつが善言美詞ぜんげんびしゆめゆめ疑うたがふ勿なかれ。風かぜは自然しぜんの音樂おんがくを奏そうし、宇宙うちう萬有ばんいう惟かむする妙音菩薩めうおんぼさつが善言美詞ぜんげんびしゆめゆめ疑うたがふ勿なかれ。風かぜは自然しぜんの音樂おんがくを奏そうし、宇宙うちう萬有ばんいう惟かむ

神がらにして舞踏ぶたふす。天地間てんちかん一物いちぶつとして眞しんならざるはなし。惟かむ神靈かむな幸倍坐世ちへま、歸命頂きみやうちやう

禮らい。天上三體てんじやうさんたいの神人しんじんの前まへに赤心せきしんを捧ささげ、心身しんしんを清淨潔白せいじやうけつぱくにして幽玄微妙いうげんびめうの眞理しんりを

聽聞ちやうもんせよ。吾われは三界さんかいに通つうずる宇宙うちうの關門普賢聖至くわんもんふげんせいしの再來さいらい、今いまは最勝妙如來さいしやうめうにやらい、三十

三相顯現さんさうけんげんして觀自在天くわんじさいてんとなり、阿彌陀如來あみだにやらいの分身閻魔大王地藏尊ぶんしんえんまだいわうぢざうそん、神息總統彌勒しんそくそうとうみろくさ

最勝妙如來さいしやうめうにやらいと顯現けんげんす。微妙びめうの教旨けうし古今ここんを絶ぜつし、東西とうさいを貫つらぬく。穴あなかしこ、穴あなかしこ、

ウンウン」

と云つた限り身體を二三尺空中に巻揚げ、得も言はれぬ美はしき雲に包まれ、山上目蒐けて上り行く。其の審しさにスマート、カナン其他四人は後見届けむと尻ひつからげ、荊棘茂る谷道に脚を引掻きながら、山の頂指して登り行く。六人は鷹鳥山の頂に登り着いた。

金助は忽ち黄金像となり、紫磨黄金の膚美はしく、葡萄の冠を戴きながら、咲き亂れたる五色の花の上に安坐してゐた。

銀公「ヤー此奴は金助によく似て居るぞ。金助は其名の如く、全部黄金に化つて了ひよつた。オイ皆の者、これだけ黄金があれば大丈夫だ。六人が棒を作つて歸り、分解して各自に吾家の財産とすれば大したものだぞ」

鐵「まだそれでも目がギヨロギヨロ廻轉し、口がパクツイてゐるぢやないか。こんな未成品を持つて歸つたところで、中心まで化石否化金してゐない。暫らく時機を待つて、うまく固まるまで捨てて置かうぢやないか」

カナン「一時も早く持つて歸らなくちや、鷹鳥姫の部下に占領されて仕舞ふ虞れ

がある。コリヤ魔谷ヶ嶽の或地點まで擔いで往かう。さア、早く用意をせい』

熊、蜂の兩人は携へ持った鎌にて手頃の木を伐り棒を作つてゐる。スマートボー

ルは此の坐像の周圍をクルクル廻り、指頭を以つて抑へながら、

「ヤーまだ少し温味があり、血が通うてゐるやうだ。こんな化物を迂闊り擔ぎ込

まうものなら、どんな事が起るかも知れない。オイ皆の奴、此儘にして歸らうぢ

やないか』

金の像「貴様等は執着心の最も旺盛な奴輩ぢや。この金助が化體を一部たりとも

動かせるものなら動かして見よ。宇宙の關門最勝妙如來が坐禪の姿勢、本來無一

物、色即是空、空即是色、一念三千、三千一念の宇宙の理法を知らざるか。娑婆

の亡者共、吾こそは今迄の匹夫の肉體を有する金助に非ず、紫磨黄金の膚と化し

たる三界の救世主であるぞよ』

カナン「ヤー愈怪しくなつて來た。譯の分らぬことを言ひ出したぞ。オイ金助、

モット俺達の耳にもわかるやうに言つて呉れ』

「宇宙一切、可解不可解、凡耳不徹底、凡眼不可視』



「ますます譯の分らないことを云ふぢやないか。オイ金州、洒落ない。貴様は何故元の金助に還元せないので。何程貴い黄金像になつて見たところで、身體の自由が利かねば仕方がないぢやないか」

「如不動即動是、如不言即言是、如不聽即聽是、顯幽一貫善惡不二、表裏一體、即身即佛即凡夫」

「ますます分らぬことを言ひやがる。オイこんな代物にお相手をしてゐたら、莫迦にしられるぞ。モ一歸らうぢやないか」

銀公「これが見捨てて歸られようか、寶の山に入りながら一物も得ずして裸體で歸ると云ふのは此の事だ。何處までも荒魂の勇を鼓し、六人が協心戮力此の黄金像を魔谷ヶ嶽の俣ヶ淵迄伴れて行かう。サア、皆の奴、一二三だ」

と前後左右よりバラバラと武者振りつく。金像は一つ身慄ひをするよと見る間に、六人の姿は暴風に蚊軍の散るが如く、四方八方に目にとまらぬ許りの急速度を以て飛散して了つた。

金像は體內より鮮光を放射し、微妙の靈音を響かせながら、ムクムクと動き始

めた。忽ち三丈三尺の立像と變じ、鷹鳥山の山頂にスツクと立ち、南面して瀨戸の海を瞰下し、兩眼より日月の光明を放射し始めた。

鷹鳥山は暗夜と雖も光明赫灼として、數十里の彼方より雲を通して其の光輝を見ることを得るに至つた。

これ果して何神の憑依し給ひしものぞ。説き來り説き去るに随つて、其の眞相を不知不識の間に窺知することを得るであらう。

(大正一一・五・二六 舊四・三〇 外山豊二録)

## 第一二章 銀公着瀑〔七〇四〕

鷹鳥山の中腹の岩の根に庵を結び、三五教の教の御柱を築かむと立籠りたる鷹鳥姫、若彦、玉能姫の三人は、何か心に期する所あるもの如く、谷川に下り立ち、楔身を修して居る時しも、中空を掠めて鳩の如く降り來れる一人の男、瀧壺

にザンプとばかり落ち込んだ。三人は俄の出来事に驚いて目を睜り、瀧壺を熟視すれば、水面の蜷りに揺られて浮き上り来る男の姿、

「こは大變」

と若彦は身を躍らし瀧壺に飛び入り、小脇に引抱へ漸くにして救ひ上げた。これは二十四五歳の元氣盛りの男の姿。種々と耳近くに口を寄せ、

「オーイ オーイ」

と魂呼びの神術をなし、天の數歌を力限りに唱ふれば、漸くにして息吹き返し、四邊をキヨロキヨロ見廻しながら、三人を見て、

「此處は何處で御座います。私は何時の間に此様な所へ來たのでせうか、見知らぬお方ばかり……貴方様は何と言ふお方で御座います」

若彦「此處は鷹鳥山の中腹、三五教の教の射場（教場）、鷹鳥姫の御住家だ」

「何卒恠へて下さいませ。生命ばかりはお助けを願ひます」

「生命を助けてやつたお前さまを、誰が又生命をとるものか。ちと氣を落ち着け

なさい。お前さまは何と言ふ名だ」

「ハイ、私は名は確か……銀と言った様に覺えて居ます」

「アハ、自分の名を、銀といった様に覺えて居るとは、ちつと可笑しいぢやないか。今見て居れば天から降つて來た様だが、一體何處の國から來たのだ」

「ハイ、一寸待つて下さい。さう短兵急にお尋ねになつても、魂が何處か宿替したと見えて、はつきりとお答へが出來ませぬ」

「ア、さうだらう、無理もない。大空から降つて來たのだもの。まあゆつくり着物を着替へさして上げるから、此處で休んで氣を落着け、其上で物語をしたが宜からう。鷹鳥姫さま、どうも妙な事があるものですなア」

鷹鳥姫「何れ日の出神様の御子さまが澤山あると言ふ事だから、妾等が誠を憐み給うて天から應援に來て下さつたのかも知れませぬ。兔も角大切に扱はねばなりませんまい。さアさア玉能姫さま、貴方は衣服を着替へさして上げなさい」

玉能姫は、

「アイ」

と答へて若彦の着替を持ち出し、男に着替へさせ、手を引きながら一室に連れ込

み靜かに寢させ、男の濡れた衣を絞り木の枝に懸けて乾かさうとして居る。

若彦「コレ、玉能姫、其着物の裏に何か標はついて居ないか。よく調べてお呉れ」と言ひすて再び鷹鳥姫と共に以前の瀧壺の傍に至り、天津祝詞を奏上し頻りに水垢離にかかり始めた。

玉能姫は衣を干しながら詳細に何か標は無きやと探す中、「銀」と言ふ印に目が付いた。

「ハア……最前銀と言ふ様に思ひますがと彼の方が言つたのは、矢張り現でもなかつたらしい。それにしても天上から彼の淵へ天降つて来るのは何か理由がなくてはなるまい。一つお氣の鎮まつた折を考へて詳しく尋ねて見よう」  
と獨語ちつつ男の横臥せる枕許に進み寄り見れば、以前の男は床上に起上り、不思議さうに四邊をキヨロキヨロ見廻して居る。

「モシモシ貴方、お氣分は如何です」

「ハイ、大變に氣分が良くなりました。然し此處は何と云ふ所で御座いますか」

「此處は鷹鳥山の三五教の射場です。貴方は天から眞逆様に瀧壺へ降つて御座つ

たが、一體何處から御出でになつたのです』

銀公は三五教の射場と聞いて心に打驚き、

「ヤア、大變だ。知らず識らずに黄金像に撥ね飛ばされて、敵の中へ落ち込み敵に救はれたのか。こりや迂闊バラモン教だなどと言はうものなら大變だ。何とか

よい考へはあるまいか」

と腕を組んで思案に暮れて居る。

「何卒仰有つて下さいませ。今貴方のお召物を絞つて干します時に、銀と云ふ標が付いて居ました」

と聞いて銀公は一層心に打驚きしが、さあらぬ態にて、

「私は無住所如來と言つて、天にも住み、地にも住み、時としては地中にも住む者で御座います。銀の字の印のついたのは銀河を渡る時、棚機姫様に餘り着物が古くなつたので替へて貰つたのです。此處は矢張り地上ですか。天上の國から見れば、お話にならない穢しい所ですな」

「天上の國はそれ程綺麗ですか」

「へエへエ、それはそれは比較になりませぬ」

「貴方は何か、天からお降りになつたと言ふお證を持つて居られますか」

「ハイ持つて居ましたが、中空に於て悪魔の群に出會し盜られて了ひ、その爲めに通力を失つて不覺をとり、此處に顛落したのです。然し無住所如來の私、無は即ち有、有即ち無、何處も彼處も吾々の自由自在の遊樂地ではありませんが、餘り地上は穢れて居るので住むべき所がなく、本當の……今は無住所如來になりました。アハ、ハ、ハ、」

と空惚ける。玉能姫は怪訝な顔してマジマジと銀公の顔を凝視め、

「ヤア、お前は………」

と頓狂な聲を出し倒れむばかりに驚いた。男は此聲に、

「発見されたか、一大事」

と一生懸命に駆け出さうとする。玉能姫はグツと襟首を後より掴んで其場に引き据ゑ、

「汝はバラモン教のカナンボールが部下の者、銀公と言ふ悪者だらう。いつやら

妾わたしが清泉きよいづみへ靈水れいすゐを汲くみに行いつた時とき、四五しごの同類どうるゐと共に妾わたしに向むかつて無理難題むりなんだいを吹ふきかけ、手籠てごめに致いたさうとした奴やつであらうがな」

「ソ、ソ、ソ、そんな事ことがあつたか存ぞんじませぬが、餘あまり事件じけんが多いおほいので、ねつから記憶きおくに浮うかびませぬワ」

「事件じけんが多いおほとは惡事あくじの數々かずかずを重かさねたと云いふ事ことだらう。サア、もう斯かうなる上うへは此儘このままでは歸かへさぬ。飽あくまでも言靈ことたまを以もつて責惱せめなやめて上げねばなりません。マア氣きを落おち着つけてお坐すわり下ください」

銀公ぎんこうは口くちの中なかで、

「此奴こいつ一人ひとりなら……どうなつとして逃にげてやるのだが、まだ外ほかに大將たいしやうが二人ふたり、信者しんの奴やつが澤山たくさんにウロウロと出入ではいりをして居をるから、逃にげる事ことも出で来きず、ハテ、困こまつた事ことだなア」

と終しまひの一句いっくを思おもはず高たかく叫さけんだ。玉能姫たまのひめは之これを聞きき、

「困こまつた事ことだとは、そりや何なにをおつしやる。善言美詞ぜんげんびしの言靈ことたまを手た向むけてやらうと云いふのだよ」



「そんなら血を出すのだけは堪へて下さいませ。言霊には誠に困ります」

「バラモン教で言霊と云へば、如何なものだなア」

「ハイ、バラモン教の言霊は、例へば此處に一人の道を破つた者が現はれたとすれば、其處に居る全部の人が、五十人あらうが千人あらうが、一人々々悉く手頃の石を以て頭を小突いて血を出します。それを贖罪の證とするのです。此處にも餘程澤山のお人が居られますが、一つ宛やられても大變だから、之だけは特別を以て御免除を願ひます」

「ホ、ホ、ホ、三五教の言霊は善言美詞の祝詞を奏上して、神界へお詫する事です」

「お蔭で私の頭も助かりました」

「とやつと安心の態にて額を撫でて見て居る。」

鷹鳥姫、若彦二人は袂身を終り、數多の信徒と共に悠々として此場に入り來り、

鷹鳥姫「ア、お前さま、氣分は如何だなア」

銀公「ハイ、思ひも寄らぬ御厄介をかけまして、其上着物まで拜借致しまして、

又言霊までお許し下さいまして、こんな有難い事は御座いませぬ」

若彦「三五教の言靈はバラモン教とは些つと違ふのだよ。さう御遠慮には及びませぬ」

「ハイ有難う御座います。然し三五教の言靈を聞きますと、矢張り石で小突かれた様に頭が痛くなり、胸が苦しくなりますから……御厄介になつた上に御厄介になるのも濟みませぬから、之ばかりは御辭退申します」

若彦は一寸見て、

「ヤア、お前はバラモン教の銀公ぢやないか。随分玉能姫を苦しめた者だねえ。玉能姫を苦しめて呉れたお禮に、善言美詞の言靈で御禮を申し上げようか」

「さう現銀に仰有らないでも宜いぢやありませんか。金……金……金公がそれはそれは偉い事ですぜ」

鷹鳥姫「あの金公が、何ぞ又悪い事を企らんで居ると云ふのかい」

「いいえ、悪い事を企らむ様な奴なら、ちつとは氣が利いて居るのだが、薩張り此頃は呆氣で仕舞つてカンカンになりました。終には私を中天に捲き上げて斯んな目に遇はしたのですよ」

「これ若彦さま、此男は妙な事を云ひますな」

「そりや、あんな妙な事があるのだもの」

若彦「どんな事があるのだ。さつさと云つて見なさい」

「金の奴、俄に黄金佛になつて仕舞ひ、譯の分らぬお經を百萬陀羅轉るのです。

あいつの身體から光が現はれて、空の雲まで色が變つて居ませうがな。一寸外へ

出て、空を見て御覽」

若彦は妙な事を云ふ奴だと呟きながら戸外に飛び出し眺むれば、鷹鳥山の山頂

に光煌々として輝き、空の色まで金色に照して居る。若彦は慌しく入り來り、

「鷹鳥姫さま、大變です。金色燦然として四邊眩ゆきまで照り輝く、異様の神人

が現はれたと見えます。而も鷹鳥山の山頂に……こりや屹度三五教の爲めには

大吉瑞でせう。オイ銀公さま、お前さまも行かないか」

銀公「又空中滑走をやらねばなりませんから、近寄つてはいけません。然し貴方

等はお出でなさいませ。そして肩や背中を撫でておやりなさいませ。金像がプリ

ツと肩を動かした最後、中天の空まで……飛行機ぢやないが……上りつめ、又

瀧壺へ眞逆様に陥ち込むと云ふ藝當が演ぜられます。私はもう懲りこりしました。

金像の金の字を聞いても膽が潰れます」

若彦「お前は金銀を得むが爲めに今迄利己主義の行動を續けて來た男だから、閻

魔さまでも忽ち地藏顔になると云ふ金の顔を見るのは餘り悪くはあるまい。サア

サア行かう、お前のやうな者を留守させて置けば、如何な事するか分つたものぢ

やない。留守の間に赤鼬でも這はされたら大變ですよ」

「滅相な、生命を助けて貰つた恩人の館に、赤鼬を這はして濟みますか。【いた

ち】て神妙にお留守を【いたち】ます。何卒早く貴方等、探險にお出でなさいま

せ」

鷹鳥姫「如何しても銀公さまが動かぬと云ふのだから、若彦さま、お前さまは此

處に銀公さまの監督がてら留守して居て下さい。玉能姫さまと二人、探險に行つ

て参ります」

と欣々として山頂の光を目標に登り行く。鷹鳥姫、玉能姫の二人は鷹鳥山の光目

標に登り見れば、銀公の云うた金像は背の高さ五丈六尺七寸もあらうかと思はる

る許りに伸長して突立ち、二人の姿を見るより、鷹鳥姫を左手に引摺み、

「オイ、まだ俺の所へ来るのは早い、もとへ歸れ」

と猫の首筋を掴んだ様に鷹鳥山の中腹目蒐けてポイと放つた。右の手に玉能姫を同じく提げノソリノソリと五歩六歩東に向つて歩み出し、

「お前は彼邊へ行け」

と又ポイと投げた。忽ち金像は煙となつて、巨大な爆音と共に消えて了つた。後に金助の肉體は、

「ア、ア、偉い神さまになつたと思へば、矢張り元の金助か。こりや、マア、如何した譯だらう。何は兔もあれ、もう斯うなる以上は三五教の信者だから、鷹鳥姫さまの庵を訪ねて歸順の意を表し、使つて貰はうか」

と獨語しつつ山頂を降り行く。

茲に金助は鷹鳥姫の庵に來り、銀公と共に改心の意を表し、若彦の股肱となつて神業に参加する事となつた。あゝ此金助を包み居たる黄金の立像は何神の化身であらうか。

(大正一一・五・二六 舊四・三〇 北村隆光録)

第四篇 改心の幕

第一三章 寂光土〔七〇五〕

嵐あらしのたけぶま魔谷まやヶが嶽たけ  
蜈蚣むかの姫ひめをけうしゆ教主けうしゆとし  
捧ささげてつく盡きんすけすきんすけ金助きんすけも  
神かみの御み稜いづ威みづもたかとり鷹鳥たかとりの  
心こころの駒こまをたてなほ立直たてなほし  
山やまの谷たに間にわ湧わき出いづる

バラモン教けうに立たて籠こもる  
朝あさな夕ゆふなに眞心まごころを

ながも清き清泉

心の園に一輪の

直に開く大御空

光隈なく照り渡り

悟るや忽ち黄金の

輝き渡る神御靈

身の丈三丈三尺の

鷹鳥山の山頂に

茲に彌勒の靈體を

折しもあれや玉能姫

光を求めて岩ヶ根の

近づき見れば金像は

巨體と變じ給ひつつ

神の司や玉能姫

魂を洗ひて忽ちに

花の薫りを認めてゆ

高天原に日月の

娑婆即寂光淨土の眞諦を

衣に包まれ煌々と

紫磨黄金の膚清く

三十三魂と成り變り

宇宙萬有睥睨し

現じて四方を照しける

鷹鳥姫は山上の

庵を後にエチエチと

五丈六尺七寸の

左右の御手に鷹鳥の

物をも言はず驚掴み

中天高く投げやれば 翼なき身の鷹鳥の

姫の司は忽ちに 元の庵に恙なく

投げ返されて胸をつき 心鎮めて三五の

道の蘊奥を細々と 奥の奥まで探り入る

玉能の姫は中天に 玉の如くに廻轉し

再度山の山麓に 落ちて生田の森の中

木々の若芽も春風に 薫る稚姫君の神

鎮まりいます聖場へ 端なく下り着きにけり

遠き神代の昔より 皇大神の定めてし

五六七神政の經綸地 時節を待つて伊都能賣の

貴の御靈の姫神と 仕へて茲に時置師

此世を忍ぶ空助が 妻のお杉の腹を藉り

生れ出でませし初稚の 姫の命と諸共に

清く仕ふる三つ御靈 三五の月の皎々と



四海を照らす神徳を  
暫し隠して岩躑躅

花咲く春の先驅を  
仕組ませ給ふ尊さよ

あゝ惟神々々  
御靈幸はひましまして

鷹鳥山の頂に  
示現し給ひし彌勒神

深き經綸の蓋開けて  
輝き給ふ時待ちし

堅磐常磐の松の世の  
榮え目出度き神の苑

花は紅葉は緑  
天と地とは紫に

彩る神代の祥瑞に  
天津神等國津神

百の神々百人は  
雄島雌島の隔てなく

老木若木の差別なく  
榮ゆる御代に大八洲

樹てる小松のすくすくと  
天津御光月の水

受けて日に夜に伸ぶる如  
進む神代の物語

黄金閣の頂上に  
輝き渡る日月

貴の瓢の永久に  
開くる御代の魁を

語るも嬉し神館

月の桂を手折りつつ

言葉の花を翳しゆく

醜の魔風の吹き荒び

朽ちよ果てよと迫り来る

曲の嵐も何のその

松の操のどこまでも

神の御業に仕へずば

固き心は山櫻

大和心のどこまでも

ひきて返さぬ桑の弓

言葉のツルを手繰りつつ

五六七の代まで傳へ行く

ミロ九の神代を「松村」が

心「眞澄」のいと清く

「山」の尾の「上」に馥「郁」と

咲き匂ひたる教の花

「太」折りて語「郎」善美世は

開き始めて「北村」氏

「隆」き御稜威も「光」りわたり

海の内「外」の「山」川も

草木もなべて皇神の

豊の恵「二」浴しつつ

神代を祝ふ神人の

稜威の身魂を照らさむと

雪に撓める絲柳の

いと軟らかに長々と

二十二卷の小田巻の

錦にしきのいと絲いとをくりかへ繰返かへし  
心こころも【加藤かとう】説とき【明あ】す

鷹たか鳥とり山やまのたかひめ高姫ひめが  
娑婆しやば即そく寂じやく光くわう淨じやう土とをばば

心こころのそこ底そこよりしやうかく正覺しやうかくし  
國くに治はる立たちのかむわぎ神業かむわぎに

仕つかへまつ奉まつりてすさの素盞すさの鳴をの  
神かみのみこと尊しんりきのしんりき神力しんりきを

悟さとりそ初はつめたるものがたり物語ものがたり  
言ことのはぐるまい葉車はぐるまい欣いそいそ々と

風かぜのすへまにすへまにゆ迂ゆり行ゆく  
あゝかむながらかむながら惟かむながら神かむながら々々

御みたま靈さち幸さちはひまひまませよませよ。

鷹たか鳥とり姫ひめはたまのひめ玉能たまのひめ姫ともなをともな伴ともなひ、  
山さん上じやうのひかり光ひかりをめあて目標めあてにのぼ登のぼり行いつたあと後あとに、  
若わか彦かひこはきんすけ金助きんすけ、  
銀ぎん公こうのふた二ふた

人りはひとキヤツひとと一ひと聲こゑ叫さけぶととも共ともにそ其そのば場ばにたふ倒たふれ、  
人じん事じふせい不ふ省せいにおちい陥おちいつてしま了しまつた。  
若わか彦かひこはおどろ驚おどろ

いたにてみづ谷水たにみづをく汲くみきた來きたり、  
人りのめんぶ面めんぶ部ぶにいぶき伊吹いぶきのさぎり狭霧さぎりをふ吹ふきか掛かけ、  
甦よみがへらよみがへさよみがへむとあせ焦あせるをり折をりし

も、  
風かぜをき切きつてづじやう頭上づじやうよりくだ降くだりきた來きたるたか鷹たか鳥とり姫ひめのすがた姿すがたににど二にど度にどビビツツククリ、  
近ちか寄よりみ見みれば、  
鷹たか

鳥とり姫ひめはていぜん庭前ていぜんのあをこけ青苔あをこけのうへ上うへにあふむ仰向あふむけなり大だいのじ字じになつて、

「ウン」

と云つたきり、ピリピリと手足を蠢動させて居る。若彦は周章狼狽爲す所を知らず、右へ左へ水桶を提げた儘駆けまはる途端に、鷹鳥姫の足に躓き、スツテンドウと其の上へ水桶と共に打倒れた。水桶の水は一滴も残らず大地に吸収されて了つた。若彦は如何したもののか、舉措度を失ひし結果、立上る事が出来なくなつて了つた。庭前の苔の上へやうやう身を起し、坐禪の姿勢を取り、雙手を組んで溜息吐息、思案に暮れて居る。

「嗟、金、銀の兩人と云ひ、力と頼む鷹鳥姫様は此の通り、介抱しようにも腰は立たず、加ふるに妻の玉能姫の消息はどうなつたであらう。神徳高き鷹鳥姫様でさへ斯の如き悲惨な目に遇ひ給うた位だから、吾妻も亦どつかの谷間に投げ棄てられ、木端微塵になつたかも知れない。あゝ、神も佛もないものか」

と稍信仰の箍が緩まうとした。時しもあれや、バラモン教のスマートボール、カナンボールを先頭に、鐵、熊、蜂其他數十人の荒男、竹槍を翳しながら此方を指して進み來り、此態を見て何と思つたか近寄りも得せず、垣を作つて佇み居る。

神殿しんでんに参拜さんぱいし居をりし七八人しちはちにんの老若男女らうじやくなんによの信徒しんとは、此惨状このさんじやうと寄せ來よる敵てきの猛勢まうせいに肝きもを潰つぶし、裏口うらくちよりコソコソと遁のがれ出いで、這々はうばうの態ていにて山やまを驅登かけのぼり、何處いづこともなく消散せうさんして了しまつた。

山櫻やまなぐらは折柄をりから吹き來くる山嵐やまあらしに打叩うちたたかれて、續紛ひんぶんとして散ちり亂みだれ、無常迅速むじやうじんそくの味氣あぢきなき世よの有様ありさまを遺憾あかんなく暴露ばくろして居ある。若彦わかひこは漸やうやく吾われに返かへり獨語ひとりごと。

「あゝ兵へいは強つよければ亡ほろび、木硬きかたければ折をれ、革固かほかたければ裂さく。齒はは舌したよりも堅かたくして是これに先立さきだちて破やぶるとかや。吾々われわれはミロクの大おほかみ神おほみこの大御心おほみこころを誤解ごかいし、勝かちに乗じやうじて猛進まうしんを續つづけ、進すすむを知しつて退しりぞき、直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし、宣直のりなほす事ことを怠をこたつて居あた。日夜にちやみなほ見直のりなほせ宣直のりなほせの聖言せいげんも、機軸きかいてきむいしき的無意識くちに口くちより出いづる様やうになつては、モウ駄目だめだ。あゝ過あやまつたり誤あやまつたり。

積つむ雪ゆきに撓たわめど折をれぬ柳やなぎこそやはらかき枝えだの力ちからなりけり

とは言ことよりのわけみことさま依別命ごせんじ様の御宣示ごせんじであつた。慈愛じあい深ふかき大神おほかみさま様は吾々われわれに惠めぐみの鞭むちを加くはへさせ給たま

うたのか、殆ど荒廢せむとする身魂を、再び練り直し給ひしか、あゝ有難し辱な  
し、神様、お赦し下さいませ。神や佛は無きものかと、今の今まで恨みの言葉を  
申し上げました。柔能く剛を制すの眞理を、何故今迄悟らなかつたか。口には常  
に稱へながら有言不實行の罪を重ねて來た吾々、實に天地に對し恥かしくなつて  
來ました。鷹鳥姫様が斯様な目にお遇ひなさつたのも、玉能姫の消息の分らない  
のも、吾脛腰の立たなくなつたのも此若彦が誤解の罪、實に神様は公平無私であ  
る。敵味方の區別を立つるは吾々人間の煩惱の鬼の爲す業、慈愛深き神の御目よ  
り見給ふ時は、一視同仁、敵味方などの障壁はない。あゝ神様、あゝ、此世を造  
り給ひし大神様、心も廣き厚き限りなき神直日大直日の神様、何卒々々、至らぬ  
愚者の吾々が罪、神直日大直日に見直し聞直し下さいませ。今迄の曲事は唯今限  
り宣り直します」  
と聲を曇らせ、バラモン教の一味の前に在る事も打忘れ、浩歎の聲を洩らして居  
る。スマートボールは聲も荒々しく、  
「ヤイ三五教の青瓢筆、若彦の宣傳使、態ア見やがれ。金助、銀公の二人を貴様

の宅うちに捕虜ほりよにして居ゐやがるのだらう。其その天罰てんばつでバラモン教けうの御本尊ごほんぞん大國別命おほくにわけのみこと様に  
睨にらみ付つけられ、鷹鳥たかとり姫ひめは其態そのさま、貴様きさまは又脛腰またすねこしも立たたず何なにをベソベソと吠面ほえづらかわく  
のだ。俺達おれたちはバラモンの教をしへの爲ために魔道まどうを擴ひろむる汝等なんぢら一味いちみを征伐せいばつせむが爲ために實行團じつかうだん  
を組織そしきし此場このばに立向たちむかうたのだ。これから此このスマートボールが汝等なんぢら一味いちみの奴輩やつばらを、  
芋刺いもざし、串刺くしざし、田樂刺でんがくざし、山椒味噌さんせうみそを塗ぬりつけて炙あぶつて食くつて了しまふのだ。オイ  
泣なき味噌みそ、貴様きさまも肝腎要かんじんかなめの所ところで、大變たいへんな味噌みそを付つけたものだなア。コリヤ鬼味噌おにみそ、  
何なにを殊勝しゆしょうらしく祈いのつて居ゐやがるのだ。天道様てんたうさまもテント御おき聞き遊あそばす道理だうりがないぞ。  
サアこれから顛覆てんぷくだ□

と槍やりの穂先ほさきを揃そろへて前後ぜんご左右さいうよりバラバラと攻せめ掛かる。悔悟くわいごの涙なみだに暮くれたる若彦わかひこ  
は、最早もはや心中しんちう豁然かつぜんとして梅花ばいくわの咲さき匂におふが如ごとく、既すでに今迄いままでの若彦わかひこではなかつた。

傲慢無禮がうまんぶれいのスマートボールが罵詈雑言ばりざいざんも侮辱ぶじよくも、今いまは妙音菩薩めうおんぼさつの音樂おんがくか、彌勒如みろくによら  
來いの來迎らいがうかと響ひびくばかりになつて居ゐる。

□ア、有難ありがたい。われも北光きたてるの神様かみさまになるのかなア。どうぞ早く目めを突ついて欲ほしい。

■に肉眼にくがんを所有しやういふして居ゐるために、宇宙うちうの光ひかりを認みとむることが出來できないのだ。ア、惟かむな

神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世

と一生懸命に心中に暗祈黙禱を續けて居る。スマートボールは、

「オイ、カナン、どうだ。これ丈勢込んでやって来たのに、一つの應答もせず、又反抗的態度も行らない奴に向つて、攻撃するも馬鹿らしいぢやないか。如何したらよからう」

「今こそ三五教を顛覆させるには千載一遇の好機だ、何躊躇逡巡する事があるか。一思ひにやつて了へよ、スマートボール」

「併し乍ら、お前は屋内に驅入り、金、銀の在處を探して呉れよ。俺は是から此奴等に引導をわたさねばならぬ。……鷹鳥姫の婆、並びに若彦のへボ宣傳使、よく聞け。此世は自在天大國別命の治しめす世の中だ。然るに何ぞ、天則違反の罪を負ひて、永遠無窮の根底の國に、神退ひに退はれた國治立命や、現在漂浪の旅を續けて居る素盞鳴尊の惡神を頭に戴き、猫を被つて、天下を混亂させむとは憎き奴共。天はバラモン教の蜈蚣姫が部下スマートボールの手を借りて汝を誅戮すべく此處に向はせ給うたのだ。サア此世の置土産、遺言あらば武士の情だ、



聞いてやらう。娑婆に心を残さず、一時も早く幽界に旅立到せ。覺悟はよいか』  
と部下に目配せしながら、竹槍をすごいアワヤ一突にせむとする折しも、中  
より急速力を以て降り來れる一塊の火弾、忽ち庭の敷石に衝突して爆發し、大音  
響と共に四面白煙に包まれ、咫尺を辨ぜざるに立到った。中よりコンコンと白狐  
の鳴き聲、谷の彼方此方に警鐘を亂打せし如く、頻りに聞えて來た。レコード破  
りの大音響に、失心して居た鷹鳥姫はハツと氣が付き、頭を上げて眺むれば、四  
邊白煙に包まれ、身は空中にあるか地底にあるか、判別に苦しみつつ、獨り頭を  
傾けて記憶の糸を手繰つて居る。金助、銀公兩人もハツと氣が付き、咫尺も辨ぜ  
ぬ白煙の中を腹這ひながら表に出で、若彦、鷹鳥姫の傍に知らず識らずに寄つて  
來た。忽ち空中より優美にして流暢な女神の聲にて、  
『三五教の宣傳使鷹鳥姫、若彦の兩人、よつく聞かれよ。取別けて鷹鳥姫は執着  
の念未だ去らず、教主言依別命の示諭を輕視し、執拗にも汝が意地を立てむとし、  
神業繁多の身を以て聖地を離れ、此鷹鳥山に居を構へ、大神を齋り、汝が失ひし  
二個の寶玉を如何にもして再び取返さむと、千々に心を碎く汝の熱心、嘉すべき

には似たれども、未だ自負心の暗雲汝が心天を去らず、常に悶々として至善至美なる現天國を惡魔の世界と觀じ、飽くまでも初心を貫徹せむと、迷ひに迷ふ其果敢なさよ。地上に天國を建設せむとせば、先づ汝の心に天國を建てよ。迷ひの雲に包まれて、今や汝は地獄、餓鬼、修羅、畜生の天地を生み出し、汝自ら苦む其憐れさ。片時も早く本心に立復り、自我心を滅却し、我情の雲を拂拭し、明皓々たる眞如の日月を心天心海に輝かし奉れ』

と嚴かに神示を宣らせ給ひ、御姿は見えねども、空中を歸り給ふ其氣配、目に見る如くに感じられた。鷹鳥姫は夢の覺めたる如く心に打諾き、

「ア、謬れり謬れり、今迄吾々は神界の爲、天下萬民の爲に最善の努力を盡し、不惜身命の大活動を繼續し、五六七神政の御用に奉仕せしものと思ひしは、わが心の驕なりしか。ア、われ如何に心力を盡すと雖も、無限絶對、無始無終の大神の大御心に比ぶれば、九牛の一毛だにも及び難し。慢心取違の……われは標本人なりしか、吁淺ましや淺ましや。慈愛深き誠の神様、何卒々々鷹鳥姫が不明を憐れみ給ひ、神業の一端に奉仕せしめられむことを懇願致します。唯今より心を

悔い改め、誠の神の召使として微力の限りを盡させ下さいませ。神慮宏遠にして、  
吾等凡夫の如何でか窺知し奉るを得む。今まで犯せし天津罪國津罪は申すも更な  
り、知らず識らずに作りし許々多久の罪穢を惠の風に吹拂ひ、助け給へ。ア、惟  
神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世  
と兩手を合せ、感謝の涙に咽びながら一心不亂に天地の神靈に謝罪と祈願を籠め  
て居る。四邊を包みし白煙は忽ち晴れて、四邊を見れば此は如何に、鷹鳥姫が庵  
の前の苔蒸す花園であつた。何處よりもなく三柱の美人、上枝姫、中枝姫、下  
枝姫は、玉の如き顔貌に、梅花の笑ふが如き装ひにて現はれ來り、鷹鳥姫、若彦、  
金助、銀公の手を取りて引起し、懷より幣を取出して四人が塵を打拂ひ、勞はり  
助けて庵の内に進み入る。スマートボール、カナンボール以下一同は如何はしけ  
む、身體強直し、立はだかつた儘此光景を不審げに目送して居る。谷の木靈に響  
く宣傳歌の聲、雷の如く聞えて來た。

(大正一一・五・二七 舊五・一 松村眞澄録)

第一四章 初稚姫〔七〇六〕

空助もくすけ 神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと悪あくとを立たて別わける

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

唯何事ただなにごとも人ひとの世よは 直日なほひに見直みなほせ聞きき直なほせ

身みの過あやまちは宣のり直なほす 三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

誠まことの道みちを踏ふみ外はづし 心鷹こころたかぶる高姫たかひめが

小ちひさき意地いぢに囚とらはれて 錦にしきの宮みやを守まもります

玉照彦たまてるひこや玉照たまてるの 姫ひめの命みことや言依ことよりの

別わけの命みことの御心みこころを 空吹そらふく風かぜのいと輕かるく

聞きき流ながしたる身みの報むくい 鷹鳥山たかとりやまの頂いただきに

現あらはれ給たまひし黄金わうごんの 神かみの化身けしんが誠いましめの

礫つぶてに谷間たにまへ顛落てんらくし 苦くるしみ悶もだゆる娑婆世界しゃばせかい

心こころ一つひとつの持もちやうで 神かみの造つくりし此この國くには  
 天國てんごく淨土じやうど地獄ぢごく道だう 自由じいう自在じざいに開ひらけゆく  
 吾身わがみの作つくりし修羅しゆら畜生ちくしやう 心こころの中なかの枉鬼まがおにに  
 虐しひたげられて高たか姫ひめは 清泉せいせん忽たちち濁にごり水みづ  
 湧わきかへりたる胸むねの中うち 聞きくも無む殘ざんな今け日ふの春はる  
 花はな咲さき匂におひ風かぜ薫かをり 小鳥ことりは歌うたひ蝶てふは舞まふ  
 花はなと花はなとに包つつまれし 常世とこよの春はるも目まのあたり  
 神かみの大道おほぢを白煙しらけむり 深ふかく包つつまれ目めも鼻はなも  
 口くちさへ利きかぬ淺あさましさ それに續つづいて若彦わかひこが  
 血けつき氣きにはやる雄健をとけびの たけび外はづして久方ひさかたの  
 天津あまつそら空そらより降くだり來くる 神かみの礫つぶてに身みを打うたれ  
 忽たちち地ち上じやうに倒たふれ伏ふし 息いき絶たえ絶だえの瞬しゆん間かんに  
 心こころの開ひらく梅うめの花はな 天國てんごく淨土じやうどの樂園らくえんを  
 初はじめて覺さとる胸むねの中うち 今迄いままで犯をかせし身みの罪つみや

心の汚れ忽ちに 悟りの風に吹き拂ひ

初めて此處に麻柱の 眞の司となりけり

あゝ高姫よ若彦よ 娑婆即寂光淨土ぞや

神も佛も枉鬼も 大蛇醜女も狼も

心を焦つ針の山 身を苦しむる火の車

忽ち消ゆる水の靈 神素盞鳴大神の

千座置戸の勳に 心の空の雲霧を

拂はせたまふ神言を 朝な夕なに嬉しみて

尊き恵を忘れなよ 神は汝と俱にあり

とは云ふものの拗けたる 身魂の主は何として

正しき神の坐まさむや あゝ惟神々々

恩頼を蒙りて 心の岩戸を押し開き

誠明石の浦風に 眞帆をあげつつ往く船の

浪のまにまに消ゆるごと 一日も早く八千尋の

海より深き罪咎を

祓戸四柱大御神

祓はせ給へ神の子と

生れ出でたる高姫や

若彦つづいて玉能姫

金助、銀公其他の

バラモン教に仕へたる

スマートボールを始めとし

カナンボールや鐵、熊や

其他數多の教子よ

早く身魂を立て直せ

神が表に現はれて

善と悪とを立て別ける

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

誠一つの神の道

幾千代迄も變らまじ

變らぬ誠の一道に

向ひまつりて松の世の

光ともなり花となり

鹽ともなりて世の中の

汚れを清め味をつけ

神の柱とうたはれて

恥らふことのなき迄に

磨き悟れよ神の子よ

神に仕へし空助が

赤き心を立て通し

初稚姫の命もて 玉能の姫の神魂を

此處に伴ひ來りたり 汝高姫、若彦よ

神の御聲に目を醒ませ 心にかかる村雲も

忽ち晴れて日月の 光照らすは目のあたり

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

と歌ひつつ時置師神の空助は、初稚姫を背に負ひ、玉能姫と諸共に此場を指して  
現はれた。

此宣傳歌の聲に鷹鳥姫、若彦、金、銀の四人は身體元の如く自由となりて立ち  
上り、空助の前に嬉し涙に咽びながら両手を合せ、感謝の意を表し、恭しく首を  
垂れて居る。

空助「皆さま、大變なおかげを頂きましたなア」  
鷹鳥姫「ハイ、有難う御座います。餘り吾々の偉い取違ひで、今迄開いた口のす  
ぼめやうが御座いませぬ」



若彦わかひこ「御神諭ごしんゆの通りとほアフンと致いたしました」

空助もくすけ「随分ずぶん澤山たくさんな警護けいごの役人やくにんが、竹槍たけやりを持つて御守護遊ごしゆごあそばして居をられますな。此この

方々かたがたは何時いつお出いでになつたのですか」

鷹鳥姫たかととりひめ「ハイ、吾々われわれの心こころに潜ひそむ悪魔あくまを追出おひだしに來きて下くださつた御恩ごおんの深ふかいお方計かたばかり

です」

若彦わかひこ「此方々このかたがたはバラモン教けうの蜈蚣姫むかでひめさまの部下ぶかの方かたださうです。厚あついお世話せわにな

りました。何卒どうぞ貴方あなたから宜敷よろしくお禮れいを云いうて下くださいませ」

體からだは棒ぼうのやうになつて強直きやうちよくしたバラモン教けうの連中れんちゆうも、首くびから上うへは自由じいゆうが利きくの

で互たがひに首くびを掉ふり、顔かほを見合みあせ、小聲ここゑになつて、

スマート「オイ、カナン、嫌いやらしい事ことを云いふぢやないか。散々さんざん悪口あくこうをつかれ、危あぶ

ない目めに遇あはされた俺達おれたちに向むかひ、禮れいを云いつて呉くれと吐ぬかしゃがる。この御禮おれいは中々なかなか

骨ほねがあるぞ。確しつりして居をらぬと、中空ちゆうくうより飛行機墜落ひかうきつあらくざんし惨死まくなの幕まくが切きつて落おとされる

かも知しれない。困こまつたものだなア」

カナン「何なんと云いうても、この通りとほ不動ふどうの金縛りかなしばを食くうたのだから謝罪あやまるより仕方しかた

がない。抵抗しようと言った所で、こんな木像では何うする事も出来ぬぢやないか

と囁いて居る。空助の背から下された初稚姫は一同の前に立ち、忽ち神懸り状態になつて仕舞つた。一同は期せずして初稚姫に視線を向けた。初稚姫は言静に、  
「三五教の宣傳使鷹鳥姫、若彦其他一同の人々よ、八岐大蛇の猛り狂ふ世の中、  
暗黒無道の娑婆世界とは云ひながら、汝等が心の岩戸開けし上は暗黒無明の此世も、もはや娑婆世界ではない、天國淨土である。娑婆即寂光淨土の、至歡至樂の  
パラダイスだ。汝等は八岐大蛇を言向け和し、ミロク神政の神業に参加せむと欲せば、先づ汝が心の娑婆世界をして天國淨土たらしめよ。この世界は汝が心によりて天國ともなり又地獄ともなるものぞ。風は清く山は青く、河悠久に流れ、木々の梢は緑の芽を吹き出し、花は笑ひ小鳥は歌ひ、蝶は舞ひ、自然の音楽は不斷に聞え、森羅万象心地よげに舞踏し、吾等の目を樂しましめ、耳を喜ばせ、馨しき匂ひは鼻を養ふ。木の實は實り五穀は熟し、魚は跳ね、野菜は笑を含みて吾等が食ふを待つ。大道耽々として開け、鐵橋、石橋、木橋は架渡され、道往く旅人も

夕ゆふへになれば旅宿りよしゆくありて叮寧ていねいに宿泊しゆくはくせしめ、湯ゆを與あたへ食しよくを與あたへ暖あたたかき寢具しんぐを提ていきよう供し、往ゆくとして天國てんこくの狀況じやうきやうならざるはない。遠とほきに往ゆかむとすれば汽車きしやあり、電車でんしやあり、郵便ゆうびん電信でんしんの便べんあり、斯かくの如ごとき完全くわんぜん無缺むけつの神國しんこくに生せいを託たくしながら、是これをしも娑婆しやば世界せかいと觀くわんじ、暗黒あんこく無明むみやうの世よと見みるは何故なにゆゑぞ、汝なんぢの心こころが暗くらきが故ゆゑなり、身魂みたまの汚けがれたる爲ためなり。宣傳せんでんか歌かに云いはずや「此世このよを造つくりし神直日かむなほひ、心こころもひろき大直日おほなほひ」と、あゝ斯かくの如ごとき直日なほひの神かみの神恩しんおん天てんの高たかくして百鳥ももどりの飛とぶに任まかすが如ごとく、海うみの深ふかく廣ひろくして魚鱉ぎよべつの踊をどるに任まかすが如ごとき、直日なほひの心こころを以もつて一切いっさい衆生しゆじやうに臨のぞめば、何れも皆神みなかみの光ひかりならざるはなく惠めぐみならざるはなし。鬼おにもなければ仇あだもなし、暗やみもなければ汚けがれもなし。一日ひとひも早はやく眞心まごころに省かへりみ、一切いっさいに對たいして心靜こころじやうに見直みなほせ聞きき直なほせ、以いぜ前の誤解ごかいは速すみやかに宣のり直なほせよ。これ惟神かむながらなるミロクばんいの萬有あに與あたへ給たまふ大御惠おほみめぐみなるぞよ。あゝ惟神かむながら靈たま幸倍はへ坐世ま」  
と云いひ終をはつて初稚はつわかひめ姫ひめは元もとに復ふくし、再ふたたび空助もくすけの背せに愛あいらしき幼をさなき姿すがたを托たくした。  
鷹鳥たかとりひめ姫ひめ、若彦わかひこは一言いちごんも發はつし得えず地つちに嚙かじりつき、感謝かんしゃの涙止なみだめ度どなく身みを慄ふるはして居ゐた。今迄いままで玉能たまのひめ姫ひめと見みえしは幽體いうたいにて、かき消けす如ごとく消きえ失うせた。空助もくすけ父子おやこの

姿も、如何なりしか目にも止まらず、スマートボール以下の人々も何時しか消えて、白雲の漂ふ天津日は煌々として此光景を見下したまひつつあつた。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・五・二七 舊五・一 加藤明子録)

## 第一五章 情の鞭〔七〇七〕

時置師神、初稚姫、玉能姫は、忽然として此の場に姿を隠した。何時の間にか押寄せ来りしバラモン教のスマートボール以下數十人の人影も、煙の如く消えて了つた。鷹鳥姫、若彦は互に顔を見合せ、不審の念に驅られながら、鷹鳥姫「これ若彦さま、なんと不思議ぢやありませんか。私は貴方に御留守を頼み、此山の頂に玉能姫さまと登つて見れば、黄金の立像四邊眩ゆき許りに輝き給ひ、莊嚴無比にして近づくべからざるやうでしたが、勇氣を出して御側近く立寄

つたと思へば、左右の御手を伸ばして吾等二人を中空に投げ上げ給ひ、後は夢心地、覺めて見れば吾庵の庭先に倒れてみました。さうして天より神さまの聲聞え、いろいろの教訓を賜はりし時は、實に畏れ入つて自分の今までの罪が山の如く前に現はれ來り、何とも云へぬ心の苦しき。今迄の取違ひを全く覺り、神さまに罪を赦されたと思へば、バラモン教の人は竹槍を以て、妾等二人を突き滅ぼさむと攻め寄せ來る危機一髪の際、空助さまは初稚姫様を背に負ひ、玉能姫さまを伴ひ、宣傳歌を歌ひながら此場に現はれ、初稚姫様を背より下し給うたと思へば、初稚姫様は神懸状態に御成り遊ばし、娑婆即寂光淨土の因縁を細々と御説き下され、ヤレ有難やと伏し拜むと見れば、三人の御姿は煙と消えて了はれた。不思議な事があればあるものだなア

若彦「私も其の通りで御座います。天から女神の聲聞え、いろいろの尊き教訓を賜はり、空助様一行は現に此處に御出でになつたのは、決して夢でも現でもありません。又蜈蚣姫の部下の人々が攻め寄せて來たのも事實です。吾々兩人は空助様親子に救はれたも同様ですから、黙つて居る譯には行きますまい。是から空

助様の御宿を訪ね、御禮に参らねばなりませんまい」

「さうですか。貴方御苦勞だが妾は此處に神様の御給仕をしながら、留守を  
してゐます。一度御禮に行つて来て下さい。金さま、銀さま、貴方も共に助けて  
頂いたのだ。若彦さまと一緒に空助さまの宅迄、御禮に行つてお出でなさい」

金、銀一度に、

「ハイ、有難う、御伴致します」

と感謝の涙に咽ぶ。茲に若彦は口を嗽ぎ手を洗ひ、高姫、金、銀二人と共に、神  
前に向ひ恭しく天津祝詞を奏上し、神言を宣り、庵を後に崎嶇たる山坂を傳ひ傳  
ひて下り行く。

山麓の稍平坦なる大木の茂みに差掛る時しも、午睡をしてゐた拾數人の男、三  
人の姿を見るよりスツクと立ち上り、前途に大手を擴げ、

「ヤ、其方は三五教の若彦であらう。汝は玉能姫と云ふ魔神を使つて、俺達を  
清泉に投げ込んだ悪神の張本、手足も顔も傷だらけに致しやがった。サア、これ  
からは返報がやしして呉れむ、覺悟をせよ」

と四方八方より棍棒打振り攻め来る。

若彦は飽く迄無抵抗主義を支持すれども、敵の勢餘り猛烈にして危くなりければ、四邊の枝振りよき松を目蒐けて猿の如く駆け上つた。金助、銀公の二人は松の小株を楯に取り、

金助「オイ、スマートボール、カナンボールの阿兄、その腹立は最もだが、此の宣傳使の知つたことぢやない。貴様等が作つた心の弁に落ち込んだのだ。敵は汝の心に潜んでゐるぞ。マア氣を落着けよ。貴様は今空助の娘初稚姫に危急を救はれて、雲を霞と遁げ去りながら、其の御恩を忘れ、未だ三五教に敵意を含むのか。貴様冷靜に考へて見よ」

スマート「考へるも考へぬもあつたものかい。俺が何時空助の娘に救けられたか。莫迦を云ふない、テンで鷹鳥姫の庵に行つたこともない。なア、カナン、妙なことを金助の奴吐すぢやないか」

「吐すも吐さぬもあつたものかい、白々しい。僅か一人や二人の宣傳使に向つて、竹槍隊を引率し、芋刺しにして呉れむと、大人氣なくも襲撃して來よつたぢやな

いか。餘り空惚けない」

「貴様はちつと逆上せてゐよるなア。これから俺が谷水でも掬つて飲ましてやらう」

「逆上せて居るのは貴様等ぢや。皆神様が貴様等のやうな分らん屋には相手になるなと云つて、若彦さまを此の松の木の上まで上らせてござるのだ。ちつと上せ様が違ふぞ。水を飲ましてやると云ひよつたが、俺の欲する水は、飲めば直様、汗や小便になるやうな水ではない。乾くことなく、盡くることなき身魂を洗ふ生命の水だ。瑞の身魂の救ひの清水だ。サア、これから俺が飲ましてやらう。確り聞けよ」

カナン「金助の奴、貴様は筒井順慶式だな。腹の黒い裏返り者、サア、一つ目を覺ましてやらう。覺悟を致せ」

と迫り来る。

金助「アハ、俺の腹が黒いと吐すが、貴様が大將と仰ぐ蜈蚣姫は何うだい。身體一面眞黒ぢやないか。其の股肱と仕へてゐる貴様の顔は野山の炭焼きか、炭



團玉か、但は屋根葺爺か、アフリカの黒ン坊か、烏のお化けか、紺屋の丁稚か、岩戸を閉めた曲神か、得體の分らぬ眞黒黒助。アハ、ハ、ハ、ハ、  
と肩を大きく揺り、二三度足で大地に餅搗きながら笑つて見せた。スマート、力  
ナンは烈火の如く憤り、  
腹黒の二枚舌、腰抜け野郎奴、云はして置けば際限もなき雑言無禮、最早勘忍  
相成らぬ、覺悟致せ  
と武者振りつく。金、銀二人は拾數人を相手にコロンツ、コロンツと格闘を始め  
た。

松の大木の上より若彦は聲を張り上げて歌ひ出した。

|           |           |
|-----------|-----------|
| 神の造りし神の國  | 恵みの露に潤ひて  |
| 大神寶と生れたる  | 世界の人は神の御子 |
| 人のみならず鳥獸  | 魚貝の端に至るまで |
| 神の造りし貴の御子 | 互に憎み争ふは   |

吾等を造りし祖神の

深き心に背くなり

スマートボール其他の

バラモン教の人々よ

吾等も同じ天地の

神のみ息に生れたる

断つても断れぬ同胞よ

愛し愛され助け合ひ

聖き尊き此の世をば

一日も長く存らへて

皇大神の降らします

恵の雨に浴し合ひ

互に心打ち解けて

四海同胞の標本を

世界に示し神の子と

生れし實をめいめに

擧げよぢやないか人々よ

三五教やバラモンと

名は變れども世を救ふ

誠と心は皆一つ

一つ心に睦び合ひ

下らぬ争ひ打切りて

手を引合うて神の道

花咲く春をやすやすと

心樂しきパラダイス

進み行く世を松の上

松の縁の若彦が

皇大神に照らされし

心の魂を打開けて  
神より出でし同胞に

眞心籠めて説き諭す  
あゝ諸人よ諸人よ

三五教やバラモンと  
小さき隔てを打破り

尊き神の御子として  
清き此世を永遠に

千代も八千代も暮さうか  
返答聞かせ早聞かせ

汝が心の仇波は  
汝が心に立ち騒ぐ

波の鎮まる其の間  
この若彦は何時迄も

松の梢に安坐して  
改心するを待ち暮す

あゝ惟神々々  
御靈幸はひまませよ

朝日は照るとも曇るとも  
月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも  
神は吾等の御親ぞや

人は残らず神の御子  
人と人とは同胞よ

親子兄弟睦び合ひ  
五六七の神代を永遠に

手を引合うて樂まむ  
神が表に現れまして

善ぜんと悪あくとを別わかけ給たまふ 此この世よを造つくりし神かむなほひ直ほひ日ひ

心こころも廣ひろき大おほなほひ直ほひ日ひ 唯ただ何なに事ごとも吾われ々われは

互たがひに胸むねを明あかし合あひ 過あやまちあらば御おたがひ互ひに

諫いさめ交かはして天あめ地つちの 神かみの心こころに叶かなひつづ

二ふたつの教をしへを解あはけ合あせ 誠まこと一ひとつの神しん界かいの

道みちに復かへるぢやないかいな 道みちに進すすもぢやないかいな

これ若わか彦ひこが一いつ生しやうの バラモン教けうの人ひと々に

對たいして願ねがふ眞まじ心こころぞ あゝ惟かむながら神かむながら々ながら

御み靈たま幸さちはひましませよ

と歌うたひ終をはつた。

俄にはかに吹ふき來くる春はる風かぜに、松まつ葉ばの戦そよぎ【そよ】そよと、梢こずえを傳つたひ下くだり來きたる。此この言こと

靈たまに辟へき易えきし、スマートボあまたールひとびとを始はじめとし、數あまた多ひとびとの人ひと々びと一いつ散さんに、雲くもを霞かすみと走はしり行ゆく。

金きん、銀ぎん一いち度どに、

「若彦さま、貴方の宣傳歌に依つて一同の者は、頭を抱へ尻引からげ、初めの勢にも似ず、雲を霞と遁げ散つて了ひました。併し乍ら彼等とても良心の閃きはありませうが、さうぢやと云つて決して油斷はなりませぬ。氣をつけて参りませうか」

若彦「マア急ぐに及ばぬ。バラモン教の人々に對し、私の宣傳歌が功を奏したか、奏しなかつたかは知りませぬが、兔も角吾々の進路を開いて呉れただけでも結構だ。此の松の木の麓に於て大神さまに感謝の祝詞を獻げませう」  
と言ひ終り早くも拍手再拜、鷹鳥山の絶頂を目標に祝詞を奏上し始めた。若彦外二人が汗を流して奏上する英氣に充ちた顔を、遠慮えしやくもなく山の春風が吹いて通る。

再度山の山麓、生田の森の中に庵を結ぶ空助の假住居、形ばかりの門戸を開いて入り来る三人の男があつた。その中の一人は若彦である。若彦は、  
「頼みます 頼みます」  
と門の戸を叩いて訪へば、

「オー」

と答へて出で来る以前の空助、素知らぬ顔にて、

「ヤーお前さまは若彦の宣傳使さま、鷹鳥山の庵に於て身魂を研き、旁御教を鷹鳥姫と共に四方に宣傳して御座ると聞いて居たが、今日は又如何なる風の吹き廻しか、此の空助が隠家を訪ねて御越し遊ばしたのは、如何なる御用でございますか」

「最初は鷹鳥姫様始め吾々一同、いかい御世話になりました。御禮を申さむかと思ふ間もなく、貴方は初稚姫さま、玉能姫と共に御歸り遊ばしたので、鷹鳥姫さまも一つ、言葉の御禮に行つて来ねば濟まないから「若彦、お前御禮に行つて来い」との仰せ、遅れながら只今参りました」

「此の日の暮紛れに三人連れで、此處へやつて来るとは合點が行かぬ。此の空助は二三日前から鬨一つ跨げた事はござらぬ。随つて貴方を最前とやら御助け申した覚えはござらねば、何うぞ此儘御歸り下さいませ」

と膠も杓子もなく、榎で鼻を擦つたやうな挨拶振り、稍面を膨らし、目を凝視め

て不機嫌顔、若彦は合點行かず、暫し答ふる言葉も知らなかつたが、思ひ切つたやうに、

「玉能姫は貴方の宅に御世話になつて居りませぬか」

「それを訊ねて何となさる。三五教の宣傳使たるものは、一切を神様に任せ、總ての執着を去り、師匠を杖につかず、人を相手とせず、親子女房血類を力にすなとの教ではござらぬか。何を血迷うて鷹鳥山の靈場に玉能姫を伴れ込み、穢らしくも此の空助の宅に玉能姫は居ないかなぞと以ての外の御心得違ひ、左様な腐つた魂の宣傳使には今日限り絶縁致します。此の鬨、一歩でも跨げるなら、サア、跨げて見なさい」

奥には玉能姫の咳拂ひ、若彦の耳には殊更刺激を與へた。玉能姫は空助に救はれ、此處に病氣の身を横へながら、若彦との問答を心痛めて聞いて居る。飛び立つばかり會ひたさ見たさに、玉能姫は心は矢竹に焦れども、人目の關や、抜きさしならぬ空助の堅き言葉に遮られ、何と返答もないじやくり、夜具に食ひつきハラハラと涙を袂に拭ひつつあつた。

空助は二人の心を察し得ない程の木石漢にはあらねども、二人を思ふ慈悲心の波にせかれて涙を隠し、態と嘯鳴聲、

「ヤイ、黄昏のこととて顔は慥かに分らねど、其の聲は若彦によく似たり。恐らくは若彦に間違ひなからうかも知れぬ。併し乍ら三五教には不惜身命的宣傳使の數多綺羅星の如く、心の玉を輝かし神の教の道を猛進し、世人を導く身分として女房に心を奪はれ、教の館を捨てて遙々訪ね來る如き腰拔けは一人も御座らぬ。

汝は神の名否宣傳使の雅號をサツクとなし、此世を誑かる泥坊の類ならむ。汝の如き偽物、諸方を徘徊致すに依つて、第一三五教の面汚し、獅子身中否志士集團の團體をして腰拔教と天下に誤解せしめ、神の神聖を冒瀆するもの、汝は是より己が住家へ歸り、一意專念身魂を研ぎ、名實相合する神人となつて、然る後宣傳使が希望ならば宣傳使となれ。それが嫌なら只今の儘流浪人となつて人の門戸を叩き、乞食の恥を曝すがよからう。斯く申す空助の心は千萬無量、推量致して名譽泥坊の二人と共に疾く此場を立去れ。又玉能姫とやらの宣傳使は、神界のため夫に暫く離れて素盞鳴大神の御楯となり、華々しき功名を致す迄、夫に面會は致



すまいぞ」

と聲張り上げて夫婦に聞かす空助が情の言葉、若彦は胸に鎧打たる心地、両手を合せ空助の庵を伏し拜み、名残惜しげに振り返り振り返り、二人の男と共に、闇の帳に包まれてしまった。

後に空助は聲を濡らせながら獨言、

「大神のため、世人のためとは云ひながら、生木を裂くやうな空助が仕打ち、若彦必ず恨んで呉れな。それに就ても玉能姫、せめて一目なりと會はして呉れたら良ささうなものだのに、氣強い空助であると嘸恨んで居るであらう。最前初稚姫様の御知らせに依つて鷹鳥山へ救援に向ふ折りしも玉能姫は御伴をしようと云つた。其時無下に叱りつけ初稚姫様を背に負ひ、後に心を残しつつ宣傳歌を歌ひながら鷹鳥姫が館に行つて見れば、神の御告に寸分違はず、悲惨の幕が下りて居た。玉能姫の幽體は又見えつ隠れつ來て居つたやうだ。嗚呼無理もない。併し乍ら今會はせるは易けれど、言依別命様の御内命もあり、且又至仁至愛の大神様の厳しき御示し、何程玉能姫の心情を察すればとて、神さまの仰には背かれず、神の教

と人情の締木にかかつた此の空助の胸の苦しさを。ア、兩人、今の辛き別れは勝  
利の都に達する首途、空助が心の中も些は推量して下され』  
と流石剛毅の空助も情に絡まれ、潜々と落涙に咽んでゐる。奥には初稚姫、玉能  
姫が奏づる一絃琴の音、しとやかに鼓膜をそそる。

（大正一一・五・二七 舊五・一 外山豊二録）

第一六章 千萬無量（七〇八）

玉能姫 水の流れと人の行末 昨日や今日の飛鳥川  
淵瀨と變る世の中に 神の御水火に生れ來て  
夫ともなり妻となり 親子となるも神の世の  
縁の絲に結ばれて 解くる由なき空蝉の

うつつの世ぞと知りながら 輪廻の雲に包まれて

進みかねたる戀の途 暗路に迷ふ淺間しさ

日は照り渡り月は盈ち 或は虧くる世の中に

變らぬものは親と子の 盡きせぬ名殘妹と背の

深き契と白雲の 汝は東へ吾は西へ

南や北と彷徨ひて いつかは廻り近江路や

美濃の尾張さへ定めなく 神の恵を遠江

祈り駿河の富士の山 木花姫の御神に

願ひ掛巻く甲斐ありて 嬉しき逢瀬を三保の濱

浦風ぎ渡る羽衣の 松の響も爽かに

風のまにまに流れ行く 此世を救ふ生神の

貴の御楯と選まれし 神の任しの宣傳使

千變萬化に身を賣し 百の艱難を身に受けて

世人を救ふ真心の 凝り固まりし夫婦仲

鷹鳥山の頂に 黄金の光を放ちつつ

衆生済度の御誓ひ 天国浄土の基礎を

堅磐常磐に固めむと 治まる御代をみるくの世

國治立大神や 豊國姫大御神

神素盞鳴大神の 三つの御靈の神勅

項にうけて世を開く 心の色も若彦の

夫の命は今何處 折角會ひは會ひながら

人目の關に隔てられ 其聲さへも碌々に

聞きも得ざりし玉能姫 果敢なき夢路を辿りつつ

生田の森の吾思ひ 稚姫君の御靈

堅磐常磐に鎮まりて 再び神代を立直し

四方の天地神人を 救はせ給ふ經綸地

守るも嬉しき吾身魂 行末こそは樂しけれ

あゝ吾夫よ若彦よ 妾がひそむ此庵

はるばる たつ  
遙々 訪ね 來ります

きよ たふと  
清き 尊き 御心

あだ かへ  
仇に 歸せし 胸の 裡

うまらに 細さに 酌み 取りて

かなら うつら  
必ず 恨ませ 給ふ まじ

このよ  
此世を 救ふ 生神の

あ 在れます 限り 汝と 吾は

また  
又も や 何時か 相生の

まつ みどり  
松の 緑の 常久に

しも  
霜を 戴く 世ありとも

たがひ むかし  
相互に 昔を 語りつつ

よろ  
歡ぎ 樂しむ 事あらむ

あゝ 惟神々々

みたまさち  
御靈 幸は ひましまして

つま あ  
夫と 在れます 若彦が

ゆくすゑあつ  
行末 厚く 守りませ

われ をんな  
吾は 女の 身なれども

かみ うやま  
神を 敬ひ 天が 下

よも  
四方の 身魂を 慈しむ

きよ  
清き 心は 束の間も

むね はな  
胸に 放さず 天地の

かみ いの  
神に 祈りて 身の 限り

こころ かぎ  
心の 限り 三五の

まことひと  
誠 一つを 筑紫 潟

こころ そこ  
心の 底も 不知 火の

よびと  
世人は 如何に 騒ぐとも

ただ すめかみ  
只 皇神の 御爲に

めをとこころ  
夫婦 心を 協せつつ

身は東西に生き別れ 如何なる艱難の來るとも

神に任せし汝が命 妾も後より大神の

御言のままに白雲の 遠き國をば踏み分けて

神の司の宣傳使 山野を涉り河を越え

海に浮びつ常世國 高砂島の果までも

進みて行かむ惟神 御靈幸はひましませよ

と一絃琴に連れて歌の聲諸共に、幽邃に庵の外に響き渡りつつあつた。

空助は慨歎稍久しうして、力なげに二女が琴を弾ずる其場に現はれ、

「初稚姫様、大變に音色が良くなりましたよ。玉能姫様、貴女の音色も餘程宜敷

否、稍悲調を帯びて居る様です。何かお心に懸つた事はありませぬか、心の色は

直ぐに言靈の上に現はれるものですかから」

玉能姫「ハイ、餘り神様の思召が有難くて身に沁み渡り、又他人様のお情が胸に

應へまして、感謝の涙に咽んで居ました」

「世の中は喜があれば悲がある、悲の後には屹度喜ばしい花が咲くものです。櫻の花は此通り夜の嵐に無残に散りましたが、梢に眺めた花よりも斯う一面庭の面に散り敷く美しさは又一人ですな。人間は何事も神様の御心に任すより外に途はありませぬ。如何なる艱難辛苦に遭遇すると悔むものでは決してありませぬ。私も一人の妻に死別れ、一度は悲しき鰥鳥の幼兒を抱へて浮世の無常を感じました。が「イヤ待て暫時、斯くなり行くも人間業ではない、何か深き思召のある事であらう。死別れた女房は不愍な様だが、大慈大悲の神様は屹度今より以上、結構な處へお助け下さるであらう。あゝ私が悔めば可愛い女房が神の御國へも能う行かず輪廻に迷ひ苦み悶えるであらう。忘れるが何よりだ」と一念發起した上は却て獨身の方が結句氣樂で宜しい。斯んな事を言ふと「お前さまは無情な夫だ」と心の底で蔑みも笑ひもなさらうが、さてさて何程悔んで見た所で仕方がない。お前さまも人間の身を以て此世に生れ、況して尊き宣傳使に使はれた以上は、世間の凡夫とは事變り、樂しみも一層深い代りに苦しみも亦一層深いでせう。其苦しみが神様の恵の鞭だ。何事があつても決して心配はなされませんなや」

と口には元氣に言へど、何となく玉能姫が心も推量り、同情の涙の色が聲に現はれて居た。

玉能姫「何から何まで、御親切に有難う御座います。吾々夫婦の者を立派な神様にしたててやらうと思召し下さいまして、重ね重ねの御心遣ひ、神様の様に存じます」

と琴の手をやめて、両手を膝に置き、俯向きて涙を隠す愛憐しさ。初稚姫は愛らしき唇を開き、

「神が表に現はれて 善と悪とを立別ける

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も人の世は 尊き神の御前に

魂の限りを捧げつつ 誠一つの言葉を

朝な夕なに怠らず 讚へまつれよ惟神

御靈幸はひましまして 天が下なる悉は



餘あまさず殘のこさず皇神すめがみの  
 心こころのままに幸さちはひて  
 安やすきに救すくひ給たまふべし  
 神かみは吾等われらと俱ともにあり  
 神かみは吾等われらと俱ともにあり  
 神かみの御水みい火きを杖つゑとなし  
 誠まことの道みちを力ちからとし  
 荒浪あらなみ猛たける海原うなばらも  
 何なんの艱なやみもあら尊たふと  
 虎伏とらふす野邊のべも蠢すくすく々と  
 勝利しょうりの都みやこへ達たつすべし  
 賞ほめよ讚たたへよ神かみの恩おん  
 盡つくせよ竭つくせ神かみの道みち  
 盡つくせよ竭つくせ人ひとの道みち  
 人ひとは神かみの子神こかみの宮みや  
 人ひとは神かみの子神こかみの宮みや

と歌うたひ終をはつて又またもや一いち絃琴げんきんを手てにし、心地こちよ好よげに微笑びせうを浮うかべて居ゐる。

俄にはかに窓まどの外そと騒さわがしく十數じふすう人にんの足音あしおと、バタバタと聞きえて來きた。折柄をりからのぼ昇のぼる月影つきかげに顔かほ  
 は確しかと分わからねど人影ひとかげの蠢うごめく姿すがた、手てにとる如ごとく三人さんにんの目めに入いつた。見みれば大喧譁おほげんくわ  
 である。一人ひとりの男をとこを引縛ひつくくり、空助もくすけが庵いほりの窓前まどさきに運はこび來きたり、寄よつて集たかつて拳骨げんこつの雨あめ  
 を降ふらして居ゐる。

甲「ヤイ、往生いたしたか、吾々バラモン教の信徒を悪神扱ひしやがつて、鷹鳥山に巢を構へ、貴様の女房の玉能姫に魔術を使はせ此方を清泉の眞中へ放り込み、身體に澤山の手疵を負はせやがつた、其返報がへしだ。サア、もう斯うなつては此方のもの、息の根を止めて十萬億土の旅立さしてやらう。こりや若彦、能う「のめ」のめと生田の森まで彷徨うて來よつたなア」

と又もや鐵拳の雨を所構はず降らして居る。

現在眼の前に夫が打擲されて居る實況を見たる玉能姫の心は張り裂ける如く、假令天地の法則を破るとも、飛びかかつて悪者に一太刀なりと酬いたきは山々なれど、泰然自若たる空助に心惹かれ、苦しき胸を抱き平氣を装うて居る。

空助「玉能姫さま、何と面白い事が出來ましたな。坐ながらにして窓の内から活劇を見せて貰ひました。これも有難き思召でせう。サア早く神様に感謝の祝詞を奏上なさいませ。私はゆつくりと此活劇を見物致しませう。神様が如何しても使はねばならぬ必要の人物と思召したならば、假令百萬の敵が攻め來るとも、如何に鐵拳の雨を蒙るとも、鵜の毛で突いた程の怪我も致しますまい。何處の人かは

知らねども、貴女の夫の名によく似た若彦と言ふ男らしう御座います。さてもさ  
 ても腑甲斐ない男もあつたものだなア。アハ、、、

と作り笑ひに紛らす。玉能姫は心も心ならず、轟く胸を抑へながら靜に天津祝詞  
 を奏上し始めた。何となく聲は震うて居た。地上に投げられ數多の悪者に苛責ま  
 れ居た若彦の身體より、忽ち五色の靈光發射し、ドンと一聲、不思議の物音に空  
 助、玉能姫は窗外を眺むれば、人影は何處へ消えしか跡形もなく、窓近く一つの

白狐ノソリノソリと太き尾を下げて森の彼方に進み行く。

空助「アハ、、、神様は何處迄も吾々の氣をお惹き遊ばすワイ」

玉能姫は両手を合せ、

「惟神靈幸倍坐世」

初稚姫「皇大神守り給へ幸へ給へ」

(大正一一・五・二七 舊五・一 北村隆光録)

第五篇 神界經綸

第一七章 生田の森〔七〇九〕

三千世界の梅の花 薰りゆかしく實を結び  
四方の春野を飾りたる 櫻も散りてむらむらと  
咲き亂れたる卯の花の 白きを神の心にて  
生田の森の片ほとり 花を欺く玉能姫  
初稚姫の二人連 初夏の景色を眺めつつ  
再度山の山頂に 神の御告を蒙りて  
登り行くこそ床しけれ。

空助は唯一人神前に祝詞を奏上する折しも、門戸を叩き、

「頼まう 頼まう」

と訪るる一人の宣傳使があつた。空助は神前の禮拜を終り、門の戸を開き、

「ヤア、其方は國依別の宣傳使、何用あつて空助が館を御訪ねなさつたか」

國依別はツと門の敷居を跨げ、空助と共に座敷に通じ、煙草盆を前に置きなが

ら二人向ひ合せ、

「今日参つたのは餘の儀では御座らぬ。あなたは折角三五教に入りながら此頃の

御様子怪しからぬ事を承はる。事の實否を探らむ爲、國依別宣傳の途中、紀の國

より取る物も取り敢へず引返し、ここに参りました。あなたは太元教とかを立て

て居られるさうだ。神様に對し御無禮では御座いませぬか」

空助大口を開けて高笑ひ、

「何事ならむかと思へば、左様な御尋ねで御座るか。空助が折角の信仰を翻し、

太元教を新に開いたのは餘の儀では御座らぬ。其理由と致す所は、此空助三五教

の信者を標榜し居ると、腰拔の宣傳使や信者が、言依別様の御命令だとか何だと

か言つて、旅費を貸せとか、履物を出せとか、いろいろ雑多の厄介をかけ、小便や糞をひりかけ後は知らぬ顔の半兵衛さん。それも一人二人なれば辛抱致すが、絡繹として蟻の甘みに集ふが如く、イナもう煩雑くて堪り申さぬ。空助の家でさへも此通りだから、其他の信徒の迷惑は思ひやられる。それ故心の内にて三五教を信ずれども、表面は太元教と、見らるる如く大看板を掲げたので御座る。國依別殿、其方も其亞流では御座らぬか」

「そんな奴は三五教には一人もない筈です。大方バラモン教の奴が、三五教の假面を被つて居るのでせう」

「バラモン教もチヨコチヨコやつて来る。併し乍ら教の建て方が違ふものだから、先方も遠慮を致して居ると見えて、唯空助が忙しきタイムを奪つて歸る位なものだ。金銭物品まで借用しようとは申さぬ。宣傳使たる者は未だ教の及ばざる地方又は人に對してこそ宣傳の必要あれ、一旦入信したる者の宅に何時となく訪問致し、厄介を掛け、安を求むる如きは、宣傳使の薄志弱行を自ら表白するものだ。そなたも空助館に訪問する時間があらば、なぜ其光陰を善用して、未信者の宅を

訪問なさらぬか。半時の間も粗末に空費する事は、宣傳使として慎むべき事である。サア一時も早く歸つて下され。お茶を進ぜたいが、茶を飲ませては、信者のわれわれたちも貧乏神に襲はれねばならない。假令番茶の一杯でも小判の端だ。それを進ぜた所で……何だ空助は、折角訪問してやつたのに番茶を飲まして追ひ返した……と云はれては一向算盤が合ひ申さぬ。愚圖々々して御座ると、第一タイムの損害、疊が汚れる。さすれば又もや表替をそれ丈早く致さねばならぬ道理だ。最早空助は三五教に食はれ、飲まれ、借り倒され、逆様になつても血も出ない様な貧乏になつて了つた。斯んな貧乏神の館へ出て来るよりも、巨萬の富を積みながら、此世の行末を案じ、吾身の無常を託ちつつある憐れな精神上の極貧者は、世界に幾らあるか分らない。物質に富み、無形の寶に飢ゑたる人を求めて神の教を説き諭し、錆びず朽ちず、火に焼けず、水に流れぬ尊き寶を與へて、物質上の寶を自由自在に氣樂に使用したが宜からう。精神上的の寶に充たされ、物質上の寶に缺乏を告げたる此空助の館に、宣傳使の必要は少しも御座らぬ」

「あなたは此春頃から心機一轉、餘程吝臭くなられましたなア」

「何だかお前さまの聲を聞くと直に、此通り吝臭くなつたのだ。心貧しき力弱き其方の守護神が、空助の體內に飛び込んで、斯様な事を吐き出して居るのだ。此空助は何にも知らぬ、早く國依別さま、心の貧乏神、柔弱神を追ひ出して、連れて歸つて下さい。空助眞に迷惑千萬で御座る。アハ、ハ、ハ、ハ、」

と腹を抱へ、體を大きく揺つて、ゴロンと笑ひ轉けて了つた。

國依別「さうして初稚姫様、玉能姫様はどこへお出でになりましたか」

空助仰向になつた儘、足をニューと天井の方に直立させ、

「初稚姫、玉能姫は「國」とか云ふ貧乏神がやつて来るから、憑依されてはならないと云つて一時許り前に逃げ出しました。折角結構な神様が空助の館にお鎮まり遊ばすのに、腰抜神の貧乏神がやつて来るものだから、肝腎の玉能姫……オツトドツコイ魂までが脱け出して了つた。オイ魂抜けの國依別、どうぞ早く歸つて呉れ。此空助もそなたの靈が憑つて、此通り四つ足になつて了つた。其四つ足もまだ俯向いて居れば歩く事も出来るが、この通り腹と背中を換へて了つては、何程藻掻いて見ても空を掻くばかり、疊に平張付いて動きが取れない。ア、國依別、



たまたま訪ねて来て、四つ足のお土産は眞平御免だ。三五教の宣傳使がやつて来ると、手足を藻掻いても、如何しても、動きの取れないことになつて了ふ。馬に灸で貧窮だ。狐に灸で困窮だ。其方は牛に灸で何ぞモウギウな事がないかと思つて来たのであらうが、最早灸も茲まで据ゑられては、艾もあるまい。モグサモグサ致さずトツトと歸つたがよからう」

「空助さま、火の付いた様な火急なお言葉、あなたは空助さまではなくて、ヤイトをすゑる艾助さまになつて了ひましたなア。これはこれは眞にアツイ御志……否御教訓、どつさり此四つ足の守護神もヤイトを据ゑられました。それなら四つ足は唯今限り歸ります。あなたもどうぞ元の空阿彌……オツトドツコイ空助さまに歸つて下さい」

「ハイ有難う。それなら改めて國依別の宣傳使様、三五教の空助改めて對面仕らう、今迄は四つ足同志の掛合で御座つた。アツハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

と笑ひながら起き直り、庭の泉に手を洗ひ、口を漱ぎ、禮装を着し、

「サア、國依別様、神前に拜禮致しませう」

と促しながら、拍手再拜、天津祝詞を奏上し始めた。國依別も空助の背後に端坐し、恭しく祝詞を奏上し終った。

空助「國依別様、あなたは是れから何處へお出でになる心組ですか」

國依別「ハイ私の今迄の教は、實を申せば貴方の御宅に参り、一つお尋ねをせななくてはならない事があつたものですから、ワザワザやつて來たのですが、モウ申しますまい。これで貴方の深き御精神も了解致しましたから……」

「アツハ、若彦一件でお出になつたのですな。若彦は今紀州に居りますか」

「ハイ、紀州の熊野の瀧で大變に荒行を致して居る事を聞きました。それで私は熊野の瀧へ参つた所、若彦は唯一言も申さず、無言の行を致して居る。手眞似で尋ねても文字を地に書いて糺して見ても、何の答も致さず、石佛同様、取り付く島もなく、鷹鳥山に於て何か感じた事があるのだらう、其峰續きに御住ひ遊ばす貴方にお尋ねすれば、様子は分らうかと存じまして参りました。併し唯一言……空助さま有難う……と若彦の言つた言葉幽に聞えたので、何もかも様子を御存じだらう。あの喧しやの若彦が、あの通り神妙になつて了つたのは、貴方の感化

に依よるのだと信しんじます。過くわ去こを繰くり返かへすは御ご神しん慮りよに反はんするでせうが、御お差さ支しなくば少すこしなりと御お漏もらし下くださらば安あん心しん致いたします」

「若わか彦ひこは鷹たか鳥とり山やまに立たて籠こもり、惡あく魔まに憑ひ依ようされ、四よつ足あしとなつて門かど口ぐちまで參まりました。私わたくしは「モウ一つ修しう業げふをして來こい、四よつ足あしに用ようはない……」と云いつて、杓しゃくに水みづを汲くんで犬いぬの樣やうにぶつかけてやつたら、尾をを掉ふつて驅かけ出だしたきりですよ。ヤツパり若わか彦ひこは人にん間げんらしう立たつて歩あるいて居ゐましたかなア。イヤもう四よつ足あしの容いれ物ものばかりで困こまつて了しまひますワイ。アツハ、、、、、」

「さうすると私わたくしもチヨボチヨボですな」

「チヨボチヨボなら結けつ構こうだが、愚ぐ圖づ々づすると、コンマ以下いかのチヨボチヨボに落おちて了しまふから、氣きを付つけねばなりませんまい。お前まへさまも折せつ角かく今いま、宣せん傳でん使しに始はじめてなつたのだから、どうぞチヨボチヨボにならぬ樣やうに願ねがひますよ。貴あなた方がさうなると、私わたくしまでも感かん染せんしては、最さい前ぜんのやうに二に進ちんも三さん進ちんも行ゆかぬ苦く境やうに陥おちり、キウ窮きう言いはねばなりませんせぬからな、アツハ、、、、」

「アツハ、、、、」

と笑ひ合ふ。門口へ又もや婆の聲、

「生田の森の空助さまのお宅は此處で御座いますか。チヨツト開けて下され。」

空助「國さま、又もやチヨボチヨボがやつて來たやうです。お前さま一つ私に代

つて應對をして下さい。私は奥へ行つて少しく神さまに承はらねばならぬ事が御

座いますから。」

と云ひ棄て、慌しく姿を隠した。國依別はツと立ち、門口の戸をガラリと引開け、

「此處は太元教の御本山だ。何處の四つ足か知らぬが、トツトと歸つて呉れ。」

「何ツ、空助が太元教を樹てたとは、噂に聞いたが、ヤハリ事實だなア。なぜ左

様な二心をお出しなさるか。」

國依別は黄昏を幸ひ、ワザと空助の聲色を使つて居る。

「わしは鷹鳥姫だが、お前さまに一つ御禮を申さねばならぬ事もあり、御意見を

せなくてはならぬ事があるからお訪ねしたのだ。」

「何とか彼とか口實を設けて、三五教の宣傳使や信者が、金を貸せの、履物を貸

せ、飯を食はせ、茶を飲ませ、小遣錢を渡せと、まるで雲助の様な事を吐し、小

便、糞を垂れながして歸る奴ばかりだから、此空助も愛想をつかし、心は三五教でも表は太元教と標榜して居るのだ。最早神の恵に浴し、神徳充實した空助には意見は御無用だ。掛り合つて居れば大切なタイムまでも盗まれて了ふ。番茶一杯飲まれてもそれ丈缺損がゆく。身代限り、家資分散の憂目に遭はねばならぬから、一足なりとも這入つて呉れな。お前に禮を言はれる道理はない。トツトと早く歸つたが宜からう」

「何と云つても、そんな事を聞く以上は、ますます動く事は出来ぬ。コレ空助さま、心機一轉もあまりぢやないか」

「オイ、其心機一轉だ。暫くの間現はれて消える屋氣樓、名あつて實なき鷹鳥姫の宣傳使、それなら這入る丈は許してやらう。其代り番茶一杯飲ます事もせぬ。何程無料で湧いた水でも、飲ましちやそれ丈減るのだから、其覺悟で這入つたが宜からう」

「大變貴方は各坊になつたものだなア。執着心の大變に甚い方だ。御免なさい」と蓑笠を脱ぎ棄て、ツカツカと座敷にあがる。國依別は又もや煙草盆を前に据ゑ、

空助氣取りになつて坐り込んだ。

鷹鳥姫「コレ空助さま、お前さまは俄に小さい事を仰有ると思へば、體まで小さ

くなつたぢやないか」

國依別はゴロンと仰向けになり、尻を鷹鳥姫の方向に向け、手足を又ツと天井の

方に伸ばして見せ、

「金剛不壞の如意寶珠の玉や紫の玉が喉から出て了つたものだから、此通り瘡せ

て人間が小さくなり、元の空助ではなうて空阿彌。神徳も何もなくなつて了ひ、

鷹鳥山で已むを得ず若彦、玉能姫を召し連れ、バラモン教の蜈蚣姫が「てつきり」

隠して居るのに相違ないから、何とかして取返さねば聖地の役員信徒に對し合は

す顔がないと、執着心に驅られ言依別の教主の篤き心を無にして行つて居つた所、

俄に山の頂に黄金の像現はれ、身の丈五丈六尺七寸、「てつきり」彌勒様の御出

現、鷹鳥姫の信心の力に依りて愈五六七神政の太柱を握つた。誠の靈地は四尾山

麓ではない、鷹鳥山にきはまつたりと、鼻の鷹鳥姫が得意顔に雀躍りしながら、

チヨツと薄氣味悪さうに近付き見れば、黄金像は高姫の素首をグツと鷲掴み、猫

でも放る様にプリンプリんと、鷹鳥山の教の庭にドスンと落下し、人事不省となり、ピリピリピリと蛙をぶつつけた様になつて了ひ、其處へ此空助がやつて往つて、生命丈は助けてやつた。其爲に此空助は……コレ此通り足が上を向き背中が下を向いて、サツパリ自由の利かぬ四つ足になつて了つたのだ。併し乍ら此空助は信神堅固の勇士……斯んな事になる筈はない。鷹鳥姫の副守護神が憑依したのだから、どうぞ早う、こんな……土産はスツ込めて下さい。なア鷹鳥姫さま、お前も却々執着心が酷いと見える。同じ四つ足でも下向いて歩けるものならまだしもだが、斯うなつては天地顛倒、背中に腹を換へられて、どうして此世が渡られうか。……アツハ、ハ、ハ、……。オイ笑ふ所か、高姫の守護神此國……オツトドツコイ神の國に出て来て、神の教を建てるなんて、あんまり精神が顛倒して居るではないか。元の空阿彌の空助の眞心に立返り、早く副守護神を連れて歸つて呉れ。空助誠に迷惑だ。國、クニ、【苦に】なつて仕方がない。【依】りにヨツて、【別】のわからぬ副守護神を連れて来るものだから、玉能姫さまも初稚姫さまも、チヤンと御存じ、どつかへ蒙塵遊ばしたぞ。空助の本守護神も愛想を盡かして隠

れて了つたぞ。ウンウンウン」

「コレコレ空助さま、お前さまは何とした情ない事になつたのだい。結構な三五教を見限つて太元教なんて、そんな謀叛を起すものだから、天罰で四つ足になつて了ひ、肩身が狭う小さくなつたのだよ。それだから油断は大敵、改心なされと云ふのだ。何程大持てにモテる積りでも、大モテン教だ。早く改心なされ、神様は人間が子を思ふと同じ事、片輪の子や悪人程可愛がらつしやるのだから、わしも斯んな悲惨な態を見て、此儘歸る譯にも行かぬ。サアこれから鎮魂をして誠の教を聞かしてあげよう。エーエー困つた事が出来た。此高姫の守護神が憑つたのだなどと、よう言へたものだ。悪神と云ふ者は、どこどこまでも抜目のない奴だ。到頭守護神の悪の性來を現はしよつたか。アア空助さまの肉體が可哀相だ。オイ四つ足、空助さまの肉體を残してトツトと魔谷ヶ嶽へ歸つてお呉れ。愚圖々々吐すと、日の出神の生宮が承知を致さぬぞや」

「此空助は最早お前さまの副守になつて了つた。お前さまは何時も口からものを言はず、ものを尻で聞いたり人の言葉尻を取り、尻でもの言ふから、屁理屈ばつ



かりだ。鼻持ならぬ匂がする。何程三五教でも尻の締りがなければヤツパリ穴有  
り教ぢや。終局には氣張り糞を放つて、此通り四つ足に還元して了ふ。早く空助  
の肉體から退かぬかいなア。空助は大變な御迷惑様だ。アツハ、ハ、ハ、ハ、  
と自ら可笑しさを耐へ、忍び笑ひに笑ひ、體中に波を打たせて居る。  
「なんだ。低い所から聲が出ると思へば、暗がりに分らなかつたが、お前さま失  
禮な寢て話をすると思ふ事があるものか、チト失敬ぢやないか」  
「靈界物語でさへも、寢て足を上げたり、下したりして言ふぢやないか。お前さ  
ま位な四つ足に話すのは寢とつて結構だよ」  
「到頭變性女子の四つ足の守護神が現はれましたなア。早く改心をなさらぬと、  
頭を下にし足を上にして、ノタクラねばならぬ事が出来致すぞよと、大神様のお  
筆にチャンと誠めてあります。鼻を撮まれても分らぬ程身魂が曇つて居るものだ  
から、お前さまは天と地と間違へて居るのではなからうか。どうやら足が天井の  
方を向いて居るぢやないか」

國依別は、

「ア—ア、悪性な守護神を連れて来て私に憑すものだから、段々足が上へあがり頭が下になつて了ひ、手で歩かねばならぬ様になつて来たぞよ」

と云ひながら逆立になり、兩の手で座敷を歩いて見せた。七手許り歩いた途端に、體の中心を失つて、高姫の頭の上へドスンと倒れた。

「コレコレ空助さま、妾にはそんな守護神は居りませぬぞえ。日の出神様に、何時までもそんな巫山戯た態をなさると承知なさらぬぞ。あゝモウ駄目だな。初稚姫さまも玉能姫さまも逃げて行かつしやる筈だワイ。わしも鷹鳥山を斷念し、此處迄来るは来たものの、こんな悲惨な幕を目撃しては、歸りもならず、居る事も出来ず、困つた事だ。ドレこれから神様に御願して助けてやつて貰はう。仕方がない」

國依別は、

「不言實行だよ。高姫さま」

とからかふ所へ、手燭を左の手に持ち、ノソリノソリとやつて来た眞正の空助、  
「ヤアお前は鷹鳥姫に能く似た化物だなア。此處にも一人、お前の分靈が倒れて

居る。ヤアもう此頃は澤山の狐が人間の皮を被つて、空助を誤魔化しに出て来るので油断も隙もあつたものでない」

「ヤアお前さまは本當の空助さま。どうして御座つた」

「何うしても御座らぬ。最前から闇に紛れて、四つ足同志の珍妙な藝當を拜見致して居つたのだ。何でもタカとか鳶とか、クモとか國とか云ふ怪體な代物が、断りもなく空助の身魂や住家を蹂躪し、エライ曲藝を演じて居つた。まるで此化物は鷹鳥山の鷹鳥姫に似た様な脱線振りを、遺憾なく發揮しよるワイ。アツ

ハ、ハ、ハ、ハ、」

國依別は、

「ワツハ、ハ、ハ、オツホ、ハ、ハ、」

と笑ひながらムツクと起き、ワザとカンテラの前に顔を突き出し、鷹鳥姫に俺の首實驗せよと言はぬ許りにさらけ出した。

「何ぢや。お前は國依別の理屈言ひの宣傳使ぢやないか。みつともない、四つ足の眞似をしたり………チツト慎みなさい。モシモシ空助さま、これでも分りませ

うがなア。サツパリ正體しやつたいが現あらはれて、御覽ごらんの通り本當ほんたうに悲惨みじめなもので御座ございますワイ。こんな精神病者せいしんびやうしやを、お前まへさまもお預りあづかなさつて、大抵たいていのこつちや御座ございますまい」

空助もくすけ「今の今迄いままでなん何ともなかつたのですが、お前まへさまが持つて來たき……否いやお前まへさまの執着しふちやくとか名のついた副守護神ふくしゆごじんが憑うつつたのですよ。ア、どうやら、私も變へんになつて來た。體中からだぢうにウザウザと毛けが生はえる様な氣分きぶんが致いたしますワイ」

國依別くによりわけ「空助もくすけさま、國くにもどうやら茶色ちやいろの毛けが生はえ出して來ました。風邪かぜを引ひいたのか、俄にはかに腹はらの中でコンコンと咳せきをして居ゐます。今晚こんばんと云いふ今晚こんばんは實じつに不思議ふしぎな宵よひですな」

「なんとお前まへさま達は、これ程ほど神界しんかいが御多忙ごたばうなのに、氣樂きらくな洒落しやれをなさつて日ひを送りおくなさるのは、チツト了簡りやうけんが違ちがやしませぬか。利己主義われよしの守護神しゆごじんが極端きよくたんに發動はつどうして居をりますなア、妾わたしの守護神しゆごじんが憑依ひよういしたなんて、ヘンよう仰有おつしやりますすワイ。これから日ひの出神でのかみ様が御神力ごしんりきを現あらはして見みせませうか。そこらが眩まばゆうて目めもあけて居をられぬ様やうになりますぜ」

空助は笑ひながら、

「何を言つても、私は折角呑み込んだ二つの玉を、空助の娘のお初に叩き出されて了つたものだから、サツパリ腰は抜け、鷹鳥山もサツパリ駄目になり、これから何處へ迂路ついで行かうか。若彦は姿を隠すなり、せめて空助さま宅へでも往つて……此間はエライ御世話になりました……と御禮をきつかけに、何とかよい智慧を借りたいものぢやと、ノコノコやつて来て見れば空助さまは御座らつしやらず、理屈言ひの捏廻し上手の國依別が人を嘲弄しやがる。エー此上は如何したら宜からうかなア。アンアン……斯う云ふ聲は空助の言葉では御座らぬ。鷹鳥姫の薄志弱行と名の付いた守護神が、私にこんな事を囁かすのだ。早く此守護神を放り出し、自分も此館を放り出て、どこかへお道の爲に行つて貰ひたいものだ。空助も大變に迷惑だ。アツハ、ハ、ハ」

高姫は暫く腕を組み、首を頻りに振り、思案に沈む。國依別は、

「あの高姫さまの心配さうな顔、どうしたら元の通りになるだらう。……オウ分つた、あの玉の在處を知らしてやりさへすれば、元の日の出神の生宮で威張れ

るだらう、さうすりやキツト全快するに定つて居る。ヤツパリ言ふまいかなア。  
又呑まれ、今迄の様に噪がれると困る、當る可からざる萬丈の氣焰を吐かれると、  
側へも寄りつけないやうになるから……」

「何、寶珠の行方を、お前知つて居るのかい」

「知つて居らいいかい、國さまだもの」

「そんならお前が妾を困らさうと思つて隠したのだなア。油斷のならぬ男だ。サ

ア空助さま、蛙は口からわれと吾手に白状しました。締木に懸けても言はしめて、

玉の在處を探して見ませうかい」

空助「サア如何だかなア。大方蒟蒻玉か何ぞと間違つて居るのだらう。それが違

うたら瓢六玉か、狸の鞆玉位なものだ。アツハ、ハ、ハ、」

國依別「ナア二空助さま、本當に玉の在處を發見したのですよ。これから私がコ

ツソリと其玉を拾ひあげ、高姫さまぢやないが、腹へ呑み込んで、一つ大日の出

神となる心算だ……オツト失敗つた。高姫さまの居る所で言ふぢやなかつたに

………秘密が暴露したワイ、アハ、ハ、ハ、」

「神政成就の御寶、一日も早く現はして御用に立てねばなりませんまい。三五教は日に日に衰へて行くぢやありませんか」

「ヤツパリ國の夢やつたかいな……イヤイヤ夢ではない、現實だ。併し高姫さまの前では夢にしとかうかい。鷹鳥姫が忽ち玉取姫に早變りすると、折角發見した私の功績が無になる。言依別の神様に御褒めの言葉を戴き、それから三五教の總務になつて、日の出神の生宮を腮で使ふと云ふ段取だ。高姫さま、お氣の毒ながら時世時節と諦めて下さい。あゝこんな愉快な事があらうか」

「本當にあるのなら、二つの玉を、一つお前に上げるから、一つは妾に手柄を譲つて下さい。別に呑み込んで了ふのぢやないから……」

「何でも呑み込みのよいお前さまだから劍呑なものだ。それなら一つ相談をしよう。紫の玉はお前さまが預るとして、私は金剛不壞の如意寶珠を預かる事にしよう。それさへ決定れば、何時でも知らしてあげる」

「そりやチツト蟲がよすぎる。金剛不壞の如意寶珠は、永らく妾の腹の中に鎮座しました寶玉だ。謂はば妾の生御魂も同然だ。お前さまは紫の玉で辛抱しなさ

い  
□

滅相な、鷹鳥姫がアルプス教の御本尊として居た位な紫の玉は、如意寶珠に比

べては餘程劣つて居る。身魂相應だから、お前さまが紫の玉だ。私は何と云つて

も如意寶珠を取るのだから、さう覺悟しなさい□

□エー譯の分からぬ男だなア。モウスうなる以上は何と云つても承知せぬ。奴盜

人奴が、サア引摺つて往つてでも在處を白状させる□

□世界見え透く日の出神さまの生宮が、私の様な人間を連れて行かねば、玉の在

處が知れぬとは、實に氣の毒なものだなア□

□妾の惡口を言ふのなら辛抱もするが、畏れ多い、日の出神様の惡口まで言ひよ

つたなア、サアもう了簡ならぬ□

□といきなり胸倉をグツと取つて締めつける。國依別は、

□何ツ、猪口才な高姫の奴□

と又胸倉を取り、兩方から睨み合つて、眞赤な顔を膨らして居る。空助は、

□コレ高姫さま、國依別さま、お鎮まりなさい。同じ三五教の寶、誰が手に入れ



ても同じ事ぢやないか」

高姫「イエ、斯んな奴に如意寶珠の玉を弄らさうものなら、それこそ穢れて了ひます。如何しても斯うしても、一步譲つて紫の玉だけは發見した褒美としてなぶらしてやるが、假令天が地になり地が天となつても、如意寶珠ばかりは、こんな奴に持たして堪らうか……」

國依別「ナアニ發見主は俺だ。先取權があるのだから、グツグツ云ふと、二つながら俺が預るのだ」

「何ツ、玉盜人の分際として廣言を吐くか」

と高姫は組んづ組まれつ、座敷中をのたうち廻り、終局には金切聲を張上げて、汗みどろになつて大活動を始め居る。空助は、

「コラコラ國依別さま、お前、本當に其玉の在處を知つて居るのか」

「ナアニ發見したら……と云ふ話です。夢にでも見たら俺が見つけたのぢやから、如意寶珠の玉を俺が預ると云つたばかりです。まだ皆目在處は分らぬのです、アツハ、ハ、ハ、ハ、あまり一生懸命で嘘が眞實になつて了つた。アツハ、ハ、ハ、ハ」

「何ッ、お前嘘を云つたのか。なアんの事だいな。あーア、要らぬ苦勞をやらされて了つた。そこらが茨搔だらけだがな」  
空助「アツハ、ハ、ハ、又執着と云ふ魔が憑いて、面白い演藝を無料觀覽させて呉れたものだな、アツハ、ハ、ハ、ハ、と腹を抱へて笑ふ。」

(大正一一・五・二八 舊五・二 松村眞澄録)

## 第一八章 布引の瀧(七一〇)

初稚姫、玉能姫は靈夢に感じ、空助の庵を立ち出で、青葉も薰る初夏の山路を再度山の山頂目蒐けて登り行く。淙々たる瀧の音が閒近く聞えて來た。  
玉能姫「初稚姫様、あの音は布引の瀧に近くなつたのでせう。一つ御襖をしてお夢にお示しの山頂に参り、言依別の教主より玉を預かつて歸りませうか」

初稚姫はつわかひめ「小さな聲こゑで仰有おつしやつて下さい。此邊このへんは曲神まがかみの惡靈あくれいが充満じゅうまんして居をりますから、神界しんかいの祕密ひみつを探さぐり、又またもや妨害ばうがいを加くはへられては大變たいへんですから」

「ア、さうでしたね。兔とも角瀧かくたきの音おとを目當めあてに、霧きりを分わけて参まゐりませう」  
と夕霧籠ゆふきりこむる谷間たにあひを、玉能姫たまのひめは初稚姫はつわかひめの手てを取りと、勞いたはりつつ谷深たにふかく進すすみ入いる。

見上みあぐる許ばかりの瀑布ばくふの傍かたはら、飛とび散ちる狹霧さぎりの玉たまは雨あめの如ごとく降ふりしきり、周圍あたりの樹じゆ木もくは何いづれも誕生たんじやうの釋迦しやかのやうになつて居ゐる。二人ふたりは佇たたずみ、瀧たきの雄大ゆうだいさを褒ほめて居ゐる。霧きり押し分わけて現あらはれ出いでたる十數人じふすうにんの荒男あらをとこ、

甲かひ「オイ、カナンボール、此間このあひだは山櫻やまびくらの盛りさかりの時ときだつたがなア、鷹鳥山たかとりやまの清泉きよいづみまで往いつた時とき、出でて來きよつたお化ばけの女をんな、玉能姫たまのひめが現あらはれたぞ。其時そのときには同おなじ姿すがたが三人さん人にん連れとなり俺達おれたちを偉えらい目めに遇あはしよつたが、今度こんどは手てを替かへて二人ふたりとなり、一人ひとはあんな「チツポケ」な小娘こむすめに化ばけて出でよつた。さアこれから一方口いっぽうぐちの此谷間このたにあひ、逃にげようと云いつたつて逃にげられない屈強くつきやうの場所ばしよ、一つ彼奴あいつを取とつかまへて魔谷まやヶ嶽たけに連つれ歸かへり、蜈蚣むかで姫ひめさまの御褒美ごほうびに預あづからうぢやないか」  
スマート「貴様きさまの云いふ事は實じつに名案めいあんだ。愚圖ぐづ々々ぐづして居ゐると、又またもや三五教あななひけうの奴やつ

が出て来ては大變だ。善は急げだ。早く片付けて仕舞はう。何でも此邊に鷹依姫が持つて居た紫の玉が隠してあると云ふ事だから、彼奴を捉へて詮議すれば明白になるであらう。序に三五教の本山ではモウ二つの玉が紛失したと云うて騒いで居るが、大方玉能姫が何々しやがつて、此處に匿して居るに違ひないと云ふ噂だ。さア今度こそ「ぬかつ」てはならないぞ。オイ皆の奴、其邊にすつこんで逃げ道を警戒し、萬一も三五教の奴が出て来よつたら合圖の柴笛を吹くのだぞ」

鐵公「ハイ、承知致しました。皆の奴を監督して違算なきやうに鐵條網となつて、如何なる強敵も、一歩たりとも侵入しないやうに致します。御安心下さい」

と霧に隠れて谷口の樹木の中に姿を隠した。

スマート「オイ、それなる女、汝は鷹鳥山の魔性の女、玉吞姫であらうがな。三つの玉を何處へ呑んだか、否隠したか。キリキリちやつと白状致し、此方に渡せばよし、渡さぬなどと吐すが最後、汝が素首取捉まへて魔谷ヶ嶽の靈場へ連れ歸り、水責め火責めはまだ愚か、劍の責苦に遇はしてでも白状させる。ならう事なら俺達も神に仕ふる身分だ。苦しめたくはない、早く白状致すが汝の得策だらう。

てぐすねひて 手具脛引いて待つて居た。此處へ來たのは汝に取つて最早百年目、因果を定めて返答せい」

玉能姫「エ、誰人かと思へばバラモン教の蜈蚣姫が部下のスマートボールさまにカナンボールの大將さま、私が如何に玉能姫ぢやと云つて、玉を持つて居るとは些と可笑しいぢやありませんか。それは貴方のお考へ違ひでせう」

カナン「考へ違ひもあつたものかい。三五教の裏返り者。貴様は三つの玉を持ち出して隠し場所に困り、狼狽へて居やがると云ふ事は、聖地へ入り込ましてある天州の報告によつて明かなる處だ。三五教でさへも皆貴様の所作だと目星をつけ、その在處を、四方八方に宣傳使が探ね廻つて居る。貴様は三五教の宣傳使にぶつつかるや否や、笠の臺がなくなる代物だ。それよりも綺麗薩張と白状致し、バラモン教に其玉を献上致し、蜈蚣姫様の片腕となり、俺と共に神業に奉仕する氣はないか」

玉能姫は微笑しながら、

「これは偉い迷惑、三五教の人達までが、さう私を疑つて居るのですか。そりや

嘘うそでせう」

初稚はつわかひめ姫こしゑは小聲こゑで、

「嘘うそです嘘うそです、玉能たまのひめ姫さま、眞實ほんとうにしちやいけませぬよ。三五あななひけう教はには一人ひとりとして貴女あなたを疑うたがつて居ゐるものはありませぬ。安心あんしんなさいませ。あんな事ことを云いつて氣きを引ひくのですからな」

玉能たまのひめ姫」ハ、アさうでせう。油斷ゆだんのならぬ奴やつですな」

スマート「こりやこりやコメツチヨ、要いらぬ智慧ちゑをつけやがるな。何なんだツ、チンピラの癖くせに、子供こどもは子供こどもらしくせい。これこれ玉能たまのひめ姫、何なんと云いつても調しらべ抜ぬいてあるのだから、このスマートボールの云いふ事ことに間違まちがひはあるまい。玉たまがないなら、ないで、玉吞たまのみひめ姫でも連つれて歸かへらねばならない。さア返答へんたふはどうだ。今度こんどは化ばけようと云いつたつて化ばけさせぬぞ」

「オホ、、、貴方あなた等がは徹底てつていした没分わからずや漢ですな。玉たまで見當けんたう違ちがひですよ」

「見當けんたうの取とれぬ仕組しくみと云いふぢやないか、その見當けんたうを取とるものがバラモン教けうだ。最も早や矢やは弦つるを離はなれたも同然どうぜん、【てつきり】俺おれ的ま的とは外はづれつこはない。一いち度ど放はなつた矢や

は行く處まで行かねば落ちつかないぞ。何と云つても貴様はバラモン教の恨みの  
的、否目的物だ。さアさア、ゴテゴテ云はずに、俺達の申す通りに包み隠さず云  
つて仕舞へ。それが却てお前の出世の因だ」

「オホ、私に別に出世なんかしたくはありませぬ。そんな執着心は疾うの  
昔に神様にお供へして仕舞ひました。病氣も、罪も、汚れも、一切残らず三五教  
の大神様に奉納した私、この瀧水のやうに綺麗薩張、今では水の御魂の水晶玉。  
お生憎様、なんにも御座いませぬよ」

「何ツ、水晶だと、それさへあれば三つの玉よりも優つて居る。さア其玉此方へ  
渡せ」

「オホ、何處迄も譯の分らぬ玉抜け男だ事。こんなお方にお相手して居つ  
ては處方がたまらぬ。御免なさいませ」  
と先へ進まうとする。

カナン「コレコレ女、かう見えてもバラモン教の蜈蚣姫が左守、右守の神様だ。  
玉能姫は三五教で、何れだけ地位をもつて居るか知らないが、到底俺達に比べも

のにはなるまい。些つとは禮儀を辨へて居るだらう、なぜ解決をつけてゆかないか」

玉能姫「オホ、、、、色のお黒い蜈蚣姫さまの御眷屬だけあつてお二人様、お色の黒い事、黒いにかけては天下無類の豪傑でせう。私は根つから、色の黒いのは蟲が好きませぬ」

「何だツ、善言美詞を使ふと云ふ三五教の信者が、人の顔の品評までやると云ふ事があるものか。他の顔が黒いなんて、女の分際で男を嘲弄致すのか」

「ホ、、、、、、貴方は色の黒いのが御自慢でせう。烏は黒いのが重寶、白鷺は白いのが重寶でせう。蜈蚣姫のお氣にいる貴方等だから黒いといつたのは、畢竟私が尊敬を拂つたのです。悪く取つて貰つちや困りますなア。あのまアお二人様とも揃ひも揃うてお黒い事、何方向いて御座るのか、近よつて見なくては分りませぬ」

カナン「オイ、スマート、なんぼ尊敬を拂ふと云つたつて、色が黒いと云はれるのは、根つから有難うないぢやないか」



スマート「何、此奴ア海千、川千、山千の化物だから、尊敬どころか、體のよい辭令を使つて俺達を極端に罵倒して居るのだよ。サアもう斯うなつては俺も承知がならぬ。オイ皆の奴、出て來い。此奴をふん縛つて布引の瀧へ投げ込み込むのだ」

「オーイ」

と答へて四邊の樹の茂みより十數人、バラバラと二人の周圍に駆け集まつた。

玉能姫「コレコレ初稚姫さま、確かりして居て下さいや。是から一つ私が奮闘し

て、皆の奴に一泡吹かせて改心をさせて見せませう。言靈戦も結構だが、彼様な

心の盲聾には言靈の效能は覺束ない。先づ第一着手として女の細腕が續く限り、

直接行動を開始致しませう」

と懷中より襷を取り出し、十文字にあやどり、裾を高くからげ、大地に四股を踏

み、兩手をひろげ、

「サア來い、來れ、木端武者共。三五教の玉能姫が武勇の試し時」

と兩手に唾しながら身構へた。六才の初稚姫も擦鉢巻を凜と締め、襷を十文字に

あやどり、袴の股立締め上げ、これ亦兩手を擴げ唾しながら、

「ヤアヤア、バラモン教を奉ずる小童共、初稚姫が幼の腕力を試すは此時、さア来い、来れ」  
と雄健びする其凜々しさ。

スマート「アハ、ハ、ハ、些つと洒落てけつかる。小さい態をして何だ。オイ皆の奴、こんな女二人位に大勢の男がかつたと云はれては末代の恥だ。俺一人で澤山だ。貴様等はこの活劇を觀覽してをれ。サア女、この腕を見よ。中まで鐵だよ」  
玉能姫「腕ばかりか、體一面黒い黒い鐵の様な眞黒黒助。水晶玉の玉能姫が、今汝の垢を落してやらう。サア来い、勝負だ」

「何ッ猪口才な、其大言後に致せ」

と頑丈な腕をぶんぶん云はせながら玉能姫に打つてかかる。玉能姫はヒラリと體をかはしスマートが足を掬つた途端、瀧壺へ「ドブン」と眞逆様。こりや大變だとカナンは忽ち揜鉢巻し、又もや鐵拳を振うて打ちかかる。初稚姫は、

「ホ、ハ、ハ、ホ、ホ、ハ、」

と體をしやくつて笑うて居る。玉能姫は、

「工、面倒な。汝も共に瀧壺へ水葬だ。覺悟致せ」

と飛びつき来るカナンボールの首筋に手を掛くるや否や、エイツと一聲、中空を二三遍廻轉し、瀧壺へ又もや「ザンブ」と落ち込んだ。十餘の荒男は二人の危急を見て、死物狂ひに前後左右より打ち掛かる。玉能姫は右から来る奴は左に投げ、左から来る奴は右へ投げ、前から来る奴は後へ放かし、後から抱きつき喰ひつく奴は身を縮めて前方の谷底へ「ステンドウ」と放り投げた。初稚姫は飛鳥の如く飛び廻り、

「ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、」

と笑ひ専門の活動をやつて居る。

此時數十人の足音が聞えて來た。近より見れば霧の中より現はれた眞黒黒助の蜈蚣姫、

「ヤアヤア、汝は三五教の玉能姫なるか、よくも吾等が部下を悩ましよつたな。此蜈蚣姫が現はれた以上はもう叶ふまい。サア尋常に降伏致すか。この谷口は數十人の部下を以て守らせあれば、汝が身は袋の鼠も同然、サア何うぢや。往生致

したか」

玉能姫「ホ、ホ、、噂に聞き及ぶ蜈蚣姫とは汝の事なるか。聞きしに勝る黒い婆ア

さま、雪より白い玉能姫が、此瀧壺へ放り込んで洗濯してやらう。サア来い」

と手に唾きして身構へすれば、蜈蚣姫はカラカラと笑ひ、

「蜈蚣の斧を揮つて龍車に向ふが如き、危い汝の振舞ひ。大人髑りの骨髑り、神

妙に降伏致したが汝の爲であらう」

「誠一つを貫ぬく三五教の宣傳使、汝が一族の身魂を此瀧水にさらし、水晶魂に

研いて呉れむ。有難く感謝せよ」

と婆の皺苦茶腕を取らむとすれば、婆も「しれ」者、その手を引きはづし、玉能

姫にウンと一聲當身を喰はせた。玉能姫は脆くも其場に倒れてしまった。後に残

つた初稚姫は又もや小さき兩手を擴げ、

「ヤア、蜈蚣姫、吾は三五教の信者、汝が眷屬共を残らず瀧壺に放り込み、身魂

の洗濯をしてやつて居るのに其御恩も知らず、玉能姫に當身を喰はすとは理不盡

千萬、もう斯うなる上は初稚姫が了簡ならぬぞや。サア来い、蜈蚣姫」

と手に唾する。

「オホ、玉能姫さへも此婆の手にかかつて、一溜りもなく氣絶致したではないか、コメツチヨの分際として武力絶倫なる蜈蚣姫に口答へ、否手向ひしようとは不埒千萬、道理が分らぬも程がある。ヤア無理もない、何を云うてもまだ子供だからな」

「満六才になつた初稚姫の細腕の力を喰つて見よ」

「何ツ、猪口才千萬な」

と武者振りつく。初稚姫は右へ左へ體を躲し、暫時が程は挑み戦ひしが、遂に蜈蚣姫の爲に組み敷かれ、今や息の根を絶たれむとする時しもあれ、瀧の上方より宣傳歌の聲が聞えて来た。蜈蚣姫は此聲に驚き、ハツと瀧壺の上を見上ぐる機に手が緩んだ。初稚姫はその虚に乗じ、「ムツク」と立ち上り、

「ヤア蜈蚣姫、もう此上は勘忍ならぬ。覺悟せい」

と小さき拳を固め、又もや打つてかかる。瀧の上の二人の男、

「ヤイ瀧公、あれは確に初稚姫様ぢやないか」

瀧公たきこう「思おもはぬ御ご遭さう難なん、お助たすけ申まをさねばなるまい。オイ谷丸たにまる、俺おれに續つづけ」

と壁かべの如ごとき岩いはに纏まとへる藤葛ふぢかつら、木きの枝えだなどを力ちからに、猿ましらの如ごとく下おりて來きた。谷丸たにまるは、

「ホー、貴女あなたは初稚姫様はつわかひめさま」

初稚姫はつわかひめ「ヤア谷丸たにまる、瀧公たきこう、よく來きて下くださつた。玉能姫たまのひめさまは氣絶きぜつして居をられます」

瀧公たきこう「何なにツ、玉能姫たまのひめさまが」

と兩人りやうにんは玉能姫たまのひめに向むかつて瀧水たきみづを含ふくみ、面部めんぶに吹ふきかける。

蜈蚣姫むかでひめ「エ、もう一息ひといきと云いふ處ところへ怪體けつたいな奴やつがやつて來きよつて、俺達おれたちの邪魔じゃまを致いたす

のか、覺悟かくごを致いたせ」

と婆ばばは谷丸たにまるに武む者しや振ぶりつく。谷丸たにまるは體たいを躲かはした途端とたんに婆ばばの足あしを浚さらへた。蜈蚣姫むかでひめは

傍かたはらの谷底たにそこへ、筋斗もんどりうつて顛落てんらくし、狐鼠こそ々こそと霧きりに紛まぎれて逃にげ出だした。スマートボー

ル、カナンボール其他そのたの連中れんちゆうは、思おもひ思おもひ濃霧のうむを幸さいひ四方よもに散亂さんらんしてしまつた。

玉能姫たまのひめは瀧公たきこうの介抱かいほうに初はじめて正氣しやつきづき、四邊あたりをきよるきよる見廻みまはし、

「初稚姫様はつわかひめさま 初稚姫様はつわかひめさま」

と呼よび立たてる。初稚姫はつわかひめは傍近そばちかく寄より添そひ、

「玉能姫様、安心して下さい、此通り無事で居ります。蜈蚣姫以下の悪者共は残らず退散致しました。谷丸さまや瀧公さまが危急の場合に現はれて、私達の危難を救うて下さったのですよ。これも全く神様の助け船、お喜びなさいませ」

玉能姫は此言葉にやつと胸撫で下し、

「ア、初稚姫様、御無事で何よりでした。谷丸様、瀧公様、有難う、よう来て下さいましたなア」

と嬉し涙に沈む。各瀧に身を清め、初稚姫の導師にて天津祝詞を奏上し終つて、

二三町許り谷道を下り、稍平坦なる芝生の上に身を横たへ息を休めた。

玉能姫「不思議な所へ貴方等がお越し下さいまして、加勢をして頂き、何ともお

禮の申しやうが御座いませぬ。さうしてお二人さま、何御用あつて、此處へお越

しになつて居たのですか」

谷丸は、

「實は貴女だから申上げますが、言依別さまの御供をして再度山の山頂迄参り、教主さまは一生懸命に何事もお祈りをして居られます。何でも大變な神様の御用

ださうです。つい今の先教主様は俄に神懸りにお成り遊ばして「汝等兩人、吾に構はず布引の瀧へこれから参れ、御用がある」と仰せになりましたので、兩人は何事ならむと山を驅け下り、瀧の上より眺めて見れば今の有様、私の用と申すのは此事で御座いましたでせう」

「それは御苦勞で御座いました。吾々二人は神様のお夢に感じ、此お山の頂に大變な御用があると承はり、生田の森の空助さまの館を立ち出で、初稚姫様の手を曳いて瀧の麓迄やつて來ました所、バラモン教の一味の者に取り圍まれ、既に危き所で御座いました。これと申すも神様の吾々への御試鍊でせう。いつもなら言靈をもつて言向け和すのですが、何だか今日に限つて腕を揮ひたくなつて参りました。實にお恥かしい事で御座います」

瀧公は、

「イヤ、何事も神界の御都合でせう。此先幾多の悪者、續出するかも知れませぬ、千騎一騎の時に用ふる武術ですから、強ち罪にもなりますまい」

初稚姫は優し味のある聲にて、



「是より言依別の教主に面會し、神界經綸上必要なる寶玉をお預り致し、或地點に埋藏すべく吾等は神務を帯びて居るのです。寶を付狙ふ惡魔は數限りもなく居ますから、武術を應用するも已むを得ませぬ。きつと神様はお許し下さりませう。谷丸、瀧公兩人、吾等二人を固く守り此山頂に案内致されよ」  
と云つて神懸りは元に復した。谷丸、瀧公は二人の前後を警護しながら、山頂目蒐けて登り往く。

言依別命は山頂の麗しき巖の上に、十重二十重に包みたる三個の玉を安置し、一生懸命に祈願を凝らす最中であつた。谷丸は、

「教主さま、唯今歸りました。大變な事が出来致して居ました」

「それは御苦勞であつた。初稚姫様、玉能姫様は御無事であつたかな」

「ハイ、危機一髪の時兩人が参りましたので、先づ生命だけは助かりました、やがて瀧公がお守り申して登つて來ませう。私は一足先に御報告のために、途中から急いで歸りました」

「あゝそれは御苦勞であつたなア」

と言依別命はニコニコ嬉しさうに笑つて居る。

『やつとこどつこい、うんとこしよ』

と一歩々々に拍子を取り、急坂を登つて来た瀧公は、峰の尾上に立ち、

『サアお二人さま、もう樂です。つい其處に教主が居られます。何でも貴女に結

構なものをお渡し遊ばさうです。御神諭にも「何んな人が、何んな御用をする

やら分らぬ」と示されて居ますが、肝腎の幹部のお歴々様には、素知らぬ顔をし

て、女や子供に御神徳、否肝腎な御用を御命じになるさうです。吾々は實に羨ま

しう御座います。併し乍ら聖地に於ては門掃き、草むしりばかりやらせられて居

つた吾々兩人が、肝腎の教主様の御微行の御供をさして頂いたのですから、實に

有難いものですよ。神様は公平無私ですから、人間の勝手に決めた階級などに頓

着遊ばさない。さうでなければ吾々も耐まりませぬからなア』

と教主の前に一歩々々近寄つて来る。

言依別命『皆さま、よく来て下さいました。随分この山は嶮岨で御困りでしたら

う』

玉能姫「イエイエ、神様のお蔭で知らぬ中に登つて参りました。昨夜神様の靈夢に感じ、初稚姫様を伴ひ當山に参ります途中、布引の瀧に於てバラモン教の一派に包圍せられ、進退谷丸處へ、布引の瀑布のやうな清い瀧公さまを初め、谷丸さまがお越し下さいます、一切の悶着も瀧水の如くさらさらと落着致しました。何か神界の御用を妾達に仰せつけ下さいますのでせうか」

「貴女は靈夢に感じながら、直ぐさま山頂に登らず、體を清めようなぞと思つて、【わき】道をなさつたものですから、一寸神様に誠められたのですよ。今後は何事も柔順になさいませ」

「有難う御座います」

初稚姫「教主様、御機嫌宜敷う御座います」

と小さき手を地に突いて挨拶する。言依別命も亦大地に手をつき丁寧に應答し、終つて、

初稚姫様、玉能姫様、貴方等は是から大望な御用を勤めて頂かねばなりません。それについては心の底迄見抜いた谷丸、瀧公の兩人をして御供をさせますれば、

何卒極秘密にして勤め上げて下さい。金剛不壞の如意寶珠の玉と紫の玉を、瀬戸の海の一つ島に埋藏する御用をお任せ致します。私が参るのは易い事ですが、餘り目立つては却つて秘密が破れますから、此處でお目にかかつたのです。玉能姫「エ、何と仰有います。あの紛失したと云ふお寶物が、これで御座いますか。錚々たる立派な幹部の方々がありませんるのに、私のやうな女風情が、斯様な大切な御用を承はつては分に過ぎます。何卒幹部の方に仰せつけられますやうに」

「澤山の宣傳使は居りますが、餘り淺薄で執着心が深く、嫉妬心が盛んで功名心に驅られ、且つ口の軽い連中ばかりで、誠の御用を命ずるものは一人も御座いませぬ。私は此事について日夜憂慮して居りました處、錦の宮の大神様に、玉照彦様、玉照姫様がお伺ひの結果、教主の私をお招きになり、「貴女等にこの御用をさせよ」との嚴格なる御命令で御座いました。是非共是は御辭退なされては御神慮に背きます。是非此御用にお仕へ下さいませ」

「ぢやと申して、餘り恐れ多いぢや御座いませぬか」

初稚姫はつわかひめ「玉能姫様たまのひめさま、教主様けうしゆさまのお言葉ことばの通りとほ、謹つしんでお受けうけなさいませ。私わたくしも喜よろこんで、御用ごようを承うけたまはりませう」

「左様さやうならば不束ふつつかながらお使つかひ下くださいませ」

「早速さつそくの御承知ごしやうち、大神様おほかみさまも嘸さぞ御満足ごまんぞくに思召おほしめすで御座ございませう。さア是これより谷丸たにまる、瀧公たきこうの兩人りやうにんは、お二方ふたかたを保護ほごし、二つふたの玉たまを埋藏まいざうすべく御供おともをして神島かみじまに渡わたつて呉くれ」

谷たに、瀧兩人たきりやうにんはハツと頭かうへを下さげ、

谷丸たにまる「私等わたくしらの如ごとき卑いやしき者ものに、此御用このごよう仰あふせつけ下くださいまして有難ありがたう存ぞんじます」

「今いまより谷丸たにまるに對たいし佐田彦さだひこと名なを與あたへ、瀧公たきこうに對たいし波留彦はるひこと名なを與あたふ。是これよりは佐田彦さだひこ、波留彦はるひことなつて大切たいせつなる御神業ごしんげふに奉仕ほうしされよ」

二人ふたりは有難ありがた涙なみだに暮くれつつ、

谷丸たにまる「大切たいせつな御用ごようを仰あふせつけられた上うへ、結構けつこうな御名おな迄まで賜たまはりまして、吾々われわれ身みに取とりて此上このうへなき光榮くわうえいで御座ございます」

「お禮れいには及およばぬ、皆大神様みなおほかみさまの御命令ごめいれいだ。今日けふから佐田彦さだひこの宣傳使せんでんし、波留彦はるひこの宣せん

傳使と任命する」

二人は夢かと許り打ち喜び、地上に頭を下げ歡喜の涙に暮れて居る。

言依別命「この玉は金剛不壞の如意寶珠、初稚姫さまにお預け申す。是は紫の玉、

玉能姫さまにお預け申す。も一つ黄金の玉、これは言依別が或靈山に埋藏して置

きます」

玉能姫「教主様は神島へはお渡りになりませぬか」

「三十餘萬年の未來に於て、此寶玉光を發する時、迎へに參ります。それ迄は斷

じて渡りませぬ。サア四人の方、此峰傳ひに明石の海邊を通り、高砂の浦より、

竊かにお渡り下さい。これでお別れ致します」

と言依別命は峰を傳ひ足早に姿を隠した。

此黄金の玉は高熊山の靈山に埋藏され、三口ク出現の世を待たれたのである。

其時の證として三葉躑躅を植ゑて置いた。三個の寶玉世に出でて光り輝く其活動

を、三つの御魂の出現とも云ふのである。

(大正一一・五・二八 舊五・二 加藤明子録)

第十九章 山と海〔七一〕

佐田彦は腰帶を解き、幾重にも包みたる玉函をクルクルと兩端に包み、肩に

「ふわり」と引掛け得るやうに荷造りした。波留彦は驚いて、

「コリヤ佐田彦、大切な御神寶を、何だ、貴様の肌につけた穢苦き三尺帯に包む

と云ふことがあるか、玉の威徳を流すと云ふことを心得ぬか。さうして其の態は

何だ。帯除け裸體になつて、みつともないぞ」

佐田彦「お前の帯を縦に引裂いて、半分呉れなければ仕方がない。藤蔓でも「ち

ぎ」つて帯にしよう」

「エー、そんなこととして道中が出来るか、みつともない。自分の帯は自分がして

行け。神玉の御威徳を流すぞよ」

「イヤ波留彦、さうでないよ。此山續きは随分バラモンの連中が徘徊してゐるか

ら、貴重品と見せかけて狙はれてはならぬ。幾重にも包んだ寶玉、滅多に穢れる

氣遣ひはない。斯うして往かねば劍呑だから」

「如何に劍呑だと云つて、そりや餘りぢやないか」

「萬劫末代に一度の大切な御用だ。二度目の岩戸開きの瑞祥を祝するため、言依別様が此再度山の山頂で、二度とない結構な御用を仰せつけられたのだ。失策つては大變だから、斯うして往くが安全だよ」

波留彦は、

「なんだか勿體ないやうな心持がするのだ。併し乍ら肝腎の寶を敵に奪られては一大事だから、そんならお前の言ふ通りにして行かう。サア、俺の帯を半分やらう」

と縦に眞中からバリバリと引裂いて佐田彦に渡した。佐田彦は、

「イヤ、有難う。これで確かに腹帯が締つて來た。併し乍ら玉能姫さま、初稚姫さま、貴女等はそんな綺麗な服装で御出になつては、惡漢に後をつけられては詮りませぬよ、何とか工夫をなさいませ」

玉能姫「ハイ、吾々二人は着物を裏向けに着て、氣違ひの眞似をして参りませう」  
佐田彦「ヤ、それは妙案だ。流石は玉能姫様だ。サアサア、佐田彦が着替へさ



して上げませう」

と立ち上らむとするを玉能姫、初稚姫は首を左右に掉り、

玉能姫「イエイエ、滅相な、妾も玉能姫、自分のことは自分で處置をつけねばな

りませぬ」

と云ひつつ、クルクルと帯を解き、裏向けに着物を着替へて了つた。

初稚姫も亦着物を脱がうとするを、玉能姫は少し首を傾け、

「一寸待つて下さい。氣違ひが二人もあつては却つて疑はれるかも知れませぬか

ら、貴方は氣違ひの娘になつて下さい」

初稚姫「そんなら氣違ひのお母さま。サア、何處なつと参りませう」

玉能姫「オイ佐田公、波留公、貴様は何處の奴だ。餘程好いヒヨツトコ野郎だな」

佐田彦「これはしたり、玉能姫さま、姫御前のあられもない、何と云ふ荒いこと

を仰有りますか」

「知らぬ知らぬ、アア、斯んなヒヨツトコ野郎の莫迦者と道伴れになるかと思

へば残念だ。氣が狂ひさうだ」

「玉能姫さま、今から氣違ひになつて貰つては波留彦も堪りませぬで」

「伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ。大根役者が玉を持つ、コリヤコリヤコリヤ」

佐田彦「玉能姫さま、洒落も可い加減になさいませな。これから未だ澤山な道程、

今から氣違ひの眞似して居つては忪りませぬで」

「なに、妾を氣違ひとな。エー残念だ。バラモン教に於て其の人ありと聞えたる

鬼熊別の妻、蜈蚣姫とはわが事なるぞ。汝は三五教の腰拔宣傳使、この蜈蚣姫が

尻でも喰へ。残念なか、口惜しいか。あの詮らぬさうな顔付ワイの。オホ、、、

と臍を抱へて笑ひ倒ける。

佐田彦「アー、仕方がないなア、あんまり嬉しうて玉能姫さまは本當に逆上せて

了つたのだらうかなア、波留彦」

玉能姫「定めて逆上せたのであらう。逆上せ切つた蜈蚣姫の再來が、お前の頭を

ポカンと波留彦だ」

と言ひながら波留彦の横面をピシヤピシヤと撲り、

「アハ、、、」

と腹を抱へて笑ひ倒ける。

波留彦「なんぼ女にはられて気分が好いと言つても、キ印に撲られて恠るものか。

さア行きませう、玉能姫さま、確かになさいませ」

玉能姫「ホ、私、私は玉能姫ぢやないよ、狸姫だよ」

波留彦「エー、怪體の悪い、肝腎の御神業の最中に「やくたい」だなア。初稚姫

さま、ちつと確かに言つて聞かして下さいな。コリヤ本當に逆上せて居ますで」

初稚姫「お母さま、往きませう」

とすがり付く其の手を取り放し、

「エー、お前迄が私を氣違ひと思つて居るのかい。ア、穢らはしい。斯んな所に

は一時も居れない」

と二つの玉を包んだ帯を肩に引つかけ、山傳ひに雲を霞と走り行く。

初稚姫は負けず劣らず、玉能姫の後に隨ひ矢の如く走り行く。佐田彦、波留彦

は遁げられては大變と一生懸命に後を追ふ。何時の間にか玉能姫、初稚姫の姿は

見えなくなつた。

佐田彦「オイ、波留彦、大變なことが起つたものぢやないか」

「貴様が確り握つて居らぬから、到頭狸が憑りやがつて持つて去んで了つたのだい。ア、もう仕方がない、神様に申譯がない。此絶壁から言ひ譯のために身を投げて死んで了はうかい」

「さうだと言つて、そんな事をすれば益々神界の罪だよ」  
と心配さうに悔んでゐる。

向ふの木の茂みから、

「オイ、波留彦さま、佐田彦さま、此處だよ此處だよ」

と玉能姫は呼んでゐる。

波留彦「ヤア、在處が分つた。氣違ひ奴、あの禿げた山の横の小松の下に顔だけ出してゐるよ、表から行くと又逃げられては大變だ。廻り道をしてそつと捉まへようかい」

と二人は山路を外し、木の茂みの中を蜘蛛の巣に引つかかりながら、漸く玉能姫の間近に寄つた。

玉能姫「あの二人の御方、よう来て下さりました。「たま」たま御用を仰せつけられながら、玉能姫に玉を奪られて玉らぬだらう。さアさア初稚姫さま、あんなヒヨットコ野郎に構はず行きませうよ。ホ、ホ、」

と嘲笑ひと共に掻き消す如く、又もや一目散に木の茂みを脱けて、何處へか姿を隠した。二人は一生懸命に追ひかける。初稚姫の計らひで處々に小柴が折つて標がしてある。

佐田彦「ヤア、流石は初稚姫さまだ。子供に似合はぬ好い智慧が出たものだ。俺達に之を合圖に來いと云つて、小柴を所々折つて標をつけて於て下さつた。オイ、之を探ねて走らうぢやないか、のう波留彦」

「オーさうだ」

と二人は挨拶卷しながら、小柴の折れを目標に追ひかけて行く。

鷹鳥ヶ嶽の山麓の松林に七八人の男、胡床を掻き車座になつて、ひそびそ話に耽つてゐる。

甲「オイ、大變に強い女もあればあるものぢやないか。俺達の兄分のスマートボー

ルやカナンボールを苦もなく瀧壺へ投げ込み、剩つさへ俺達を谷底へ投げ込みやがつて、此通り痛い目に遇はせ、終局の果には蜈蚣姫の教主様まで、あんな目に遇はせよつた。彼奴は何でも偉い神様の再來かも知れないよ」

乙「なアに、彼奴は玉能姫と云つて鷹鳥山の鷹鳥姫の婢奴となり、清泉の水汲をやつて居つた奴だ。あの時は此方は女や子供と思つて油断をして居たから、あんな不覺を取つたのだ。何れ此邊へ迂路ついて來るかも知れない。なんでも彼奴を捉まへて三五教の寶の在處を白状させ、バラモン教へ占領せねば、到底此自轉倒島に於ては俺達の教派は擴まらない、なんとかして、まア一度彼奴の行方を探ね、目的を達したいものだ」

丙「そんな危ないことは止しにせ工。生命あつての物種だ。蜈蚣姫さまでさへも彼奴の乾兒がやつて來て、谷底へ放り投げたやうな強力が隨いてゐるから、うつかり手出しは出來ないよ」

甲「ちよる臭いことを云ふな。計略を以て旨く引張り込めば何でもなし。俺が一つ智慧を貸してやらう」

丙「どうすると云ふのだい」

甲「貴様等二三人が俺と一緒に女に化けて鷹鳥山に乗り込み、三五教の求道者と

なつて誤魔化すのだ」

乙「貴様の面では女に變装したつて到底駄目だよ。貴様が變装したら、それこそ

鬼婆に見えて仕舞ふぞ」

甲「鬼婆でも、鬼爺に見えなければ宜いぢやないか。それで完全な女になつたの

だ。善悪美醜は問ふところに非ず。俺は皺苦茶婆さまになつて入り込むから、貴

様は皺苦茶爺になつて、杖でもついて腰を屈め、俺の後に踵いて來い」

乙「いつその事、堂々と男の求道者になつて行つたらどうだ」

丙「そんな悪相な面をして行かうものなら、忽ち看破されて了ふぜ」

斯く雑談に耽る折しも、向ふの方より一人の女、何か肩に引っかけ、髪を振り

亂し、衣服を裏向けに着ながら、女に似合はず大股にトントンと此方に向つて來

る。

七歳ばかりの少女は、

「お母さま お母さま」

と連呼しながら後追ひかけ来る。又もや續いて二人の荒男、

「オーイオーイ。待った待った」

と一生懸命に息を喘ませ進み来る。

甲「アリヤ何だ、【あた】嫌らしい。髪を振り亂し着物を裏向けに着やがつて、

禪に何だか石のやうなものを包んで走つて来るぢやないか。彼奴は【てつきり】

氣違ひだよ。氣違ひに嘔ぶりつかれでもしたら、まるで犬に喰はれたやうなもの

だ。オイ、皆の奴、すつこめ すつこめ」

「よし来た」

と林の草の中に小さくなつて横たはる。その前を踏まむ許りに玉能姫、初稚姫は、

「キヤア キヤア」

と金切聲を張り上げながら通つて行く。二人の男汗を垂らし、

「オーイ、氣違ひ待った」

と又もや一生懸命西方指して進み行く。一同はやうやう頭を上げ、



甲「ヤー何處の奴か知らぬが、女房が氣が狂つたと見えて、偉い勢で追ひかけて行きよつた。可愛相に、あんな娘がある仲で、女房に發狂されては忪つたものぢやない。併しなかなか別嬪らしかつたぢやないか」

乙「さうだなア、可愛相なものだ。先へ行つたのはあれの爺だらう。後から行く奴はヒヨツとしたら下男かなんかだらうよ。何は兔もあれ、どえらい勢だつた。まるきり夜叉明王が荒れ狂うたやうな勢だ。マアマア俺達は無事に御通過を願うて幸ひだつた」

と話してゐる。暫らくすると蜈蚣姫は、スマートボール、カナンボール其他拾數人の部下を引連れ、一生懸命に此場に駆け來り、五六人の姿を見て、

「オイ、お前は信州、播州、藝州の連中ぢやないか。なにして居る。今此處へ玉能姫が通つた筈だがお前は知らぬか」

信州「最前から此處で一服して居ましたが、玉能姫のやうな奴は根つから通りませぬで。髪振り亂した氣違がキヤアキヤア云つて通つたばかり、後から爺が可愛相に汗をブルブルに掻いて追つかけて行きました」

「どうしても此處を通らにやならぬ筈だが、八テ不思議だなア。それなら大方空助館へでも廻つたのだらう。一體何處へ行きよるのか。皆の奴、斯うしては居られない。再度山の山麓、生田の森に引返せ」  
と慌しく呼ばはつた。スマートボールを先頭に全隊引率れて、東を指して一生懸命バラバラと走り行く。

梢を渡る松風の音、刻々に烈しくなり、瀬戸の海の浪は山嶽の如く吼り狂うてゐる。玉能姫、初稚姫は漸々にして高砂の森に着いた。四邊に人なきを幸ひ、亂れ髪を掻き上げ、顔を立派に繕ひ、着物を脱ぎ替へ、元の玉能姫となつて了つた。息急き切つて走り來つた佐田彦、波留彦は此の姿を見て、  
佐田彦「ヤ、玉能姫さま、氣がつかしましたか。大變心配でしたよ」  
玉能姫「オホ、お約束通り上手に氣違に化けたでせう。須磨の濱邊の難關を、あゝせなくては通過が出來ませぬからなア」  
佐田彦「イヤもう恐れ入りました。流石言依別命様が御見出し遊ばしただけあつて、佐田彦如き凡夫の到底及ばぬ智慧を持つてゐなさるなア」

波留彦「本當に七尺の男子波留彦も鞆丸を放かしたくなつて來ました。ア

ハ、ハ、ハ

佐田彦「それにしても初稚姫さま、小さいのによく踵いてお出でなさいましたなア。何時もお父さまに甘へて負はれ通したのに、今日は又どうしてそんな勢が出たのでせう」

「神様が私を引つ抱へて來て下さいました。あの大きな神様が御目に止まりませ何だか」

「さう聞くと何だか大きな影の様なものが、始終踵いて居たやうに思ひました」  
「【かげ】が見えましたか。それが神様の御【かげ】ですよ。オホ、ハ、ハ」  
「子供の癖によく洒落ますなア。シヤレシヤレ恐れ入りましたもので御座るワ

イ

「サア、これから高砂の濱邊へボツボツ参りませう。幸ひに日も暮れました」  
と玉能姫は先に立つ。三人は欣々と後に隨ひ、濱に立ち向ふ。

五月五日の月は西天に輝き、薄雲の布を或は被り或は脱ぎ、月光明滅、四人が

秘密の神業を見え隠れに、窺ふものの如くであつた。鳴門嵐の暴風は遠慮會釋もなく海面を撫で、山嶽の如き荒浪は立ち狂ひ、高砂の濱邊に押寄せ、驛馬の鬣を振つて噛みついて居る。

佐田彦は、猿田彦氣取りで先に進み、船頭の家を叩き、

「モシモシ、船頭さま、これから家島へ往くのだから、船を出して下さいな。賃銀は幾何でも出しますから」

船頭は家の中より、

「何處の方が知らぬが、何を呆けてゐるのだ。レコード破りの荒浪に、如何して船が出せるものかい。こんな日に沖に出ようものなら、生命が【いくつ】あつても堪るものでない。マア、二三日風の凪ぐ迄待つたらよからう」

佐田彦は小聲で、

「ハテ、困つたなア。吾々はどうしても家島へ渡らねばならないのだ。せめて中途の神島までなつと送つて呉れないか」

「なんと云つても此の時化には船は出せないよ。桑名の徳藏ならばイザ知らず、

俺達おれたちのやうな普通ふつうの船頭せんどうでは、到底たうてい駄目だめだよ。こんな日ひに船ふねを出だす位くらゐなら、家いへもなんにも要いつたものぢやない。そんな分わからぬことを言いはずと、二三日にさんいち待まつたがよからうに」

「どうしても出だして呉くれませぬか、仕方しかたがない。それなら船ふねを貸かして下くださいな」  
「滅相めつさうもないこと仰おつしや有あるな。船ふねでも貸かさうものなら商賣しやうばい道具だうぐを忽たちまち滅茶めちや々めちやにされて了しまうて、女房にようぼうや子の鼻はなの下したが乾ひあがつて了しまふ。一つひとつの船ふねを慥こしうへるにも百兩ひゃくじやうの金子かねが要いるのだ。自家うちの身代しんだいは此この船ふね一つだ。マア、そんなことは絶對ぜつたいに御斷おことわり申まをさうかい」

「未まだ外ほかに船頭せんどう衆しゆうはあらうな」  
「此この濱邊はまべには二三十にさんじふにん人の船頭せんどうが居をる。併しかし乍ながら開闢かいびやく以來いらい、この荒浪あらなみに船ふねを出だすやうな莫迦ばかも者は一人いちにんも居をりませぬワイ。今日けふは五月五日ごごわついつか、菖蒲しやうぶの節句せつく、神様かみさまが神かみ島じまから高砂たかさこへ御出おいで遊あそばす日ひだから、尚々なほなほ船ふねは出だせないのだ。假令たとへ浪なみはなくとも今日けふ一日いちいちは、此この海うみの渡海とかいは出で来きないのだ。暮六くれむつから神様かみさまが高砂たかさこの森もりへお越こしになるのだ。モ一いまごろ今頃いまごろは神島かみじまを御出立遊ごしゆつたつあそばして御座ござる時分じぶんだよ。何なんとしてそんな

處へ行くのだい」

「俺は家島へ行くのだ。浪の都合で一寸御水を頂きに神島へ寄りたいたいと思ふのだよ」

船頭は不思議な奴が出て来たものだとかきながら表に立出で、

「ヤー、見れば若い御女中に娘さま。お前さま等も御一行かな」

玉能姫「ハイ、左様で御座います。どうぞ船を御出し下さいませ」

船頭頻に首を振り、

「アーいかぬいかぬ、途方もないこと云ひなさるな。男でさへも行かれぬ處へ、

妙齡の女が渡ると云ふことは到底出来ない。平常の日でも女は絶対に乗せることは出来ませぬワイ」

初稚姫「小父さま、そんなら其の船を賣つて御呉れぬか」

「賣つて呉れと云つたつて、中々安うはないぞ。百兩もかかるのだから」

「それなら小父さま、二百兩上げるから、お前の船を賣つてお呉れ」

「百兩の船を二百兩に買つて貰へば、船が二隻新調出来るやうなものだ。それは

誠に有難いが、併し乍らみすみすお前さま達を海の藻屑となし、鱧の餌食にして  
了ふのは何程欲な船頭でも忍びない。そんなことは言はずに諦めて歸つて下さい。  
男の方なら二三日したら船を出して上げよう』

『女は何うしていけないのですか』

『ア、いけないいけない。理屈は知らぬが、昔から行つたことがない島だから  
佐田彦 船頭さま、そんなら時化が止んでから明日でも俺達が勝手に漕いで行く  
から、二百兩で賣つて下さい』

『百兩のものを二百兩に賣ると云ふことは、大變に欲張つたやうで氣が濟まぬが、  
併し船を賣つて了へば、次の船が出来るまで徒食をせねばならぬから、貯蓄の無  
い俺達、そんなら二百兩で賣りませう』

『有難い、そんなら手を打ちます。一、二、三』  
と船頭と佐田彦は顔を見合せ、手を拍つて了つた。

初稚姫は懷より山吹色の小判を取り出し、

『サア、小父さま、改めて受取つて下さい』

と突き出す。船頭は検めて見て、

「ヤー、有難う、左様なら。モウ一旦手を拍つたのだから、變換へは利きませぬよ」

と言ひ捨て、恐さうに家に飛び込み、中よりピシヤンと戸を閉め、丁寧に突張りを「こう」てゐる。波は益々猛り狂ふ。

「ア、此の船だ。サア皆さま、乗りませう。ちつと荒れた方が面白からう」

と佐田彦は先に飛び込んだ。三人も喜んで船中の人となつて了つた。

佐田彦「サア、波留彦、權を使つて下さい。俺は船頭だ。艀を漕いで行く。随分

高い浪だよ」

とそろそろ挨拶巻になつて、艀を操り始めた。

月は雲押し開きて利鎌のやうな光を投げ、四人の乗つた神島丸を照して居る。

不思議や暴風は忽ち止まり、浪は見る見る疊の如く凪ぎ渡つた。二人は一生懸命

に權を操りながら、沖に浮べる神島目標に漕ぎ出した。漸くにしてミロク岩の磯

端に横付けになつた。



玉能姫 皆さま、御苦勞でした。貴方等二人は此處に待つて居て下さい」

佐田彦 「イ私も御供を致しませう。これ丈篠竹の茂つた山、大蛇が澤山に居る

と云ふことですから、保護のために吾々兩人が御供致しませう。言依別の教主様

より「兩人の保護を頼む」と云はれたのだから、もし御兩人様が大蛇にでも呑ま

れて了ふやうなことが出来たら、それこそ申譯がありませぬ。是非御供を致し

ます」

初稚姫 「その大蛇に用があるのだから、来て下さるな。大蛇は男が行くと大變に

腹立てて怒るさうですから」

波留彦 「大蛇でも矢張り女が好いのかなア。斯うなると男に生れたのも詮らぬも

のだ」

玉能姫 「さア、初稚姫さま、参りませう。御兩人の御方、決して、後から来ては

なりませぬよ。用が濟んだら呼びますから、それまで此處に待つてゐて下さい」

二人は頭を掻き乍ら、

佐田彦 「エー仕方がない。役目が違ふのだから、そんなら神妙に待つて居ます。

御用が濟んだら呼んで下さい」

玉能姫「ハイ、承知しました。何うぞ機嫌よう待つて居て下さいませ」

と初稚姫の手を把り、篠竹を押分け山上目蒐けて登り行く。

辛うじて二人は山の頂に到着した。五六歳の童子五人と童女三人、黄金の鍬を

持つて何處よりともなく現はれ來り、さしもに堅き岩石を瞬く間に掘つて了つた。

初稚姫「アー、貴女は嚴の身魂、瑞の身魂の大神様、只今言依別命様の御命令に

依つて、無事に此處まで玉の御供をして參りました。さア、何うぞ納めて下さい」

五人の童子は「にこ」にこ笑ひながら、ものをも言はず一度に小さき手を差出

す。初稚姫は金剛不壞の如意寶珠の玉函を取り、恭しく頭上に捧げながら五人の

手の上に載せた。十本の掌の上に一個の玉函、忽ち五瓣の梅花が開いた。童子は

玉函と共に、今掘つたばかりの岩の穴に消えて了つた。

三人の童女は又もや手を擴げて、玉能姫の前に進み來る。玉能姫は紫の寶珠の

函を取り上げ、恭しく頭上に捧げ、次で三人の童女の手に渡した。童女はものを

も言はず微笑を浮べたまま、玉函と共に同じ岩穴に消えて了つた。玉能姫は怪し

んで穴を覗き見れば、童男、童女の姿は影もなく、只二つの玉函、微妙の音聲を發し、鮮光孔内を照らして居る。

二人は恭しく天津祝詞を奏上し、次で神言を唱へ、天の數歌を歌ひ、岩蓋をなし、其上に今童女が捨て置きし、黄金の鍬を各自に取り上げ、土を厚く衣せ、四邊の小松を其上に植ゑて、又もや祝詞を奏上し、悠悠として山を下り行く。

玉能姫は、

「お二人さま、【えらう】御待たせしました。さア、もう御用が濟みました。歸りませう」

佐田彦、波留彦兩人は口を揃へて、

「それは結構で御座いました。御目出度う。これから私等が一度登つて來ますから、暫らく此處に待つて居て下さいませ」

初稚姫「モ一御用が濟みましたのですから、一步も上つてはなりません。さア歸りませうよ」

佐田彦「折角此處迄苦勞して御供をして來たのだから、埋めた跡なりと拜まして

下さいな」

初稚姫は首を左右に振つてゐる。玉能姫を見れば、是亦無言の儘首を左右に振

つてゐる。何處ともなく雷の如き聲、

一刻も猶豫はならぬ。これより高砂へは寄らず、淡路島を目標に再度山の麓に

船をつけよ。サア、早く早く」

と唸鳴るものがある。此言葉に佐田彦、波留彦は、

「ハイ、畏まりました」

と玉能姫、初稚姫を迎へ入れ一生懸命に櫓櫂を操りつつ、再度山の方面指して歸

り行く。

(大正一一・五・二八 舊五・二 外山豊二録)

第二〇章 三の魂(七一二)

時置師神は、神の仕組の時津風、吹き渡る初夏の青葉の薫りを身に浴び乍ら窓外を眺め居る。時しも森の木蔭より玉能姫は初稚姫の手を携へ、二人の荒男と共に欣然として歸り来る。空助は窓を引き開け拍手して之を迎へて居る。二三日前より此家に訪ね來りし高姫、國依別は、空助と教理を鬪はし乍ら此處に逗留して居た。

高姫「空助さま、貴方は今東の窓から手を拍ちましたが、日天様は西の方へ廻つて居られますよ」

「いや、今此處へ日天様や、月天様が御いになりましたから」

「國依別には日天月天の往かぬ事を仰有いますな」  
と云ひながら窓を覗き、

「ヤア、お歸りになりました。空助さま、お目出度う、今迄御心配でしたらう」

「ハイ、空助も一寸心配して居りましたよ」

高姫は妙な顔しながら、

「貴方は口では平氣で言つて居らつしやるが、矢張り初稚姫様の事が氣に懸ると

見えますなア」

「別に初稚姫様の事に就ては、神様がついて御座るから心配は致しませぬが、大切な御用を巧く勤めあげたか知らぬと思つて居つたので……然しあの顔色で見れば、巧く御用が出来たらしいですよ」

「大切の御用とは……それや又どんな事で御座いますか。高姫にも聞かして下さいな」

空助はニコニコ笑ひながら、

「ハイ言依別命様から大切な祕密の御用を……玉能姫、初稚姫の御兩人が承はりましたのですよ」

「妾の様な日の出神の生宮を差措き、あの様な子供や若彦の女房に大切な御用を仰せ付けるとは……言依別も些と聞えませぬ。それだから人を使ふ目が無いと言ふのだ。困つたハイカラの教主だなア」

空助は、

「アハ、ハ、ハ」

と嬉しさに笑ふ。國依別は門の戸を押し開き、丁寧に出迎へ、

「皆さま、御苦勞で御座いました。無事に納まりましたかな」

二人は顔に笑を湛へながら一言も發せず、丁寧に腰を屈め、二人の男と共に欣々と這入つて來た。空助は見るより、

「初稚姫様、玉能姫様、谷丸さま、瀧公さま、御苦勞で御座いました」

谷丸「私は言依別命様より佐田彦の宣傳使と名を賜はりました。瀧公さまは波留

彦の宣傳使と名を賜はりましたから、何卒今後は、其お心組で呼んで下さい。お

節……いやいや玉能姫様、初稚姫様のお伴を致しまして神島……ではない、

神様の御用に參つて來ました。いやもう大變な結構な事で御座いましたわ」

空助「何は免もあれ、神様に御禮を申し上げ、お祝の御神酒を頂戴する事に致し

ませう」

高姫「ア、それは結構で御座いますな。然し如何な御用で御出でになさつたの

か、高姫にも様子を聞かして下さいませ。これ玉能姫さま」

玉能姫「此事ばかりは三十五萬年の間、申し上げる事は出來ませぬ。何れ未來で

お分りになるでせう」

高姫 「何と…：…マア遠い…：…氣の長い事だなア」

空助 「何處の地點に納めたと云ふ事は申し上げ難いが、實際は貴方の一旦呑んで居た金剛不壞の如意寶珠と紫の寶玉が三五敎の教主の手に返り、其御用を仰せ付かつて或る靈地へ埋藏の御用に行つたのですよ。黄金の玉は言依別の教主自ら何處かの靈地へ埋藏されたさうだ。これで三つの御玉が揃ひまして…：…高姫さま、お喜びなさいませ」

高姫、怪訝な顔して舌を捲き目を剥き、

「へエ、ケ、ケ、ケ、結構ですなア」

と云つたきり、嬉しい様な、悲しい様な、不興くさい様な顔して俯向く。國依別、手を拍つて笑ひ、

「ハ、ハ、ハ、ハ、日の出神の生宮も薩張り往生遊ばしたか、誠にお氣の毒の至り。

然し乍ら矢張り高姫さまも喜ばねばなりませんまい。もう之で貴方の副守護神の斷念が出来来るでせう。是から一意専心、教主の意見に従つて、神界の御用をなさい



ませ」

高姫「ハイ、如何も神様は皮肉な事をなさいますな。寝ても醒めても玉の行方を探し、神政成就の御用を勤めあげむと、千騎一騎の活動を致して居る此高姫をア  
フンと致さして、思ひも寄らぬ人達に、肝腎な一厘の経綸を吩咐けるとは……妙  
な神様も……いや教主もあるものだ。教主の「きやう」は獸扁に王さまだらう、  
オホ、、、、」

佐田彦「是は聞き捨ならぬ高姫の言葉、その脱線振りは何事で御座るか。今迄の  
谷丸ならば黙つて居るが、最早教主より命ぜられたる宣傳使だ。宣り直しなさね  
ば承知せぬ」

波留彦「佐田彦宣傳使の言はれた通り、速に宣り直しなさるが宜からうと、波留  
彦は思ひます」

高姫「高姫鐵道の終點、アフンの驛に着いたのだから、脱線の餘地も無く、【の  
り】直し様もなく、乗り替へも何の驛もないぢやありませんか。オホ、、、、」

因ちなみに言依別命ことよりわけのみことは、一旦いつたん高熊山たかくまやまの靈地れいちに神祕しんぴの經綸けいりんを遂行すゐかうし、聖地せいちに歸りて神業しんげふに參じ、錦にしきの宮みやの神司かむづかさま玉照彦命たまてるひめのみこと、玉照姫命たまてるひめのみことの神示しんじを海外かいぐわいにまで弘布こうふし、八岐大蛇やまたをろちの征服せいふくに従事じうじする數多あまたの神人しんじんを教養けうやうし、其名そのなを天下てんかに轟とどろかした神代かみよの英雄神えいゆうしんである。また空助もくすけは元の時置師神ときおかしのかみと現あらはれ、聖地せいちの八尋殿やひろどのに於て教主けうしゆを助け、初稚姫はつわかひめと共に忠實ちうじつに奉仕ほうしし、三五教あななひけうの柱石ちうせきと呼ばれる事こととなつた。玉能姫たまのひめは生田いくたの森もりに止り、或神命あるしんめいを帶びて稚櫻姫命わかざくらひめのみことの神靈しんれいを祀り、五六七神政みろくしんせいの魁さきがけを勤めた。若彦わかひこは自轉倒島全體おのころじまぜんたいを巡歴じゆんれきし、終に神界しんかいの命めいによりて玉能姫たまのひめと共に神靈しんれいに奉仕ほうしする事こととなつた。國依別くによりわけは兄あにの眞浦まうらが波斯フサの國くにへ出で行きしを以て、已むを得ず宇都山郷うづやまがうの武志たけしの宮みやに仕へて神教しんけうを傳へ、父ちちの松鷹彦まつたかひこに孝養かうやうを盡した。高姫たかひめは聖地せいちにあつて錦にしきの宮みやに仕へつつありしが、黒姫くろひめのあとを追うて海外かいぐわいに渡り、眞正しんせいの日の出神でのかみに出會しゆくわいし、初めて自己じこの守護神しゆごじんの素性すじやうを悟り、悔くい改あらためて大車輪しやりんの活動くわつどうを續けた。佐田彦さだひこ、波留彦はるひこは言依別命ことよりわけのみことの膝下しつかにあつて、神業しんげふを輔佐ほさすることとなつた。

たいしやみづのえいぬ 大正壬戌の年 卯月の二十八日に

にじふににん 二十二人の生魂 三つの御玉の隠し所

のをは 述べ終りたる 今日の日は 樂しき神世を五六七殿

ひ かみ つき おほみかみ 日の神、月の大御神 天照皇大神や

このよ おや 此世の祖神と現れませる 國常立之大御神

とよくにぬし おほみかみ 豊國主の大御神 大本教を守ります

ももちよろづ かみがみ 百千萬の神々の 貴の御前に飛び降る

かみ つかひ れいよつ 神の使の靈鷹は 生田の森や再度山の

みね をへ おんしぐみ 峰の尾の上の御仕組 鷹鳥姫の改心の

ずみしやうい は そのた 瑞祥祝ふ其爲めに 三度舞ひ來る鷹津神

ひろ でんない さしもに廣き殿内を 右や左と翔び交ひて

がく はね やす 畫龍の額に翼休め 假設劇場の梁に

いづいづいばな やす 悠々翼を休めたる 今日の日こそ

みづ みたま うま 瑞の御魂の生れたる 生日に因みて七百と

十二の章も面白く

松雲閣の奥の間に

今日は珍し身を起し

神の教を敷島の

筆者を煙に巻き乍ら

遠き神代の物語

今に寫して眺むるも

少しも變らぬ言の葉の

榮ゆる御代を「松村」氏

天津御空も海原も

心「眞澄」の玉鏡

海の内「外」の隔てなく

諸越「山」も乗り越えて

「豊」九「二」主の分靈

瑞の神徳天地に

輝く時も「北村」の

空澄み渡り「隆」々と

「光」り普き神の道

亞細亞、亞弗利加、歐羅巴

亞米利「加藤」く高砂の

島の果まで説き「明」す

「近藤」の靈界物語

道も「貞」か「二」成り行きて

「山」の尾の「上」や野の末も

教の花の馥「郁」と

薰も床しき「佐賀」の奥

神の「伊佐男」は遠近に

「秀妻」の國を初めとし

おのころじま 自轉倒島の【中】心地 【野】山も青く茂りつつ  
かみよ 神代を【祝】はふ 今日けふの空 神世かみよの祕密ひみつ洩もらさじと  
みそら 御空を隠す雲の戸を 開ひらいて此處ここに【松】の【雲】  
しようつんかく 【松雲閣】の奥おくの室まで 初夏しよかの風かぜをばあびながら  
にじふにくわん 二十二卷の物語 目出めでたくここに述のべをはる  
あゝ惟かむながらかむながら神々々 御靈幸みたまさちはひましませよ

（大正一一・五・二八 舊五・二 北村隆光録）

（昭和一〇・六・五 王仁校正）

（ ）

靈界物語 第二二卷 如意寶珠 酉の巻

終り